平成30年10月1日発行第15巻第5号通巻115号

cover illustration by ぽっしい

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

2018 10 Volume.102 DIGITAL EDITION

18 未満

今号の特集 Special Fetishism Series

引退ヒロイン

もうおばさんなのに こんな格好で戦うなんて…

【えっちマンガ】
白う～凪い
ぱふぇ
楠木りん
歌麿
冥土黄泉
嘉納あいら

【連載&読み切り小説】
上田ながの×ぽっしい
黒名ユウ×ポリス
黒井鶏×凪丘
天戸祐輝×秋月からす
松島大奥×比呂之
杉山清×白崎アロエ

『超昂神騎エクシール』
峰崎龍之介×孫陽州
原作：ALICESOFT

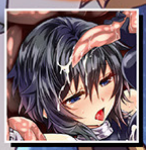
新連載スタート!

変幻装姫 シャインミラージュ
SHINE MIRAGE
砕かれるプライド、穢される存在

大人気変身ヒロイン小説の新作が登場!

小説：でぃふぃーと 挿絵：高浜太郎

表紙&ピンナップ テレホンカード 応募者全員サービス



カラーピンナップ COLOR PINUP

天海雪乃
とけーうさぎ
ぽっしい

試し読み版

人妻女戦士
Madam Warrior Refina
レフィーナ
昔取った杵柄は油断をうみ、
引退した人妻戦士を
終わらぬ淫獄へと引きずり込む……
小説／上田ながの
NOVEL
挿絵／ぼっしい
ILLUSTRATION

「おぁあああ！　死ねぇええ!!」
紅い髪をはためかせながら斧を振るい、目の前の魔物を叩き斬る。魔物がどんなに怯え、どんなに命乞いをしてきても許しはしない。人に害をなす可能性があるものは容赦なく殺す。それが魔物殺し、または血塗れ闘士――と呼ばれた女傭兵レフィーナのやり方だった。
ただし、それは別に人を守るためという理由ではない。金になるからだ。魔物を殺せばそれだけ報酬を得ることができる。だから殺す。すべては金のために……。
稼ぐために魔物を殺し続ける――それこそが自分の一生。レフィーナはそう思っていた。
だが――
「レフィーナさん……俺と一緒になって欲しい。俺の妻になって欲しい。この村にずっといて欲しい。俺の隣に」
ゴブリン撃退の依頼を受けて訪れたイグサ村にて、レフィーナは運命の相手レオンと出会った。
そして――

＊

（……これを見て懐かしいなんて思う日がくるなんてな）
家の倉庫を整理中、レフィーナは数年ぶりに傭兵時代に使っていた斧と鎧を見つけた。何年も手入れをしていなかったせいで刃は錆びてしまっている。鎧の方も――
（これじゃあ無理しないと着れないだろうな）
別に鎧自体にはさほど傷みはない。問題はレフィーナ自身の方だった。
傭兵をしていた頃とは比べものにならないほど身体はだらしなくなってしまっているからだ。
肉付きが良くなってしまった腹回り――昔は腹筋も割れていたというのに――に、ムチムチとしてしまった太股、それに明らかに以前よりも大きくなってしまった乳房。全身が以前よりも女になってしまっている。これでは身体にピッタリフィットする鎧を着ることはできないだろう。
（まぁ、別にいいんだけどな。あたしにはもう必要ないものだしさ）
女としてレフィーナは今、本当に幸せだ。もう傭兵に戻ることなんてない。微笑を浮かべながら鎧と斧をしまい込もうとする。
「それ、懐かしいね」
「え？　ああ……レオン」
振り返ると夫のレオンが立っていた。
「どうしたんですか？　確か今日って、畑の慣らしでしたよね？　それなのにこんな時間に……なんだか早いですね」
丁寧な言葉遣いで夫に話しかける。昔はがさつな言葉遣い――今でも心の中ではそうだが――だったが、結婚を機に口調を改めたのだ。理由は単純、夫に女として見てもらいたかったからである。
「ああ、予定より早く終わったんだよ。セリカが手伝ってくれたからさ」
「――セリカ？」
夫が口にした名にピクンッと眉を跳ねるように動かした。セリカというのは隣家の一人娘だ。今年で二九になるレフィーナより確か十歳以上年下のはずである。
ショートカットが良く似合う可愛らしい子だ。無邪気な少女として村人達全員から娘のように可愛がられている。
しかし、レフィーナからするとセリカは全然無邪気なんかじゃない。
（あの子は自分の可愛さを知ってる。自覚してる。その上でレオンに取り入ろうとして……むううう）
レオンとセリカが一緒に畑仕事をしている姿を想像すると、それだけで腹が立った。プクウッと無意識のうちに頬を膨らませてしまう。
「レオン！」
「何？」
同性の目から見ればセリカはかなり露骨だ。なのにレオンはそのことにまったく気付いていない。
（朴念仁め！）
首を傾げる夫との距離をズイッと詰めると――
「貴方は私……いや、あたしの夫だ。それを忘れるなよ」
丁寧語も忘れて昔の口調で呟くと、自分からソッと彼の唇に自身の唇を重ねた。
「いきなりなんだよ。分かってるって。俺はレフィーナ……キミの夫だ。キミ以外に俺の妻はいない」
「……分かればいい」
頬を赤く染めつつぶっきらぼうに告げる。対するレオンは嬉しそうに笑うと、今度は彼の方からキスをしてくれるのだった。
（レオン……あたし……幸せだ。幸せだよ）
傭兵を捨てたことに後悔はない。だって、大好きな夫といつも一緒にいられるのだから……。

＊

レオンと共に過ごす日々。それは永遠に続くものだとレフィーナは信じていた。だが、倉庫で口付けをしたあの日から数ヶ月後、その幸せは簡単に崩されることとなってしまった。
「ひっ！　ひいいいいっ！」
村内に悲鳴が響き渡る。
「ぐぎゃあああ！」
痛々しい断末魔の悲鳴さえ……。
その原因は村に現れたオークの群れにあった。突如として十体のオーク達が村を襲撃してきたのだ。人間を遥かに超える力を持つ魔物。ただの農民である村人達に勝ち目など存在してはいなかった。

著者近況　基本引き籠もってばかりの私ですが、それは流石に不味いなぁと思いエアロバイクを買いました。結果……満足しました！　買ったところで満足してしまいましたぁあああああ！！　い、以上……テヘッ♪

だが、村を捨てて逃げることもできない。村の周囲はオークが放ったと思われる触手によって囲まれてしまっていたからだ。イグサ村は魔物達の狩り場と化していた。

「あたしがやるしかない」

「やるしかって……でも、レフィーナ……キミはもう何年も」

「分かってるレオン。でも、逃げるための突破口を開くくらいのことはしてみせる。村の皆を……あんたを、救ってみせる」

仕舞い込んでいた鎧を身に着け、倉庫を出る。

（……だらしなさすぎるな）

無理矢理鎧を身に着けたが、やはり身体に合っていなかった。プレートメイルだけでは胸を隠しきれない。下乳も上乳もはみ出してしまっている。いや、乳肉どころか乳輪まで僅かだけれど覗き見えてしまっていた。腹回りの肉もやはりだらしがない。女の肉置きを剥き出しにしてしまっているかのような有様だった。

逃げてきた子供達の視線が突き刺さる。男の子も女の子もレフィーナを見て頬を赤く染めていた。子供達にもこの姿は性的なものを感じさせてしまうらしい。はっきり言って恥ずかしすぎる。こんなことならば身体を引き締めるトレーニングだけは続けておくべきだったと今更後悔さえしてしまった。だが、それでも鎧を脱ぐつもりはない。村を、レオンを守るために……。

錆びた斧を強く握り締める。

（斬るのは無理だが……殴り殺すことはできる）

グッと強く柄を握り締めた。

「レフィーナ」

そんなレフィーナをレオンが今にも泣き出しそうな顔で見つめてきた。

「大丈夫だ。あたしは絶対に負けない。皆で生き残るんだ」

真っ直ぐ夫を見つめ返すと、子供達の前ではあるけれどギュッと彼の身体を自分から抱き締めた。レオンの方も抱き返してくれる。そのままどちらからともなく唇を寄せ、キスをした。

「絶対に死なないでくれよ」

「ああ、もちろんだ。貴方も、みんなも……守ってみせる」

魔物に襲撃されているという状況。事態は絶望的だ。けれど、負ける気がしない。

（レオンと一緒になって本当に良かった）

改めてレフィーナは幸福を噛み締めるのだった。

だが――

＊

「犯す……女……犯す!!」

ちょっとした子供の腕――いや、太股ほどはありそうなオークの巨大な肉棒の先端が向けられる。人の身体に対してそれはあまりにも大きすぎた。そんなものが容赦なく俯せ状態で倒れたレフィーナの秘部に――レオンの目の前だというのに、突き立てられる。

「や……やめっ！」

どっじゅ！　ずどじゅううううう！

「ふっぎ！　んぎっ！　ひぎっ!!　ぎひぃぃぃ！」

後背位状態で犯される。巨棒で膣口が今にも裂けてしまいそうなほどにメリメリと拡張された。これまでレオンしか知らなかった胎内へと、異物が躊躇いなく侵入してくる。まるで巨大な杭を身体に穿たれるような感覚だった。ボコッと膣道が内側から膨れ上がる。途端に息が詰まるほどの圧迫感がレフィーナの肉体を襲ってきた。

「あっぐ……ふぐうう！　ぬ……抜けっ！　これ……抜けぇえぇ!!」

ドジュッと一気に膣奥まで蹂躙されてしまう。ただの一突き。だが、それだけで気絶してしまいそうなほど強烈な衝撃がレフィーナの全身を駆け抜けていった。しかし、意識を失うわけにはいかない。状況は最悪だが、レフィーナは刃のように鋭い目で自分を犯すオークを睨んだ。

「どうだ？　女……気持ち……いいか？」

しかし、オークは動じない。それどころか嬉しそうに口元に醜い笑みまで浮かべて見せてくる。

「気持ち……ぐうう！　こんな……こんなことが……気持ち……いい……わ……け……ない……だろぉ！　最悪なだけだ！　だから……は……やく……こいつを……抜けぇえ！」

オークに対して殺気を飛ばす。憎しみだけで相手を殺すことができるのならば――とっくにオークはズタズタになっていることだろう。

（くそっ！　こんな……オーク如きに！）

以前だったら簡単に殺すことができた魔物である。実際、三匹までは斧で叩き殺すことができた。だが、そこが限界だった。周囲を残ったオーク達に取り囲まれ、一斉攻撃を受けてしまった。結果、丸太のような腕での一撃を受けてしまい、嘔吐させられ、現在の状態に……。

「くっそ……殺す……殺してやるっ!!」

「お前……活きがいい。そういう女……嫌いじゃない。元気な子……孕ませる」

「はらまっ――」

その言葉で思い出す。オークは他種属の牝を犯すことで繁殖するということを……。

「や、やめろっ！　ふざけるな！　そんなこと……誰がさせるかっ!!」

魔物の子を孕む――人として絶対にあってはならないことだった。しかも、今の自分の有様はレオンに見られている。

「くっそ！　やめろ！　レフィーナに手を出すなぁ」

著者近刊　『奴隷の私と王女様～異世界で芽吹く百合の花～』『孤独なビッチ　異世界風俗のモン娘とエルフと魔王和え』『ムッツリ女騎士、悪魔♂に転生す』、二次元ぷち文庫でも『夜の狙撃手』など公開中！　好評発売中！

他の村人達と同じようにオークが放った触手で拘束されたレオンが叫んでいる。
（いやだ。レオンの前でなんて……絶対……いやだぁあ！）
愛する夫の前で魔物に陵辱される。決してあってはならないことだった。だから必死に藻掻き、足掻く。オークからなんとか逃れようと必死に抵抗してみせる。
「無駄。俺……お前、逃がさない。種付けする。お前……孕ませるぅ!!」
だが、人の力でのし掛かってくるオークから逃れることなどできはしない。吠えると共にオークは容赦なくピストン運動を開始してきた。巨大すぎる肉棒で蜜壺を蹂躙してくる。
ずっじゅ！　どじゅう！　どっじゅどっじゅどっじゅどっじゅ——どじゅうう！
「あっぐ……ふぐうう！　うっご……動いてる！　あた……ふぐうう！　あた……しの……膣中で……でかいのが……やっめ……やめろ！　くうう！　うご……くな……とま……止まれ……とま……れぇえ！　ふっふっ……くふうう！」
巨棒が子宮口を叩いてくる。内臓を押し潰さんばかりの勢いで、何度も何度も膣奥を……。あまりに強烈すぎる突き込みだった。ズンッと亀頭を叩き付けられるたび、強烈な衝撃で目の前が真っ白に染まる。肉付きのいい身体がオモチャみたいに前後に揺さぶられた。
（大きすぎる……こんなの……変えられる……あたしの膣中が……こいつの……オークなんかの形にかえ……ら……れて……くぅう！　こんな……こんなこと……こんなことぉおお！）
肉棒が大きすぎるせいではっきりと膣壁を通じて形を認識することができてしまう。レオンとの行為では感じることがなかった感覚だった。まるでオークのものを刻み込まれるような……。レオンとの行為が上書きされていくような気さえしてしまう。耐え難い状況だった。
「どうだ？　気持ち……いいか？」
レフィーナを嘲笑うような問いかけが向けられる。
「ば……かを……くふう！　馬鹿をいうな！　こんな……んん！　こんなものが気持ち……気持ちいいわけ……ないっ！　あおおお……ないだ……ろ！」
当然否定する。実際快楽などない。ただただ苦しいだけだった。
「そうか……でも……すぐ感じられるようにしてやる。お前……牝に変えてやる」
「そんな……こと……不可能だっ！」
あり得ない。絶対に——強い想いを言葉に込める。
ただ、どんなに硬い意志を口にしたところで、オークの陵辱が止まるわけではない。いや、それどころか魔物はさらに腰を激しく打ち振るってきた。
「くっひ！　ひっぐ！　あううう！　はっげ……これ……はげしっ！　あっぐ！　あっあっあっ——あぐうううううっ!!」
バチンッバチンバチンッという音色が響くほどの勢いで尻に魔物の腰が打ち付けられる。強烈すぎる突き込みによって、子宮が歪んでしまいそうなほどの衝撃が走った。チカッチカッチカッとピストンに合わせて視界が明滅する。当然さらに息苦しさも大きなものに変わっていった。
いや、感じるものは苦しさだけではない。
（あ……こ……これ……嘘っ！）
人妻であるレフィーナの肉体は知っている。性の快感を……。故に、肉体は肉壺を突かれることで条件反射のように快楽を覚え始めてしまう。
（違う！　違うっ！　あり得ない。そんなの……ありえ……ない！　こいつは魔物……レオンじゃない！　だから……快感なんて……絶対に……あり得ないっ!!）
慌てて愉悦を否定する。だが、そんなレフィーナを嘲笑うようにオークはより腰の突き込みを激しく、大きなものに変えてきた。
「んっひ……くひっ！　あっ！　んっ……ああっ」
思わず甘い声を漏らしてしまう。
「ぐふううう！　気持ちいいか？」
当然魔物にも気付かれてしまった。自分を見るレオンが瞳を見開く。
「ち……違うっ！　違うぅう！　気持ち……んんん！　気持ち良くなんか……ないっ！　感じてなんか……いないっ!!」
首を左右に振り、必死に違うと訴えた。オークに対してではない。夫に対して……。
「嘘は……駄目だ」
けれど、否定はより激しい蹂躙を呼ぶ結果となってしまう。オークは腰を回転させるように蠢かせ始めた。肉壺を抉るように刺激してくる。
「あっふ……それは……んふっ！　はふうう！」
途端に全身が痺れるような刺激が身体中を駆け抜けていく。明らかに熱感が籠もった吐息を漏らしてしまった。
「おお……堪らない。俺……我慢できない」
そうしたレフィーナの姿に、これまで周囲で陵辱を見ているだけだったオークも動き出す。肉棒を剥き出しにした状態で近づいてきたかと思うと——
「おっぽ！　ぶぽっ！　ごぽおおっ!!」
ズドジュッと口腔に肉槍を突き込んできた。
（おおお……これ……無理……。こんなの……無理いいい！）
顎が外れそうなほどに口腔が押し開かれる。食道まで届くほど奥までペニスを突き込まれ、思わず瞳孔が開いたままになりそうなほどに瞳を見開いた。
「むっふ！　んふううう！」

シャインミラージュ外伝、ついに連載スタート!
復活した怪人に容赦ない暴力を浴びせられ、
変幻装姫は身悶える!

変幻装姫 シャインミラージュ外伝

絶望のバイオレンス編

第一話 刻まれる絶望。地に伏せる変幻装姫

小説 NOVEL／でぃふぃーと
挿絵 ILLUSTRATION／高浜太郎（たかはまたろう）

「少しばかり身体能力に自信があるようですけど、わたくしの敵ではないことを教えてさし上げますわ」
まるで大人と赤子を思わせる体格差。
頭が馬、その下は人型である巨体の怪物を前にして、金色のツインテールを靡かせる少女は不敵に笑った。
肌にピッタリと密着する青と白のレオタードコスチューム。たっぷりと育った豊満な乳房が肌を隠す布地を押し上げ、背中の大きな赤いリボンの下にはムチっとした臀部が異性を魅了するように主張している。
素顔を桃色のバイザーで隠すものの、その下では強い正義の意志を示す眼差しが怪物を射抜き、力強く握り締める銀色のレイピアの切っ先が怪物へと狙いを定めていた。
「ナメルナ……シャインミラージュッ!!」
地に響くような低い声。しかしその言葉は流暢というには遠く、不完全な存在であると変幻装姫に確信させた。
四つ足になり、自身へと一直線に狙いを定めての突撃。二足歩行に比べて倍近くの速度を出す怪物の攻撃を前にしても、シャインミラージュは余裕の笑みを崩すことはない。
「それで走っているつもりですの？　遅すぎますわね」
「グゥウゥッ!?」
巨体の突進を軽やかに横に回避し、すれ違い様に大きな的を斬り上げる。痛みによる呻き声を漏らすが、馬の怪物はバランスを崩すことなく数メートル過ぎ去った後に体勢を立て直した。
「闇のエナジーがわたくしに無意味だからといって、あなたのような満足に言葉も喋れない体力だけの雑魚が相手だなんて……まぁ喋れるドルコスと大差はありませんけれど」
神聖なエナジーによって超常の力を得ている正義のヒロインは、異世界から現れた悪の組織であるダーククライムが持つ闇のエナジーによる特殊能力を無効化できる。
だからこそ、彼らが送り込んでくるのは物理攻撃を得意とした屈強な肉体を持つ怪物ばかり。
しかしシャインミラージュは神聖なエナジーによるフォームチェンジによって、相手に合わせた戦い方に変えることが可能。
それ故に単純な肉体強化だけを受けてきた相手にも有利に立ち回ることができ、今は変幻装姫の代名詞とも言える速度重視のストライカーフォームだ。
「公共の場で暴れられても迷惑でしかありませんから、すぐに決着をつけましょう」
一向に崩れる気配のない余裕の変幻装姫を前にして歯を噛み締め、口の端から唾液を垂らすほどの怒気に満ちた表情を見せる怪人。シャインミラージュの耳に届くまでに荒い呼吸を繰り返しながら、四肢に力を込めていく。
「フザ、ケルナァアァッ!!」
ビリビリと肌を刺すような咆哮と同時に、馬怪人の剛腕が二本同時に地面へと叩きつけられた。
同時に巨体を中心に地を走る衝撃。まるで地震を思わせる強烈な揺れは、周囲に存在していれば満足に立つことも難しい。
「まったく、避難が終わっているからいいものを……!!」
アレだけの隙を見せたのだから何かしら意味があると考えるのは当然であり、シャインミラージュは馬怪人の手が地面に接触する直前に高く宙を舞っていた。
怪人との戦闘が始まり今に至るまでの間に避難は完了している。だからといって建造物などに被害が出ていいはずもなく、変幻ヒロインは空中で被害を確認した。
「カカッ……タナァ……!!」
ギラリとした馬怪人の視線と、上空から見下ろす変幻ヒロインの視線が重なる。
正気を失っているも同然の凶悪な笑み。正義のヒロインが攻撃をかわす為に飛ぶところまでを読みきった、勝利を確信したような獰猛な喜びの表情。
突き立てた両腕が僅かに膨らみ再び力が込められ、空中で身動きのできないであろう獲物を狩るべく、馬怪人が跳躍する。
しかし、それを見てもシャインミラージュは慌てる素振りを見せることはなかった。
「かかったのはあなたの方ですわ。マジカルフォーム!!」
いかに単細胞といえども、速さというアドバンテージを失った状態を馬怪人が見逃すはずがない。
ドルコスと同様にその巨体からくる生命力は厄介ではある。シャインミラージュが選んだのは、確実に当たる状況での高火力による一撃だった。
夜闇を照らすように身体が光りを放ち、現れたのは胸元を大きく開いた、桃色のワンピース状のコスチュームに身を包んだシャインミラージュの姿。
手に持つのはレイピアから魔法少女らしいステッキへ。一直線に向かって来る馬怪人へと向けて、スカートの中の下着が見えてしまうことも構わずに神聖なエナジーを込める。
「雷に呑まれなさい!!　サンダー・スピアッ!!」
眩い光がステッキの先端の宝石を起点として起こり、怪人の巨体を悠に超える雷が発現した。
「グ、オオオォオオォォオッ!?」
回避が不可能な状態。咄嗟に両腕を交差させて防御の構えを取るも意味はほとんどない。
全身を支配する身を焼く痛みに叫ぶ馬怪人が、一切受け身を取ることもできずに地面へと送り返され

著者近況　シャインミラージュが本編とは別のお話として連載することになりました。これも応援して下さる皆様のお陰です。本来のエロとは別の方面になりますが、こちらもよろしくお願い致します。

た。
「今ので消し飛ばないだなんて、最近の怪人は本当に頑丈ですわね」
まだ命を絶つには至らず、本能で立ち上がろとする怪人へと目掛けて落下するシャインミラージュ。
「ですがもう終わりですわ!! メテオ・バースト!!」
「ガァァァァッ!?」
反応できても対応することのできない相手へと、空中からの連続蹴りが放たれる。
一瞬で馬怪人の巨体を埋め尽くすような、神聖なエナジーによる強化を受けた蹴撃の嵐。いかに頑強な身体を持っていたとしても、ダメージは確かに蓄積していく。
「ク、ソォォォッ!!」
最後の力を振り絞っての反撃は明らかに速度の鈍った巨腕による大振り。だがいかに弱っていようとも、直撃をすれば大ダメージは避けられないだろう。
蹴りの猛襲を受けながらの必死の一撃は完全に変幻ヒロインの柔らかそうなボディを捉えた……かに見えた。
「遅すぎますわね」
しかし実際は、僅かに残っていたシャインミラージュの残像を貫いただけ。
馬怪人がそれに気づいたのと、変幻ヒロインの不敵な声が背後から聞こえたのは同時だった。
「悪は滅しなさい!! イリュージョン・ストライクッ!!」
正義の意志を示す必殺の名。
レイピアでの斬撃を起点として繰り出される、徒手空拳を交えた連続攻撃。斬り、蹴り、突き、拳を叩きつける、先のメテオ・バーストを上回る、反撃を許さない残像がいくつも生み出される速度での攻撃の雨。
圧倒的なパワーを持つわけではない、スピード重視のストライカーフォーム。
いかに頑強な巨体を有している相手でもダメージを積み重ね、そのまま倒しきることを目的とした必殺技。
「これで、トドメですわッ!!」
「グァァァァァァッ!?」
巨体が揺れるのを見逃さず、大きく腕を引いて神聖なエナジーを込めた突きを繰り出す。
トドメに相応しい強力な一撃は馬怪人の身体を貫き、悪の生を終えた巨体を消し飛ばした。
「頑丈なだけ……わたくしの相手にはなりませんわね」
相手の攻撃を受けることなく迎えた完全なる勝利。それを当然とするように口元を僅かに上げて変幻ヒロインは笑う。
「ダーククライムの怪人はわたくしが倒しました!! もう安全ですわ!!」
避難していた人々へと、もう出てきても大丈夫であると、正義の勝利を告げる。
見ている者も多数いるだろうけれども、こうして言葉で教えることが大事なのだ。シャインミラージュの変わらぬ勝利こそが、人々の希望であるのだから。
「うおおぉぉぉっ!! 流石はシャインミラージュだ!!」
「本当に助かった……!!」
「いつもありがとう」
戦いの終わりを知り隠れていた場所から出てくる人々の口から発せられる、変幻装姫への称賛の嵐。
今日までピンチに陥ることなく勝利を積み重ねてきたヒロインに対する、絶対的な信頼を思わせる言葉の数々にシャインミラージュは凛とした表情を見せた。
「皆さんが無事で何よりです。どんな相手が現れようとも、このシャインミラージュがいる限りは大丈夫ですわ。わたくしは誰にも負けたりはしませんッ!!」
無敵のヒロインの自信に満ち溢れた言葉に、周囲の人々が呼応して叫ぶ。
それは人気と信頼の証であり、それを全身で感じる変幻ヒロインは柔らかな笑みを浮かべた。
今の言葉に嘘はない。必ずダーククライムを打ち倒し、正義の勝利でこの戦いを終わらせる。それまで、シャインミラージュはいかなる存在にも敗北してはならない。
変幻装姫は人々の歓声を背にして、その場から消えるようにして去った。

※

「ふぅ……今日は少し大技を使いすぎたかしら」
まるでホテルのスイートルームを思わせる広さの一室。
一人用にしては大きすぎるベッドに腰掛ける黒髪の少女の名は東堂院紗姫。彼女こそ、正義のヒロインである変幻装姫シャインミラージュの正体であり、東堂院財閥の令嬢に他ならない。
ダーククライムの怪人により窮地に陥った際、突如として現れた宝石箱から溢れた光によって、異世界から送られた神聖なエナジーをその身に宿した存在となった。
その日から今日まで、この世界を守る人々の希望として戦い続けている。
「耐久力が上がるだけなら勝つのは容易いですけれど、エナジーの消費を強要されるのは嫌ですわね……」
無敵を誇る変幻装姫。しかしその実、彼女しか知りえない、誰にも知られてはいけない弱点もまた存在していた。

著者近刊 『変幻装姫シャインミラージュ 砕かれるプライド、穢される存在』『変幻装姫シャインミラージュ2 汚辱に染まりゆく光』 好評発売中!

自身が生み出したわけではない特殊な力。元々この世界に存在していない力だからなのかもしれないが、時間にして二時間程度で限界となってしまう。
それもエナジーを消費すればするだけ時間は短くなり、限界を迎えたあとは同じ時間で回復するものの、それまではただの少女と変わらない。
シャインミラージュの弱点は長期戦であり、敵の耐久が上がっていくことは正直なところ好ましくはないのだ。
「いえ、あの程度の怪人しか出してこれないということは、ダーククライムに余裕がない証拠。このままいけば必ず勝てますわ」
正義の勝利を信じ、黒髪令嬢はベッドへと仰向けに横たわる。いつか訪れる、完全な平和を夢見ながら一度瞳を閉じた。

※

同時刻。ダーククライム基地内。
最下層に存在する巨大な研究室に、姿の違う四つの影が集っていた。
「また成果もなくやられたようじゃな」
まず口を開いたのはシルクハットを被った、豚面の怪人。身体は人間そのものであるが、肥え太った身体を包む黒いタキシードは今にもはち切れそうだ。
ダーククライムの幹部の一人であるデブロ。手に持つステッキでコツコツコツと、残る三人と同じ回数で床を叩いた。
「雑魚に任せても意味ねぇんだからよ、次は俺がいかせてもらうぜ!?」
デブロの倍以上の声量で主張するのはドルコス。二メートルを軽く超える巨体を持つ、己の肉体を武器とする幹部の一人。
拳を握り締めて巨腕を見せつけながら、威嚇するように一人一人を睨みつける。
「あなたで勝てるなら最初から終わってるでしょう？　脳ミソまで筋肉だと本当に面倒ねぇ」
憎き相手を倒したいという気持ちはわかるけれども、それでも行動が短絡的すぎる。
四人の中で唯一の高い声。何も言わなければ悪の組織の幹部の一人だとはわからない、愛らしい外見をしたゴスロリ少女。
ミスティが黒髪をかき上げながら片目だけを開いて毒づいた。
「何だとぉッ!?」
「本当のことでしょう？　悔しかったら勝って私達の前にシャインミラージュを連れてきて欲しいものよねぇ」
一触即発の空気が立ち込める。ダーククライムの幹部とはいっても、それぞれがよく言えば個性的であり我が強い。
正義のヒロインという存在に邪魔をされ続けてフラストレーションの溜まった状態であれば、衝突するのは必然と言えた。
「やるならこの話し合いが終わってからにしてくれ」
横やりを入れたのは、椅子に座ったままの男。ダーククライムの創設者と言って問題はなく、この場にいる三人の幹部を生み出した存在。
本当の名を知る者はなく、気づけば博士という呼び名だけが広まっていた。
「そうじゃな。わしらを呼び出したということは余程大事な要件なんじゃろ？」
「あぁ……単刀直入に言おう”グラッド“を復活させようと思う」
淡々と話す博士の言葉から出てきた単語に、三人の顔色が変わる。
その全員が宿すのは嫌悪の感情。博士からの提案に対して好意的ではないのは明らかだった。
「あの野郎を……!?」
「いくらシャインミラージュを倒す為っていっても、グラッドを復活させたら私達も危ないわよぉ？」
一切不満を隠す気のないミスティの態度には確かな意味がある。
「そうじゃな。グラッドならシャインミラージュに勝つことも難しいことではないじゃろう。じゃが、問題はその後……博士もわかっておるんじゃろ？」
「十分に理解しているよ。改造時の暴走で生まれた異常なエナジー量による圧倒的な力。自己中心的な性格もあって手綱も握れない……そうだろう？」
この世界に来る前に起こった研究室内での闇のエナジーの暴走。それにより改造中だった怪人が異常をきたし、博士の想定を遥かに超える化物が生まれてしまった。
それだけであれば単純な戦力として使用できたのであるが、暴走の影響か元々か、自身の欲望を満たす為だけに破壊活動を行い、博士の命令すら耳を貸さない。
単純に暴れるだけであれば放置でよかったのだが、最終的にダーククライムにも牙を剥いてきた。
元の世界に存在する神聖なエナジーを持つ戦士達との戦いで大きなダメージを負ったところを、ようやく捕らえることに成功。
そのまま消してしまうのが最善だというのに、博士はいずれ有効活用ができる日が来るかもしれないと基地の奥深くのカプセルに封印することを選択した。
「まぁ自己中心的な性格というのはわしらが言えたことではないが、あ奴のは度がすぎておる。シャインミラージュを倒したあとにこちらも壊滅しては意味がないのじゃぞ」
「そうそう。何かあの馬鹿に言うことを聞かせる方法があるなら別だけどぉ」
過程が変わっても、結末がダーククライムの崩壊ではデブロの言葉の通り意味はない。

最低限自分達が健在なままでの勝利。少なくともミスティとデブロが考えるのはそこだ。
「完全にではないけれど、少しは制御できるだろうモノを埋め込む。表面上は変わらないが、潜在意識でこちらに危害を加えられないようにはなるはずだ」
「なるほどのう。じゃがそれが確実に成功するというわけではあるまいて……まぁ賭けか」
「そうなる」
「ぶっつけ本番ってことねぇ。仕方ないといえば仕方ないんだけどぉ……いいわぁ。それに失敗したら暴れる前に私は逃げるからよろしくねぇ」
僅かでも可能性を示唆する博士に対して、デブロとミスティは妥協する。
それも全ては博士という存在への信頼があるからこそ。彼の発明品に意味のないモノはなく、彼がそう言うのであれば可能性はあるのだろうと。
ミスティに至っては逃亡するとさえ公言しているが、失敗した時のことを考えれば彼女の性格からすれば当然の思考だった。
「ドルコスも異存はないかい？」
一応の了承を得た博士が、最初の反応以降一切言葉を発していないドルコスをチラリと見やる。
何かあれば頭よりもすぐに反応する筋肉怪人が何も言わないというのは、少しばかり気がかりではあった。
「チッ……!! 別に構わねぇよ。負けたら俺様が行くからな。いいなッ!!」
バンッ!! と、不機嫌なまま捨て台詞を吐いてドルコスが足音荒く研究室から出ていく。
「あの筋肉馬鹿はもっと反発するかと思ったけど、意外に素直だったわねぇ」
「一度グラッドに叩きのめされておるし、力の差はドルコスが一番理解しておるからのう」
シャインミラージュとグラッド。どちらにも敗北を喫しているからこそなのか、ドルコスの去っていく姿を残る三人が見送った。
「全員賛成ということで、明日の昼に奴を復活させる。来たいのなら来てくれて構わない」
博士の言葉に対して、二人はわざとらしく視線を逸らした。

※

翌日、巨大なカプセルの前で立つ博士の姿。その表情からは、暴走する怪物を復活させようとする緊張感が伝わってはこない平静そのもの。
今日まで封印されてきた怪物をこの世界に解き放つべく、淡々とコンソールを操作していく。最後のキーを押すのと同時に、ゴゴゴゴゴ……ッ!! と、大仰な音を立ててゆっくりとカプセルが開き出した。
振動で地震のように揺れる中、完全に開放されるまで見届けるべく前を向き続ける博士。そもそもとしていなくなるわけがないというのは理解しているが、それでも確かに封印が続いていたのかを確かめる意味も込めて。
「よォ博士。久しぶりだなァ」
それは開ききる前に博士の背後から聞こえた。
「グラッド」
軽薄そうな男の声に対して、博士は僅かに目を見開きつつもその主の名を呼ぶ。
「久々に出てきたってのにお迎えが博士だけとは寂しいじゃねェか。筋肉馬鹿や豚、ロリっ娘達はどうした？」
博士が振り向くと、そこには白い仮面を被り、研究服に似た黒衣を身に纏った長身の男が存在していた。
彼こそがグラッド。圧倒的な闇のエナジーをその身に宿す、ダーククライム最大の怪物。
「まァいいか。わざわざオレを出したってことは何か狙いがあンだろ？ ここは元の世界とは違うみてェだが、一体どんなオネガイがあるンだ」
自身の絶対的な力を自覚しているからこその余裕の態度。それは元の世界で暴れていた頃と何一つとして変わらない。
だがすぐに暴れ出して基地を破壊するような真似をする気はないようだ。
「そうだ。ここはかつての世界とは違う……だがここにも存在する、神聖なエナジーを持つシャインミラージュという相手を――」
「神聖なエナジー……神聖なエナジー……ヒヒャヒヒヒヒヒッ!!」
神聖なエナジーという単語を耳にした直後。一瞬不自然に静かになったと思った矢先に、歓喜に震える奇声が周囲に響き渡る。
突如としてスイッチが切り替わったかのような反応に、背後から声をかけられた時以上に博士の目が一瞬大きく開いた。
それは過去のグラッドからは決して生まれ得ない、狂った笑いであるからこそ。かつて受けた大きなダメージの影響か、それとも長い封印で歯車が狂ったのではないかと博士は考えを巡らせる。
だがどうしてこの状態になったかなどはどうでもいいと、すぐに思考は別へと移った。
「いいぜェ!! 神聖なエナジーを持つヤツがいンだな。そいつを徹底的にブッ潰して、ブチ殺してやりゃいいンだろう!?」
仮面の怪人は明らかに神聖なエナジーに対する憎しみに満ちている。
勝利したとしてもそのまま命を奪いかねない。というよりは発言からして博士の懸念は現実になるだろう。
「いや、殺すのはやめてくれ。エナジーの解析をしたい。必ず五体満足で捕らえてきて欲しい」
「あァッ!?」

確実におかしくなっている、殺意に満ちた相手へと物怖じせずに博士は己が願望を口にする。場合によっては先に襲われる可能性もあるにもかかわらず、態度は普段と変わらない。
「……わかった。だがそれ以外は好きにさせてもらうぜ？」
「それは構わない。五体満足で生きているのなら、あとは存分に恨みを晴らすといい」
「ハッ!!　なら好きにさせてもらうさ。じゃァな、しっかりと手土産を持ってきてやるから待ってろよ」
博士を背にして手を上げ、グラッドは研究室から出ていった。
「あいつ、元々テンションは高かったけど、神聖なエナジーに対する反応はおかしくないかしらぁ？」
数分の間を置いて、ミスティとデブロが研究室に入ってくる。
状況は別室での映像で確認しており、研究室から消えたのを確認したから合流したのだ。
「間違いなくどこか歪んでおるのう。しかし、博士の言葉に従う際の間……埋め込んだ道具とやらはしかと効果を発揮しているようじゃな」
「あぁ、あとはグラッドがシャインミラージュを倒してくれるのを待つだけか」
ふぅと息を吐き、椅子に腰を下ろした博士が巨大なモニターに映像を呼び出す。
そこには一定のリズムで僅かに上下をし、ある程度の高度を持って前へと進む様子が映し出されていた。
「あら、これってグラッドの？」
通常使用する偵察機はこんな動きはしないと理解しているミスティが、この映像の主を博士に問う。
「あぁ、グラッドの目にもちょっとした細工をしておいた。これで見失うことなく様子が確認できる」
ミスティの予想に間違いはなく、グラッドの見ている光景がそのまま映像として流れているようだ。
つまり、予定通りならばグラッドの手で叩きのめされるシャインミラージュの姿が特等席で見れるということ。
「ふぅん。じゃぁ見せてもらおうかしらねぇ。シャインミラージュが敗北する姿を……あ、クッキーでも持ってこようかしらぁ」
※
（――ッ!?　これは闇のエナジー……？　でも、この巨大さは……）
光陽学園の生徒会室。共に昼食を取ろうと約束をしていた、彼女にとって唯一無二の親友である澪を待つ紗姫は、突如として感知した闇のエナジーにハッと立ち上がった。
今までも闇のエナジーを感じ取って、外に現れたダーククライムの悪事を阻止したことは多数ある。
しかし、今現れたのは今日まで出会ったことのない、異常と言える凶悪にして強大な闇のエナジーを持つ怪物。
勝利を積み重ねてきた無敵の変幻装姫も、明確な勝利の二文字が浮かんでこないほどの未知の敵。
「いえ、わたくしはどんな相手でも勝たなくてはなりませんわ。正義のヒロイン、変幻装姫シャインミラージュですもの」
汗ばむ手を握り締め、自身に言い聞かせる。そうだ、正義の使者たる自分が弱気になってどうする。絶対に勝つという強い意志を持ち、挑まなければ。
「聖なる力よ。この身に悪を滅する光を――!!」
瞳を閉じて精神を集中する。神々しい光が紗姫の身体から発せられ、ほんの一秒にも満たない間にその姿は平和を守る正義のヒロインのモノとなった。
「ごめんなさい、澪。すぐに倒して戻ってきますから」
もうすぐ来るであろう親友へと謝りながら、ストライカーフォームに身を包んだシャインミラージュは周囲を確認し窓から飛び降りた。
そのまま誰の目にも留まらぬ速さで、闇のエナジーの持ち主の元へと駆け抜ける。アレだけの闇のエナジーなのだ、街の一つ簡単に吹き飛ばせる可能性は十分なのだ。
「待っていなさい。このシャインミラージュがいる限り、ダーククライムの好きにはさせませんわ!!」
待ち受けるは未だ戦ったことのない強大な相手。しかし変幻装姫は瞳に正義の意志を宿しながら、レイピアを持つ手に力を込めた。
※
基地の外へ出たグラッドは人の多く存在する広場を求めて悠々と歩いていた。仮面を被り黒尽くめに等しい姿だとしても、ドルコスやデブロのような異形ではない為か大きな騒ぎにまでは発展していない。
狙うは神聖なエナジーを持つシャインミラージュただ一人。だが、元々自分勝手に暴れることを好む性格の男が闇のエナジーを感知して現れるのを待つことなどできるはずもなく……。
「適当にブッ壊して待つことにするかねェ」
立派な建造物。数多く存在する人々。そのどれもが、グラッドという男の破壊衝動を駆り立てる。
暇つぶし程度で、周囲を更地にでも変えてしまおうかという思考を実行しようかというその時。
「はあぁぁッ!!」
「おっと」
上空から飛来する人影。シャインミラージュの持つレイピアでの刺突を身を横にして回避したグラッドは、僅かに距離を取った。
「この男はダーククライムの手先ですわッ!!　皆さんははやく避難をしてくださいッ!!」
まだ被害が出ていないことを安堵する変幻装姫だが、それでもまだ周囲に人々がいることに変わりは

ない。
「シャインミラージュだ！」「さぁ遠くまで逃げるんだ!!」「頼んだぞ」
変幻ヒロインの言葉に逆らう者はなく、邪魔にならないようにと遠くへと人々が離れていく。
それも全ては今までの戦いの成果であり、シャインミラージュという正義のヒロインの信頼からくるもの。
（この男の力がわからない以上、どこかで人気のないところまで引きつけなくてはなりませんわね）
たとえ避難が完了したとしても、目の前の男の能力がわからない以上はこの場で戦うことはできない。
どうにか人気のない場所におびき寄せて、被害が最小限に止まるようにしなくては。
（しかし……なんて闇のエナジーの強さですの……ミスティやドルコス達とは比べ物になりませんわ）
遠くから感じ取っていた時よりも数段巨大に思える闇のエナジー。ビリビリと肌を刺すような凶悪な悪の力に、自然と頬を汗が伝う。
神聖なエナジーの力を信じてはいる。しかし、この男の持つ力の大きさにさしものシャインミラージュも緊張を隠しきれない。
「てめェがシャインミラージュか。へェ……おォおォ、しっかりと神聖なエナジーを感じる。昂ってくるぜェ」
そんな変幻装姫と対照的に、グラッドは仮面の下の瞳で、ジロジロと品定めをするようにしてシャインミラージュの肢体を眺めていた。
「何を勝手にペラペラと……あなたがダーククライムの一員である以上はわたくしの敵ですわ。このシャインミラージュが裁いてさし上げます!!」
「ダーククライムの一員ってわけじゃねェが、まァいい。てめェみてェな生意気そうなヤツは徹底的にボコるに限る……それが神聖なエナジーを持ってるってンなら尚更だしょォ。ヒャヒヒッ!!」
不自然な笑いが足されたとしても、相手がダーククライムの怪人であるならばおかしいことではない。
改造されているモノ達。悪に身を堕とした存在なのだから、異常をきたしている方が逆に自然なのだ。
そしてこの男もまた同じ。相手を力で叩きのめすことに悦びでも覚えるのだろう。放っておけばどれだけの被害が出るか……逃すわけにはいかない。
「残念ですが、あなたはわたくしに勝つことはできませんわ。正義のヒロインである変幻装姫シャインミラージュが、悪に敗北するなどとあってはならないのですから」
正義は常に勝利するモノ。平和を害する悪党に敗北するなど、あってはならない。
それはシャインミラージュが信じる正義の姿であり、今までも覆ることはなかった。
「あァ？　なら今日がシャインミラージュの敗北記念日ってことになるなァ。おめでとうおめでとう……ヒヒャヒヒッ!!」
凛とした言葉に対して嘲笑うようにして返すグラッド。
ドルコスのような単純な頭からくるモノではない、完全なる勝利を確信しているからこその余裕。
今も肌で感じる闇のエナジーの巨大さから、変幻装姫自身も侮ることはできない強敵であると理解している。
「そんなことを言っていられるのも今のうちですわッ!!　これでも喰らいなさいッ!!　フレア・バレット!!」
会話をしている間に人々の避難はある程度は完了したようだ。
だがもう少し、この場に釘づけにする意味も込めて、シャインミラージュは桃色のマジカルフォームへと変化する。
ストライカーフォームでの攻撃。しかも不意打ちを軽くかわすほどの速度と反射神経を持つ相手へと、バスケットボール大の火球を連続で飛ばす。
たとえかわされても被害が出ないように方向も調整はしているが、相手がどう出るかを確認して次の攻撃へと移行できるようにしかとバイザーの下の双眸を細める変幻装姫。
「ハッ!!　そんなモンでオレを倒そうってのかァ!?」
次々に放たれる燃え盛る赤い弾丸。それを前にしてグラッドはただ片手を突き出すだけ。
「なっ――!?」
直後の光景に変幻令嬢は目を見開いての驚愕を隠せなかった。
接近する炎弾が男の手に触れただけで消えていく。まるで元々存在していなかったかのように簡単に。
神聖なエナジーにより作りだされた攻撃だというのに、意に介していないという様子でかき消していく様はやはり今までの怪人達とは次元が違う。
「ほらよ、返すぜ」
最後の一発だけは消されることはなかったが、代わりに指によって弾かれた。
それは倍以上のスピードを持って、攻撃を生み出した本人である変幻令嬢へと狙い定めている。
「くぅぅッ!!」
咄嗟のところで再び炎弾を生み出して相殺することに成功はしたが、衝撃でシャインミラージュの身体が押されて数歩後ずさった。
「攻撃してきた奴が下がっちゃ世話ねェな。シャインミラージュ様の力はこんなモンか？　こんなんじゃ正義は負けちまうなァ。ヒヒャヒャヒャッ!!」
この一度の攻防だけで、仮面の男の実力がハッキリと理解できてしまう。
今まで無敵の力を誇っていた変幻装姫を上回る力

を、仮面の男は持っているのでは。そう、隠れながらも見守る人々に思わせるに十分な時間だった。
「ふざけないで。この程度でわたくしを倒せるなどと思わないで欲しいですわね。あなたのその余裕、すぐになくしてさし上げますわ」
目の前の黒い男の強さは十分にわかった。だが凶悪な力を持っているとしても、それがイコールで正義の敗北に繋がるわけではない。
マジカルフォームのステッキを構え、バイザーの下の視線を鋭くして睨みつける。
「力の差は歴然だってのによ。いいぜェ……もう少し遊んでやる。ほら撃ってこいよ。必殺の一撃ってヤツをよォ」
クイクイっと、人差し指を曲げて挑発するグラッド。
どんな攻撃でも倒すことはできないという自信の表れを前にして、シャインミラージュのギュッとステッキを持つ手の力が増した。
「今の言葉、後悔しないことですわね!!」
今までの相手ならともかく、目の前の相手には隙を作らなければ通用しないであろう大技。
けれども受けるというのであれば遠慮なくお見舞いしてやろう。もしこれが通じなかったらという弱い考えが脳裏を過ぎるが、それを振り払い意識を集中した。
「消え去りなさいッ!! サンダー・スピアッ!!」
バチバチとステッキの先端で暴れ回る雷に変化するエナジーの奔流。
これまでかりは横に撃つわけにはいかずに、シャインミラージュは高く飛ぶと、一歩も動く気配のない仮面の男へと狙いを定めてステッキの先端を向ける。
直後に放たれたのは巨大な雷。過去の怪人達に放ってきた威力を上回る、多量に込められた神聖なエナジーによる必殺の雷撃が、まっすぐにグラッドへと落ちた。
地面への直撃で弾けるようにして周囲を照らす眩い閃光。誰しもが目を閉じ、逸らし、受けた黒い男の状態を確認することができない状況下。
「これだけの一撃なら……!!」
今も感じ取れる強烈な闇のエナジー。それはまだ仮面の男が完全に倒されていないことを意味している。
けれども、大きな傷を与えることができているのであれば十分。サンダースピアによる雷撃が終わるのに合わせて途絶えぬ攻撃を繰り出して、反撃の隙も許さずに決着をつける。
落下を始める身体。フォームチェンジをして一気に勝負をつけようと攻撃を止めようかとした最中、急激に膨れ上がる闇のエナジーの接近を変幻ヒロインは感じ取った。
「そんなのじゃ効かなねェなァ!!」
「ま、まさかっ――おぶぅうぅぅぅッ!?」
雷の中を真正面から突っ切ってきた仮面の男の姿に、咄嗟にステッキを構えて防御しようとするが、振るわれた拳によって容易く真っ二つに折られてしまう。
そのまま無防備な腹部へと深々と突き刺さるグラッドの握り締めた拳。潰れた声を唾液とともに漏らしながら、シャインミラージュの身体がくの字に自然と折れ曲がった。
今までの戦闘で経験したことのない攻撃の直撃。それだけではない。その一発がまるで必殺の一撃のように重く、体内が押し潰されてしまうのではという錯覚すら覚える。
「すごぉい、あの攻撃を無傷で抜けちゃったわぁ。それにあんなにお腹にめり込んじゃって……うふふ、痛そうねぇ」
その光景はグラッドの視界と直結している生の映像として、ダーククライムの基地内に流れていた。
サンダースピアをものともしないグラッドの耐久力。そして、憎きシャインミラージュの腹部に突き刺さる一撃に、ミスティは昂りを隠しきれない。
「見世物としても十分じゃのう。これなら期待できそうじゃわい」
それはデブロも同様であり、デップリとした顎を撫でながらこれから始まるであろう変幻装姫の姿を思い浮かべて笑う。
「オイオイオイ。神聖なエナジーを持ってンのに今ので全力なのかァ!?」
「きゃあぁッ!! あぁぐ!! げふっ……ごほっ、あ、かはっ……」
桃色のポニーテールを掴まれ、期待外れだとばかりに顔を近くして煽られる変幻装姫が、地面へと投げ捨てられた。
受け身を取る余裕もなく、背中から落ちて一度軽く跳ねる豊満な身体。
着地する仮面の男と、仰向けに倒れて苦しむ正義のヒロインの姿は、人々に大きな絶望を刻みつけるに十分な光景だった。
「コレじゃァ弱い者イジメになっちまうなァ。だがオレも鬼じゃねェ。ここから狙うのは正義のヒロイン様の腹だけにしてやるよ。それも両手だけでなァ」
見せつけるようにして高らかに上げる腕。両の腕のみを使用して、シャインミラージュの腹部だけを殴りつけるという宣言。
それは明らかに変幻令嬢を馬鹿にし、自分が負ける可能性などないという絶対的な自信からくるモノ。
「……くぅ……はぁ……どこまでも、馬鹿にして……あなたのような相手に、わたくしは絶対に負けませんわッ!!」
ズキズキとした鈍痛が今も続く。ドルコスのような巨腕ではないけれども、闇のエナジーの込められ

た一撃の破壊力は絶大だった。
本来ならば無効化できるはずなのに、仮面の男の持つ闇のエナジーはその強大さ故か不可能。
痛みの残る腹部を片手で押さえながら立ち上がるシャインミラージュは、己が一番得意とするストライカーフォームへとフォームチェンジする。
「負けねェとか言うのは簡単なンだよ。ほれ、さっさと証明してみせてくれや」
(使うのは両腕。それも狙うのはわたくしのお腹だけ……おそらくは嘘ではありませんわ。でしたらそこに注意して……!!)
嘲笑われ、馬鹿にされている現実はプライド高い変幻令嬢にとっては大きな屈辱。
しかし、この相手に怒りに任せて戦っても待ち受けるのは完全なる敗北だけ。ならばと、再び相手に甘えることになってしまうけれど、勝利の為に利用させてもらうしかない。
人々の希望である正義のヒロインが、悪に負けるなどとあってはならないのだから。
「いきますわ!! はあぁッ!! やああぁッ!!」
サンダースピアによって服だけがボロボロになっている黒の男へと接近し突きを放ち、横にかわした方向へと追うようにして一閃する。
相手の動きを、両手の様子を確認しながら逃がすまいとして数度レイピアを振るい、意表を突く意味も込めて変幻装姫は足払いを仕掛けた。
「そらそらどうしたァ!? 全然オレに当たってねェぜェ!? 変幻装姫様の力はこんなモンかァッ……ヒャヒヒッ!!」
「こんなモノのわけがないでしょうッ!! すぐに届かせて――」
跳躍してかわす仮面の男。空中であるならば通常ならば身動きはできない。
闇のエナジーを持つ相手なのだから何か方法を持っているかもしれないが、それでもチャンスであることに変わりはないのだ。
ストライカーフォームによる速度を強化された状態。この近距離ならば外さないと、しかとグラッドを見据えてシャインミラージュは突きを放った。
「届かねェなァッ!!」
「なッ――えぶぅぅぅぅぅッ!!」
しかし、突き出した手は仮面の男によってあっさりと掴まれ、カウンターとしてもう片方の手が柔らかな腹部へとめり込んだ。
腹部に生じる強烈なボディブローの激痛に唾液が飛び散り、変幻ヒロインの目の前が一瞬真っ白に染まる。
「スピードが自慢じゃなかったのか? 遅すぎてアクビが出ちまうな。オラ、正義のヒロイン様なら頑張れよ。神聖なエナジーが泣いてるぜェ!?」
ドンっと肩を押されて強引に距離を取らされる。
ヨロヨロと震える脚でなんとか倒れるのを拒否しながら、シャインミラージュはレイピアを構えた。
「げはっ……あぁ、んぶっ……と、当然、ですわ……わたくしはまだ、戦えますもの……んぐっ……!!」
(い、今のを簡単に……しっかりと見ていたはずですのに……見えなくて、反応もできませんでしたわ……そんな、そんなこと……!!)
表面上では戦う意志を示すものの、心の中では大きな困惑が渦巻いていた。
相手の手の動きも確認していたはずなのに、気づけば刺突は止められ、そのまま反撃を受けてしまったのだから当然。
攻撃も通じず、自慢のスピードでも敵わないとなれば勝利は絶望的に思える。しかし、だからといって諦めることはない。相手が強いとしても、どこかで勝機を見出さなければ。
「立ったままじゃ勝てねェぞ。ヒヒャヒャァッ!!」
「こ、このぉッ!! んぐっぶぇえぇぇッ!?」
瞬きをする間に至近距離に現れたグラッドに慌ててレイピアを振るうも、次の瞬間には三度目のボディブローが突き刺さっていた。
無様に折れ曲がる身体。ひび割れた声。ビチャビチャと地面を逆流する胃液が汚し、ビクビクと痙攣する身体の反応をグラッドの手に教えてしまう。
「イィ感触だァ。クソみてェなエナジーを持った奴をこうして殴るのは最高だなァ!!」
「あぁっ……げふっ……ま、まだ、わたくしは……げぶぅぅぅッ!!」
そのまま殴り飛ばされたシャインミラージュは壁に背を叩きつけられ、座り込むようにズルズルと身を滑らせる。
戦う意志はあるけれど、身体のダメージの大きさに自然と両手が腹部を守るように押さえてしまい、戦闘態勢を取れない。
しかし、仮面の男はお構いなしに近づき、押さえていた両手が弾かれると、そのまま凶悪な闇のエナジーによる一撃が白いコスチュームに守られた腹を襲った。
「堪らねェな。こうして嬲るのは最高の感覚だ。ヒヒャヒャヒャヒャッ!!」
ズドォッ!! ドズゥゥッ!! ズゥゥンッ!!
「おぉっごぉぉ!! あぁっぶぅぅぅ!! あがあぁ、おぉっぽぉぉぉ!!」
段々と昂りを見せるグラッドが、壁に押しつけられたシャインミラージュの腹部を何度も殴りつける。
壁が壊れんばかりの重い音を響かせる一撃が、何度も何度も変幻ヒロインに叩き込まれ、その度に潰れた悲鳴が響き渡った。
「あらあらぁ、徹底的ねぇ。でもあのシャインミラージュが何もできないでボコボコにされてるだなん

平和を乱す悪者め！

絶対に許さない！

そんな善と悪との一大決戦から月日は流れ――

会社でコンビニ飯

は――……今日も残業

白井幸子(29)

なにこのひどい設定!!

白井ッンはまだ産休とらないでいいのかね？

ああまだ独身だったっけ いやあ失礼ハハハ

あンのくそ上司 指示はあいまい 二転三転

おきたにセクハラ パワハラ 4キーン!!

気が付いたらアラサー女子真っ只中でした

毎日毎日家と職場の往復で

恋に、仕事にガンバる キラキラ女子★(ナ嘘)

魔法少女 アラサー幸子さん

結婚？恋人？異世界の単語なんです？

漫画COMIC／ぱふぇ

オラ！早く来い
いやあ！誰か助けて!!
げっ！怪人!?
早く逃げて!!
ここは食い止めるから
はっはい！
警察呼んできて!!
何してんのよ！
この変態が――!!
ゴ
RAWSU
ゴゴ
ゴゴ
ゴゴ
し仕方ない…
まだ…力は残っているはず！
キサマぁあああ！一般市民が邪魔をするつもりか!?
とは言うものの
歳はいってるがまあ良いお前も本部に連行してやる
これは勝てないわね…
マジカルパワー！
セットアップ!!
キラキラ

魔法しンん！

悪者め！覚悟なさい!!

げぇっ！お前は

魔法少女サ…

その名前はもうッ

呼ばないで――ッ！

ドォォォォォ

ドォォォォォ

フフッ相変わらずの気の強さだ

あ…あなたは

魔王ザイア！

ではなんと呼べば？

サ…幸子よ

久しいな魔法少女サ

その名は呼ぶな！

本名プレイもなかなかレベル高いぞ…

そ そんなことより！魔王軍は壊滅させたはずよっ

くくくっ壊滅したのではない！

お前にズタボロにされた戦力の回復を図りつつ

壊滅してるよねそれ

お前が大人になり！

純粋な心の力＝魔法力を失って**弱くなるのを待っていたのだよ!!**

せ…

せこい！

変身する力は残っていても

この魔王には通用せんぞ！

カウンター

ぶげらッ

クロススマッシュ!!

ちょっ

あれえ？強いままじゃん!?

ええい舐めるな！

どんな汚い手を使ってでも勝つのが我らよ!!

全員でかかれ！

ワーッ

ワーッ

ワーッ

ゼニィ

ゼニィ

インパクト
ズドドドド
フォール!!
念動力!?
しま…た!
ぐっ…
っあぁぁ!!
しゅるるるるっ
長期戦には弱かったな
歳か
言わないでぇ!!
ついに…捕らえたぞ
く…
ヤバ…この展開は
私をどうしようというの
アレ…よね?

何されるか期待しているって顔だな
うそ…
昔も何度かこうして可愛がってやったこと
こんな状況で感じるわけ…
思い出しているんだろ
さされてない…！
すぐ逆転してやっつけてたで…しょ
んんっ
あン…
そのわりに敏感な乳じゃないか
はう♡
ああ♡
媚薬責めで開発した成果だな
はわ…ぁ
やああっ
生身の…男の手でおっぱい揉まれるの
強…いいい♡
こんなに…イイ…んだ…
おっぱい握りしめ…るなああ
くっ

BEAT VALKYRIE DEBEAL
超昂神騎エクシル
～双翼、魔悦調教～
最終話 超昂神騎
希望を打ち砕かれた天使たち！
そして二人が迎える結末はいかに!?
小説 NOVEL 峰崎龍之介
挿絵 ILLUSTRATION 孫陽州
原作 ORIGINAL アリスソフト

じゅぷじゅぷ……ぐちゅッ！

卑猥な水音を立て、はち切れんばかりに怒張した肉槍が、エクシールの雌穴を深々と貫いた。

「んん……っ、んぶ、ふぅぅぅんっ！」

膨れ上がった亀頭が膣の最奥をノックすると、苦しげな息遣いが漏れ、王座の間の空気を震わせた。

「ん、う……うぅ、んふぅぅっ！」

声はなく、ただくぐもった息だけが漏れる。だがそれは、蒼の神騎が我慢強く口を閉ざし、嬌声を呑み込んだからではない。彼女の可憐な唇にも無粋な肉棒がみっちりと詰め込まれ、声を封じているのだ。

（息が……できない……っ。苦、しい……苦しい……のに！　どうしてこんなに……っ）

喉奥まで食い込んだダインのペニスで窒息しかけながら、それでも込み上げる猛烈な抽挿快感に酔いしれる。その節操のない肉体の反応に、エクシールは困惑した。

「んんっ!?　ん、うぅぅぅ……ううっ！」

と、エクシールは喉の奥だけで、苦悶の喘ぎを弾けさせた。口内に詰まった肉棒がひくひくと脈打ち、熱い白濁を喉奥に迸らせたのだ。しかも膣を穿つ動きも激しさを増していて、鮮烈な絶頂の波が全身を駆け巡り始める。

（だめです……耐えられないっ。嫌……もうこんなの嫌……！）

望まぬ快感を拒絶しようとした彼女だったが、その肉体は既に制御不能に陥っていた。

（イク……ああ、イってしまう……！　無理、もう無理……！）

びくん、びくん。疲れ切った四肢を力なく戦慄かせ、軽く白目を剥いてしまいながら、エクシールは絶頂を極めた。と同時にダインたちも果て、汚らわしい肉棒から濃厚な雄汁を噴出させる。口内と膣内の両方を真っ白に染め上げてなお余った白濁は、唾液や淫蜜と混じって卑猥に泡立ちながら、王座の間の床へぽたぽたと落ちていく。

「んぐっ、かはぁ……っ。あ、あ、あ、ああ……ッ！」

もう数えきれないほど追いやられた官能の頂点。しかし慣れることはなく、また飽きることもない。何度味わっても甘美であり――そして屈辱的だった。

（ああ……イってしまった……精液、喉に詰まらせながら……精液で溺れかけながら、私……また……）

喉奥から返ってくる精液の生臭さで頭がくらくらし、だらしなく開いた股を閉じることもできない。素面であれば悲鳴のひとつでも上げたであろう痴態だが、いまはそれを気にする余裕すらなかった。

（こんな恥辱が……いつまで続くの？）

靄がかかった思考で、ぼんやりと考える。この輪姦が始まってから、どのくらい経ったのだろう。休む間もなく犯され続けて、どのくらいになるのだろう。一日、いや半日？　それともまだ一時間しか経っていないのだろうか？　時間の感覚はとっくに希薄化していて、正しい判断は下せそうにない。

「んぶぅっ……ん、ふぅぅ……かはっ」

と、絶頂の余韻に身震いするエクシールのすぐ隣から、苦悶の息遣いが聞こえた。同じ境遇にある――つまり何十体ものダインに輪姦され続け、全身を精液塗れにされているキリエルだ。

「こほっ……あ、くぅぅぅ……！　ダメ……そこ、ああっ！　イクッ！　うあ、イクぅぅぅ！」

イラマチオから解放された紅の神騎は、四つん這いの姿勢をさらに縮こまらせ、亀のように丸まりながら激しく喘いだ。膣内射精されているのか、イったあとも小刻みに尻を震わせ、腰をくねらせている。

「お願い……もう、許して……」

やがてキリエルは、力なく呟きながらゆっくりと顔を上げた。

そうして見えたキリエルの横顔は、同性であるエクシールですら息を呑むほどの色気を纏っていた。

『もう許して』という台詞には、およそ似つかわしくない淫らな顔つき。

「キリエル……」

名を呼ぶと、オレンジ色の瞳と視線が絡んだ。するとキリエルははっと我に返ったように表情を引き締め、しかし次の瞬間には気まずげに顔を背けてしまった。

「ごめん、エクシール……私、もう……」

駄目かもしれない――あとに続く言葉は声にはならなかったが、口はそのように動いていた。

（キリエル……）

もう一度、今度は心の中だけで名を呼ぶ。シェムールの調教によって『堕天』させられ、破廉恥極まりない衣装に身を包んでいる彼女は、エクシールよりもさらに追い詰められているようだった。既に一度心を折られているせいか、快感への順応が早い。あの顔つきを見るに、完全に『悪』へと堕ちてしまう一歩手前というところか。

『堕天』と一口に言っても、その度合いはケースバイケースだ。元の人格に戻れる可能性がないわけではない。実際キリエルは以前、一度堕天してから元の姿に戻るという経験をしているし、あのアゼルですら時折元の人格……アズエルの片鱗を覗かせることがある。しかしいまのキリエルは、元に戻れなくなる、そのぎりぎりのラインにいるように思えた。

このままではまずい。それはわかっていた。だがエクシールは、彼女を引き止められずにいた。

これまでなら迷わず声を上げた。快楽に負けてはいけない、まだ頑張れると励ますことができた。

しかし、いまはそれができない。なぜならエクシール自身の心も、不可逆の破滅を迎える直前だったからだ。

（力が出ない……もう、なにをされてもイってしま

う……なにひとつ、耐えることができないなんて……私は、こんなにも情けない女だったのですか？）

目の前で唯一の希望――アッサルの矢を砕かれてしまった事実は、ことのほかエクシールの心を打ちのめしていた。

これではもう戦えない。エクシールは気高き神騎だが、その下には『女』の部分が確かにある。その部位はひどく脆く、そして柔らかいのだ。度重なる恥辱を耐え抜ける強度など望むべくもなかった。

ゆえに言葉がない。自分自身が揺らぎ、いつ堕落してもおかしくない状況では、なにを言っても説得力などありはしないのだから……。

「――皮肉だな」

と、犯され抜いた肢体をぐったりと放り出し、絶頂の余熱に打ち震えるふたりの神騎に呼びかける声があった。

「ひ、にく……？」

涼やかでありながら邪悪でもあるその声につられて、蒼の神騎はのろのろと顔を上げた。

王座の間の最奥。王だけが腰かけることを許される至高の玉座に、その女はいた。アゼル。麗しい褐色の肌を持つ堕天使の王。あらゆる生物の頂点に立つ最強の捕食者――

「他に言いようもあるまい。お前たちは強靭な肉体と精神を持つがゆえに、そのような責め苦を耐え忍んでしまっている。人間の女がそれだけ犯されれば肉体がもたず、並の神騎であれば屈辱に耐えかねて、完全に堕天しているところだ」

そこまで言って、堕天使の王は頬杖を突いた。それからあとを続ける。

「正直、侮っていた――そちらの紛い物も含めてな。もっと容易く篭絡できると踏んでいた。切札を失い、絶望の中で犯し尽くされながら……それでもまだ尻尾を振らない。見上げた忠犬根性だ」

「……」

無言でアゼルを見上げた。いままさに自分自身の弱さを思い知っていたエクシールにとって、堕天使王の言葉はそれこそ皮肉だった。

「嘲る意図はない――と言っても無駄だろうな」

アゼルは頬杖をやめると、傍に控えていた美しき悪女……シェムールに視線を向けた。

「責めが手ぬるい。もっと激しい余興を用意しろ」

「よろしいのですか？　これ以上となると、壊してしまう可能性もありますが……」

「二度は言わん。やれ」

「は。ではそのように……」

端的な命令に、シェムールは恭しく頷いた。しかしその顔には、既に嗜虐的な笑みが張り付いている。

「……っ。これ以上……なにを……？」

「ふふ……そう怖がらなくてもいいわ。むしろ喜んでもいいくらいよ。なぜなら……これまで以上の快楽を、その身に刻むことができるのだから」

悪女は瞳に愉悦を湛えて、両腕をぱっと開いた。すると彼女の背後に、いくつかの大きな人影が忽然と姿を現した。

（あれは……ダイン？　いえ、それにしては大きすぎます……！）

現れた人影は、シルエットこそダインに似ていたが、体格が一回りは大きかった。

違うのは体格だけではなかった。いやむしろ、より明確な違いはこちらのほうだろう。股間に備えているモノが、いまも周囲を取り囲んでいる個体とはまったく違っていた。

それは例えるなら二股の槍。既に激しく勃起した肉棒が縦に二本並んでいる。しかも一本のサイズが体格同様、これまでのダインよりも一回りは大きい。

「貴女たちを責め抜くために特別に設えたの。膣とアナルを同時に犯せるようにね」

シェムールが唇を歪めながら指を鳴らすと、双頭ペニスを持つ新たなダインたちが静かに歩み寄ってきた。

「ひっ……」

喉を引きつらせて、エクシールは迫る陵辱者から少しでも遠ざかろうともがいた。しかしいまさらその程度の抵抗をしたところで、なんの意味もなかった。

「ダイッ」

「は、放して……！」

あっさりと押さえつけられ、無防備な開脚を強いられる。キリエルも同様だ。エクシールの隣に引きずられてきて、無理矢理に足を開かされている。

蒼と紅。グラマーとスレンダー。対照的な印象を持つ、しかしどちらも極上に美しい天使が揃ってM字開脚を強いられているさまは、それはそれは淫靡なものだった。しかも両者ともに度重なる恥辱を味わったあとなので、その肢体にははち切れんばかりの淫欲が溜め込まれている。

肌は紅潮して強張り、乳房の先端では充血した乳頭がつんと前を向いている。そして魅惑的な逆三角を描く鼠径部の下では、淫蜜で濡れそぼった秘所とアナルとが、目前に迫った陵辱を恐れるかのようにひくひくと蠢いている……。

「エ……エクシール……」

怯えた声が耳朶を叩く。だが応えることはできない。眼前に突き付けられた二股ペニスの凶悪な面構えに射すくめられ、喉が凍り付いてしまっている。

（せ、せめて……）

胸中で呟きながらキリエルの手を取り、強く握った。だが――

「美しい友情ね。でも駄目。ダイン、その手を引き離しなさい」

この悪辣な堕天使は、ほんの小さな心の支えも許

してくれないようだった。
「……っ。キリエル……」
「エク、シール……」
ダインに腕を掴まれ、繋いだ手を引き離される。すると一気に孤独感が増した。こんなにも近くにいるのに、吐息が互いの顔にかかりそうな距離にいるのに、直に体温を感じることができない。仲間の存在を確信できない。そんな些細なことが、なによりもふたりの心を打ちのめした。
そして――その時は、前触れもなく訪れた。
「う、あ……っ!?」
キリエルの唇が震え、続いて瞳が揺れる。怖れていたモノが、その体に触れた証。
「あ、あああ……入って、きた……大きいのが、あそこと、お尻に……ああダメ、やっぱりダメ！同時になんて……っ!?」
一足先に挿入を開始された紅の神騎は、整った顔を苦悶と快楽で歪ませながら、熱く吐息してその身を震わせた。
「キリエ……うっ」
名を呼ぼうとしたその矢先。ついにエクシールにもその時が訪れた。
ぴと……。
ほぼ同時に。秘所とアナルに、硬く熱いモノが押し当てられた。
（お、大きい……！　こんなモノが同時に入ってきたら、私……ッ）
間近に迫った二穴責めの恐怖に、無駄だと知りつつ身を捩る。しかし両腕は掴み上げられ、万歳のような姿勢を強要されたままぴくりとも動かせない。
「あぐ……ああああああああああっ！　だめぇ……そんなに、したらッ！」
と、悲鳴じみた声が上がった。だがそれはエクシールのものではない。既に挿入が完了し、抽挿され始めているキリエルのものだった。
「膣内で、膣内でぇ……！　おちんちん同士が、擦れて！　お腹の中、無茶苦茶にされてる……ッ」
かっと目を見開き、紅の神騎は四肢を戦慄かせた。彼女の二穴は目いっぱいにこじ開けられていて、ともすればそのまま裂けてしまいそうですらあった。
「安心なさい。苦しいのは最初のうちだけよ。あれだけ激しく輪姦され続けても壊れなかった穴だもの……すぐに慣れるわ」
まったくの他人事――そういう温度の言葉だった。シェムール。すぐ傍で腕組みし、薄ら笑いを浮かべている。そのことに対し、憤りがないわけでもなかったが――
「他人の心配をしている暇はないわよ」
シェムールが囁くと、双頭ペニスを持つダインがじわりじわりと腰を進めてきた。膣口とアナルにかかる圧力が強まり、入り口が少しずつこじ開けられていくのがわかる。
「う……あ……っ」
食い縛った歯の隙間から呻きが漏れる。どちらか片方だけでも大変な圧迫感で、とても全てを受け入れられるとは思えない。
「無理……こんな大きいの、同時になんて……入らない……！」
増大する圧迫感と不快感に声を上げるが、ダインは一切力を緩めず、淡々と腰を押し込んできた。
ずぷぷ……ぐちゅんっ！
最後の一押しが終わると、絶対に受け入れきれないと思っていた二本の極太ペニスが、見事に根元まで挿入された。
「あぐ……ッ！　うあ、ああああ……」
体の内側から、途方もない圧迫感が生み出される。暴れ出したくなったが、それはできなかった。
膣内、直腸ともに肉棒がギチギチに詰まっていて、ほんの些細な動きですら新たな苦悶に取って代わるのだ。エクシールにできるのはただ歯を食い縛り、災禍が通り過ぎるのを待つことだけだった。
「ふふ……入らない、なんて言っていた割には、すんなりと受け入れたわね」
「……ッ！」
黙れ、と叫ぶことすら煩わしかった。そんな余裕はなかったと言い換えてもいい。ふたつの穴を無遠慮に貫いている肉棒はぴくぴくと不快な脈動をきたしており、その刺激が常にエクシールの神経を逆なでしている。
「膣はともかく、後ろの穴は多少の傷がつくかと思ったのだけれど……それもないわね。うふふ……想像以上の淫乱に育ったわね、神騎エクシール。この調子なら、甘い声で乱れるのも時間の問題かしら？」
「き、気持ち良くなんか……なりません。こんな、苦しいだけのことで……！」
反射的に言い返す。そうだ――気持ちよくなどない。二穴を満たすペニスは不必要に大きく、与えてくるのは吐き気を催す苦しさと、頭が沸騰しそうな恥辱だけだ。
「どうかしら。少なくともお友達の方は、強がる余裕すらないようだけれど」
「え？」
シェムールの言葉に、エクシールははっとした。そしてそれと同時に……。
「あ、うぅ……あ、はぁん……」
甘い声が耳朶をくすぐる。先んじて犯され始めていたキリエルの、どこか鼻にかかったような声。
「くぅ……あっ。あっあっ、うん、あっ……！」
ぐちゅ、ずちゅ……ずるるる、ずちゅんっ！
リズミカルな抽挿に押し出されたキリエルの声は、少しずつ陶酔の響きを帯びていた。いや、もはやこれは嬌声だ。苦悶の成分は既に大半が抜け落ち、快

著者近刊 『ダンジョン暮らしの元勇者』1～3巻 好評発売中！

楽を享受する甘美なものにすり替わっている。
そしてなにより――
「見ないで……こんな顔、見ないで……」
ダインに腕を拘束されていて、隠すこともできずに晒されているキリエルの顔には、はっきりとした性の昂りが浮かび上がっていた。シェムールの言うように、強がる余裕など微塵もなさそうだ。
「わかってる……こんなのおかしい……苦しいはずなのに、辛いだけのはずなのに……でも……！」
つぅ、と涙を零しながら、キリエルは紅潮した顔を振り乱した。
「気持ちいい……ひどいことをされてるって、わかってるのに……それでも気持ちいいの……！　私はもう、おかしくなってる！　私は、わたし、はぁ……ッ！　あぐ、うあああああああっ！」
ずちゅん！
一際大きな、そして卑猥な水音が、言葉を無理矢理に断ち切った。
「だめ、ああっ、奥……だめぇっ♥　ひぅ、くひぃっ……イ、くぅ……♥」
がくがくがくがく！　全身を痙攣させ、キリエルは果てた。その顔は完全に蕩け切り、色に酔った雌のそれに成り果てている。
本当にもう限界なのだろう。だがそれを心配している余裕は、エクシールにはなかった。
ぬぷぬぷ……ぐちゅんっ！
「くあああああっ！　あう、くぅぅぅ、あっ！」
ついにエクシールの身にも、二穴犯しの責め苦が迫った。既に根元まで挿入されていた二股ペニスが、ふたつの穴をゆっくりと出入りする。
「ひあああああっ！　やめて、動かないで……！」
膣は異様な圧迫感に蹂躙され、アナルはペニスが抜け出るたびに屈辱的な排泄感を与えてくる。
ぐちゅぐちゅ、ぐちゅんっ！　ずるる……ぬぷっ！　ぬる、ずちゅ……ずちゅうっ！
「あっ！　くぅ、うん……はあぁぁぁッ！　そんな、激しい……！　あぐ、くぅぅぅぅんッ！」
ダインは容赦なく、だが正確に腰を使った。元より性欲など持たない冷徹な陵辱者には、己の快楽など二の次なのだ。彼らの目的は主の命令を遂行すること、即ちエクシールを辱め、屈服させる一助となることだけなのだ。
それが怖い。どんなに泣き叫ぼうと絶対にやめないとわかっている陵辱は、下衆な言葉を投げつけられ、見下されながら犯されることよりも、余程恐ろしいものに思えた。
「あ、はぁ……あっ」
と、しばし抽挿を受け止めていたエクシールの声が、わずかに上ずった。
（い、いまの声は……）
自らの喉から飛び出た声音に、内心どきりとする。いまの声には甘さがあった。まるで感じ始めてしまったかのような、女の艶があった。
「――感じたわね？」
女狐が目ざとく指摘してくる。エクシールは口を閉ざし、顔を背けることでせめてもの抵抗を試みた。
「ふふ……可愛いこと。そんな真っ赤な顔で目を潤ませて顔を背けても、なんの意味もないわよ。気持ち良くなってきたのでしょう？　明らかにキャパシティを超えた責め苦に、順応してきたのでしょう？　もう諦めなさいエクシール。キリエルのようにね」
「……」
ただ黙った。これ以上口を開いたら、その拍子に余計なことを言ってしまいそうだった。
だが――そんなエクシールの最後の抵抗も、結局は虚しく空振りすることになる。
「だんまり？　そう、そんなに嫌なのね。なら望み通り、やめてあげようかしら？」
「え？」
一瞬言われた意味がわからず、訊き返す。しかしその時には、ダインがゆっくりと腰を引き、二股のペニスを引き抜いていた。そして次の瞬間――
どくん……どくん……。
「あ……え……？」
大きく心臓が脈打ち、下腹部が切ない疼きを発する。お腹の奥から大量に分泌された愛液が、注ぎ込まれていた精液を押し出しながら股間をどろどろに汚していく。そしてなにより――
（欲しい……ああ、なぜ……？　膣が、アナルが寂しい……ペニスが、欲しくてたまらない……！）
湧き上がるはしたない感情。恥ずべき淫欲。衝動にも似た激しい感覚に、蒼の神騎は困惑した。
「……っ。シェムール……あなた、私の体になにか……！」
この悪女のことだ。きっとまたなにか悪だくみをしたに違いない。そう思って問う。だが褐色の女狐は、ゆっくりと否定の仕草をした。
「あら、人聞きが悪いわね。私はなにもしていないわ。少なくとも現時点では、あなたの肉体には一切干渉していない。……だから、ね」
シェムールは屈み込んで目線を合わせると、いっそ気色が悪いほど優しい声で、こう囁いてきた。
「……その体の疼きは、全部あなたのものよ。ペニスが欲しくてたまらない……そんな声が聞こえそうなほど、ふたつの穴をひくひくさせているのも。いまは触られてもいない乳首を充血させているのも。全て……あなた自身の欲望のせいなのよ」
「……う、嘘です」
「嘘？　本当にそう思うの？　思い返してみなさい。この数日間、あなたが受けてきた調教を。あれだけ激しく、執拗にいじめ抜かれたそのいやらしい肉が、いまも清廉な神騎のものだとでも？」

クリ
クリ
う…
ああ…
きゅう
しあわせ
ふふ 可愛い声出してくれるじゃないの
もう…環さん やめて下さい

元S嬢捜査官の恥辱尋問

やめるわけないじゃない
ちゃんと在り処吐くまでイカせないから
クリクリ
ぷるぷる
ああっ そんなひどいいっ！
…久しぶりにこういう事やってるけど
こんなノリでよかったかしらね…
Mの気質は焦らして堕とす!!

漫画COMIC／楠木りん

久しぶりね 環

急に招集なんてどういうこと？

さっそくで悪いんだけど

あんたの力を貸してほしいの

失礼ね ちゃんと働いてるわよ

お店持つための調理師免許だって取ったし…

あ～ 悪かったわよ

でもどうしてもあんたの技術が必要なのよ

元特務捜査官の技術がね

ニヤ

ムリ ムリ

えっ… 私もう引退したんだけど

引退っていってもどうせ家でゴロゴロしてるだけなんでしょ？

Mっ気のある被疑者に対して快楽責めで口を割らせる特務捜査官 環…

あんたのお陰で解決した事件も数知れずよ

今回の犯人普通の尋問じゃ口を割らなかったんだけど…

昨日偶然この尋問が効くってわかったけど時間がないのよ

助けると思ってね？

わ…わかったわよ！

とは言ったものの…

ブランドのコピーや密輸の品々…

押収された以外にまだあるんじゃないの？

い…いえ部屋にあったので全部です

なら仲間がいるのかしら？

…四つん這いになってお尻をこっちに向けなさい

え…

豚みたいに手をついて汚い尻を突き出せって言ってるのよ！

はっはいいっ！

ゴン

ううこうですか？

そうよふふどうしようかしらね

ぷるぷる

う～んこういうタイプはどう責めていたっけ

叩く？いきなりアナルいく？

色々と試しながら思い出すしか…

ずぶ

わあ！

環さん恥ずかしいです…やめて…
ふん 本当は期待してるんでしょ
トロ…
ヒク
ヒク
つぷっ
ひゃあぁ
びくっ
くちゅ
くちゅ
うひぃ
ぬぷっ
ぬぷっ
う…ああっ入ってるぅぅんあぁ…
あらあらすっかり大きくなっちゃって
おー効いてる効いてる
ビクッ
ビクッ

桃色少女
感じすぎるアナルに怯えて
気づいてしまった、桃色秘孔の快感……
正義の心も恥辱のピンクに変えられる！
小説 NOVEL／杉山清
挿絵 ILLUSTRATION／白崎アロエ

遅れた分を取り戻そうと、電車は自身の能力以上のスピードを出してレールの上を駆けていた。車内は小さなカーブでも大袈裟に激しく揺れるが、乗客たちの体が傾ぐことはない。見知らぬ他人同士がみっちりと詰められた箱の中に、そのような隙間はないからだ。

（ああ、これは罰。罰なんだ……）

戸谷瑞希（とたにみずき）は涙で潤んだ黒い瞳でぼんやりと扉上部の細長い液晶画面を見つめる。そこには「人身事故のため……」というテロップがオレンジ色に輝きながら横へと流れていた。

数分の間を置いて定期的に流れるその文字を目にするたびに、瑞希の心は張り裂けそうになる。やや幼さを残しつつも愛らしく整った顔はいつも清廉で理知的な空気をまとっているが、今はその小さな顔も悲しみに染まり、瑞希をどこか妖しい魅力を醸し出す美女へと変えている。

（……なのに、なんで、お尻が熱いの）

瑞希が身を捩るのを見越したかのように、スカートの中で男の指が動いた。オフホワイトのパンティ越しにもっちりとした尻の感触を楽しみながら、ジリジリと布地を尻肉の間に食い込ませ、露わになった後孔を中指でなぞる。

一本ずつ皺をくすぐられるたびに、瑞希の身体にピリッとした電流が走る。

（こんなこと、感じたらダメなのに……っ、いけないのにっ）

ぎゅっとつむった瞼はややピンク色に染まり、動くたびにストレートの艶やかな黒髪が背中でゆらゆら揺れた。長袖のブレザー制服は汗でぺたりと肌に張り付いている。三年生にあがると同時にカップ数をあげ、つい最近Cカップになったその胸も、清潔な白いシャツの中でうっすらと淫猥に汗ばんでいた。スカートに守られていたはずの太股にも熱がこもり、動かすたびに肌同士が密着し、離れるたびにふるんと揺れる。

（そこっ、奥に入れられたら……ダメっ、我慢が、できなくなっちゃうっ）

抵抗がないことを知った男の指は、皺を何度か往復すると、その集中部分に指を立てる。そのままクニクニと弄られると、緩んだアナルは皺を綻ばせ、男を迎え入れてしまう。ツプッと音をたてて挿入された指が、そのまま七ミリほど侵入、くちゅりと小さな水音をたてながら、ねちねちと中で蠢いているのがわかった。

（動かさ、ないで……っ、……声、声が……出ちゃうぅっ）

緑眩しい車窓の外では五月の爽やかな風が吹いているにもかかわらず、瑞希の白い肌は男の指が動くたび、汗が滲んでいた。

自分の体が何か未知のものに覆われていくような気分だ。そして、この感覚はいつかも体験したことがあった。

――君には力がある。

遠く誰かの声が聞こえる。

――人々を救う力だよ。

差し出された指輪。一見プラスチックを思わせる透明なそれは、手に持てば金属のような不思議な重みがあり、触れただけでこの世の物ではないことがわかった。

伸縮性など微塵も感じられないのに、ぎゅっと手のひらで握ればそれは瞬時に何倍もの大きさに広がり、指輪というよりも腕輪の形になった。

促されるがままにはめれば、手首をきゅっと締め付け、そこから葉が季節によって色を変えるが如く、自然に肌の色を変えていく。いや、直接肌が変化してくわけではない。ただ、あまりにもぴっちりとした、まるでラバーのような何かが一分の隙もなく全身を覆うせいで、見る者にそう思わせるのだ。

瑞希は自らの身体がピンク色の何かに染められたあの日、自分の人生を正義に捧げると誓ったはずだった。

その指輪は、今も吊革に捕まるその華奢な指の右から二番目にはめられている。普通の女性ならば愛する男と将来を誓い合った証をはめるべき場所。吊革を掴む手が震えるたび、指輪が擦れてカチカチカチと歯でも鳴らすような不快な音色をたてる。

しかし同時に肩口に押しつけた自分の唇から、熱のこもった吐息が止まらないことにも気づいていた。そのことがますます瑞希を混乱させる。

瑞希はこの日初めて、女のこのような場所を好む男がいることを知った。同時に、その場所を弄られることを好む女がいることも。

（いやっ、もう……お尻ダメっ、やめて……っ、ツプツプ、しないでっ）

手のひらの熱によるものか、それとも自ら発している熱なのかわからなかったが、アナルを弄られるほどに尻肌は熱を持ち、クチュクチュという水音も大きくなっていることははっきりと認識できた。

男の指の動きがリズムカルになるにつれ、電流よりも大きな、ぞわりとした何かが背筋を駆け抜けていった。早すぎて、それが何なのか瑞希にはわからない。だが嫌悪感ではなかった。不快感でもなかった。

むしろ、「いいもの」だ。

孔内でクリクリと指を動かされるたびに視界が回る。一瞬誰かと目が合った気がしたが、さまよう瑞希の視線はすぐさまそれを通り過ぎていく。中吊り広告の卑猥な文字が見えた。水着姿のグラビアアイドルがこちらに微笑んでいる。網膜にフィルターでもかけられてしまったかのように、目に映る全てのものがピンク色に染まっていた。

（ああ、ピンクは、ピンクは、私にとって正義の色だったのに）

瑞希はつうっと静かに涙を零しながら、甘い吐息を漏らす。確実に自分の中の何かが変わってしまっていた。

（こんなことで感じちゃうなんて、こんなことダメだったのに、ごめんなさい。ごめんなさい……）

扉の上部では相変わらず同じテロップが流れ続けている。こんな感情とは似つかわしくないあの四文字がピンク色に輝くのを眺めながら、瑞希はそっと目を閉じた。

永塚(ながつか)みづきは瑞希の友人であり、仲間であり、そして隣の席の住人である。色気のある小麦色の肌に、背中でふんわりと波打つ金色に染めた髪。Fカップという、女子高生の規格から少しはみ出た胸を包む夏服のシャツは、七月の暑気から少しでも熱を逃がすためなのか、第三ボタンまで開けられている。美人ながら気の強い印象を受ける顔立ちから、かなりイケイケのギャルのように見えるが実際はそうではない。

「みづき、みづきってば」

授業中のため、瑞希は小声で隣の席へと呼びかける。だが頬杖をついて窓の外へと目を向けているみづきには聞こえないらしい。瑞希は思い切って手を大きくあげると、「先生」と告げた。

「永塚さんの体調が悪いようなので、保健室に連れて行きます」

あ、ああ、そうか、と戸惑い気味に頷く担任教師よりも驚いていたのは、みづき当人であるらしかった。怪訝な顔のまま動こうとしないみづきの手を半ば無理矢理に引くと、その流れでさりげなく机の上のペンケースにそっと指を差し入れる。中で淡く光るものを素早く手にした瑞希は、そのままみづきを廊下へと連れて行った。

「……なに？　先輩」

みづきは同い年で同級生ではあるが、瑞希のことを「先輩」と呼ぶ。後から戦隊チームに入った自分に様々なことを教えてくれたのだから、そう呼ぶのが礼儀なのだと。瑞希がチームを抜けて一ヶ月が経った今でも、頑なにそう呼んでいた。

「ほら、これ。呼ばれてるよ」

どこかぶっきらぼうな口調だったみづきに、瑞希は負けじとやや強い口調で、ペンケースの中から取ってきた指輪を差し出した。

透明なそれは淡く光を放っている。変身ツールであるこの指輪は本部から出動の要請があった際、召集を知らせる役割も担っている。

「ああ……」

どこか面倒そうな口ぶりで呟くと、みづきはその指輪を受け取った。その様子に瑞希は不安を覚える。

みづきは一体どうしてしまったのか。最近の彼女は何か様子がおかしかった。どこか暗い表情で、心ここにあらずといった調子だ。先輩として非常に心配である。

見た目とは裏腹に、律儀で真面目なみづきを瑞希は好ましく思っていた。もしただのギャルであれば、悪の軍団と戦う正義の戦隊チームになど所属していないだろう。

「ほら、早く行って。レッドも、ブルーも、グリーンも、みんな待ってるよ」

だがみづきはその場から動こうとしない。ぽつりと、「……ピンクは」と呟いた。

「先輩は、待ってないじゃん」

どこか責めるような口調に、瑞希はどきりとした。

なんでやめるの。どうして。それはチームを抜けるとき、散々周りから言われたことだ。最近体調があまり優れないからと、適当な理由で他のメンバーは引き下がってくれたが、みづきは最後までしつこかった。

そんな理由じゃ納得できない、他に何か隠していることがあるんじゃないの。みづきの強い瞳でそう問いつめられると、瑞希はぐっと言葉に詰まった。

だがいくら心を許した友とはいえ、本当の理由を話すわけにもいかなかった。やめた今でも自分のことを「先輩」と呼び、慕い、敬ってくれるみづき。そんな彼女だからこそ、本音を話すことはできない。

「……わがまま言わないの。私は、そんなこと言うみづきは嫌いだよ」

顔を伏せたみづきの肩が小さく震える。今の言い方は傷つけてしまったかなと思い、慌てて言葉を付け足す。

「勝手にやめた私が言うことじゃないと思うけど、ちゃんとやるべきことをやって、ね？」

チームを抜けた負い目はある。それでも、正義のために活躍することの重みはこれまでの活動で身にしみていた。みづきもそれはわかっているはず。自分のことで気持ちを揺るがせるのは本意ではなかった。

「来週には、ピンクの後任が来るって言ってたじゃない。私は一生懸命に頑張ってるみづきが好き。だから、ね、早くみんなのところに行ってあげて」

伏せられたままの顔を覗き込もうとすると、その前にみづきがすっと顔をあげた。どこかすっきりとした、決意に満ちた表情だ。しかし晴れやかであるはずのその表情は、なぜか未だに暗く見える。それどころか先ほどよりもより一層その翳りを濃くしていた。

「……わかった。そうする。あたしはあたしのやるべきことをするよ。先輩」

硬く暗い声音でそう告げると、みづきは背を向けて去っていった。廊下の奥、小さくなっていく彼女の姿を見送りながら、瑞希は胸の内で不安が大きくなっていくのを感じた。

七月と言えど、夜の八時も過ぎれば日はすっかり落ちきって、辺りは暗闇に包まれる。セルフサービスタイプのコーヒーショップを出た瑞希は、今日だけで百回以上は確認しているだろうスマホの液晶画面に再び目を向けた。しかしメッセージの受信を告げるランプは点灯していない。

『落ち着いたら連絡して』、廊下で別れたそのすぐ後、どうしてもみづきの様子が気になってそう送ったのだが、六時間以上が経過した今も返信はない。

もしかして戦闘中に怪我を負ったとかで連絡が取れない状態なのだろうか。

著者近況　初めてお目にかかります。アンケートで率直なご意見いただけますと幸いです。

違う心配がこみあげてきたとき、液晶画面にメッセージ受信の通知が表示された。慌てて画面をタップする。しかし送信者はみづきではなかった。

『任務は完了、イエローが無断欠勤。なにか聞いてる？』

送信者はレッドとなっている。

（無断欠勤？）

瑞希は首を傾げた。そんなはずはない。出動要請が出たとき、瑞希はちゃんと廊下でみづきを送り出したのだ。そうメッセージを打とうとしたときだった。

液晶画面にぽた、と何かが落ちた。水滴だ。顔をあげると、頭上からぽつぽつと小粒の雨が降り始めていた。雨が降るなんて今朝の天気予報では一言も言っていなかった。鞄の中にはもちろん折りたたみ傘など入っていない。

ちくしょう、と瑞希は舌打ちをする。コーヒーショップの自動扉の横には、金属製の傘立てが置かれていた。中にはビニール傘が一本と、持ち主の性別がはっきりとわかるような傘がそれぞれ一本ずつ刺さっている。さて、どれを拝借しようかな。

そう思った瞬間、瑞希はハッと我に返り、慌てて周囲を見回す。

（違う！　これは……）

傘を盗る場面を誰かに見られる懸念からではない。瑞希が探しているのは、今の思考の原因だった。それはすぐに見つかった。

店のすぐ脇の路地、その奥の暗がりに何か黒いものが動くのを瑞希は見た。

（こんなところに現れるなんて……）

素早く路地へと入り込む。すると、その影もすっと奥の角を曲がるのが見えた。エアコンの室外機にスカートが擦れるのも構わず、瑞希は壁伝いに走ると、そっと出口で辺りを窺う。

そこはかつて商店街だったのだが、今ではその全てが店を閉じ、落書きされたシャッターがずらりと並ぶどこか殺伐とした場所だ。もちろん人気は全くない。瑞希が追っていた今の人物も消えてしまった。かのように一見思えるが、瑞希は気づいた。少し離れた場所にある自販機。アーケードの天井に提げられた蛍光灯が青白く照らしているのだが、やけに影が濃いのだ。

（見つけた……っ！）

瑞希は間髪入れずにその場から飛び出すと、一気に自販機との距離を縮めた。影が動く。襲いかかってくるそれを、風に揺れるレースカーテンの如く優雅に避けると、すぐさま後ろへと回り込む。

影、いやはっきりと人の形になった黒い男が、瑞希を振り返った。目出し帽でも被ったように、ギョロギョロした目とぶっくりと膨れた唇だけが黒い顔面に浮き出ている。

何度見てもこいつら――ブラックスティック団の容貌は醜悪だ、そう思いながら瑞希は素早くしゃがみこむ。

制服のリボンが胸元で跳ねた。同時に、男の足が高く宙にあがる。瑞希の頭部を狙った蹴りは女体のどこにも当たることなく、ただ風に舞う艶やかな黒髪だけを掠めた。

獲物を逃がした男は足下のバランスを若干崩す。その瞬間を瑞希は見逃さなかった。

（今だ……！）

立ち上がる拍子にすっと足を出して男の脛を狙ってやれば、男はさらに体勢を乱してよろめく。

瑞希のスカートが旋回した。プリーツのついた裾がババババと音をたて、次いで、瑞希の強烈な回し蹴りが男の頸部に命中した。

白くほっそりとしたふくらはぎが、男の太い首にめり込む。男は呻き声をあげる間もなく昏倒する。

（脚力、まだ維持できててよかった）

ふう、と一つ小さく息を吐き出して、瑞希は大して乱れてもいない髪をかきあげた。

チームを抜けても、まだ戦隊として変身できる指輪を身につけている以上、攻撃力も、敵の存在を感じる能力もそのままだ。人々の思考を非道徳なものに変え、世界を征服しようとするブラックスティック団は、あちこちに現れては人々の思考を操ろうと行動している。それを阻止することも戦隊の活動の一つだった。

（あれ……、ない……？）

冷静になると、店を出たときまでは持っていた学生鞄がないことに気づいた。記憶を辿る。店を出て、スマホを確認して、そして雨が降ってきた。そのとき、奴らが出す悪波に思考を冒されて――。

そうだ、室外機だ。戦闘の邪魔になるだろうからと、路地の片隅にある室外機の上に鞄を置いてきたことを思い出したときだった。

「忘れ物だよ。先輩」

すぐ真後ろから声をかける者があった。聞いたらすぐわかる声。

それはこの数時間、瑞希がずっと返事を待っていた者の声だった。

「みづ――」

だが振り返った瑞希がその者の顔を見ることはなかった。顔をそちらへと向けた瞬間、硬い鞄の感触が頭部を吹き飛ばす勢いで瑞希の横っ面をひっぱたいたからだ。

既に倒れている男の上へ折り重なると、瑞希の視界は黒く塗りつぶされていった。

ひどく蒸し暑い。この部屋はエアコンが効いていないのだろうか。

薄く目を開けるも、寝ぼけているせいで事態が全く把握できない。眠っていても部屋だと認識できたのは、外の音が全く聞こえないからだ。代わりに室内の音はよく響き、足を少し動かすだけで靴音がやけに大きく聞こえる。

（……靴音？）

なぜ室内で靴を履いているのか。瑞希は視線を落とすと、自分が意識を失った際と同じブレザー姿であることを

認識した。そう、敵を前に倒れたのだ。
（……私は捕まったの？）
そのときの状況をよく思い出そうとする。しかし何度試みても記憶の途切れる寸前のことが不明瞭だった。
金色の髪。小麦色の肌。一瞬瞼の裏に浮かんだそれらを、すぐさま頭の中から追いやる。
（そんなわけない。そんなわけない）
必死に思考を巡らせていると、目の前の扉が唐突に開いた。薄汚れたコンクリート剥き出しの壁に同化している、黒っぽい鉄製の扉だ。
そこから現れたのは、気を失う前に倒したのと同じ、瑞希もよく知る黒い男たち数名だった。
（くっ……これ……っ）
反射的に瑞希は身構えようとした。が、そこで初めて自分の状況に気づく。
天井から伸びた鎖に両手が繋がれ、耳後ろで高く掲げた状態に固定されている。焦って足を動かそうとすれば、数ミリじりじりと足裏が床を移動するだけだった。足首にも何か鉄製のものがはめられ、肩幅ほどに開かれた状態で固定されていた。
「気づいたみたいだな」
瑞希と目が合った男の一人がそう言うと、隣にいた男が「なかなか目を覚まさないから、てっきり王子様のキスが必要なのかと思ったぞ。もう少しでとびきり濃厚な口づけをしてやったのに」と下卑た口調で言った。周りの男たち、三人ほどがその言葉にゲラゲラと笑う。瑞希はひどい嫌悪感を抱いた。
「こんなことして、どういうつもり？　さっさと殺すなりなんなりすれば」
冷たく言い放つと、男たちはニヤニヤと笑って瑞希を見ていた。「相変わらず気の強い女だ」と愉快そうに話す。
「言っておくけど、私はもうチームを抜けてるんだから、捕虜にしたところであんまり意味はないわよ」
人質がいる事件の解決が難しいことを、瑞希はこれまでに何度も経験していた。自分が枷になって、チームの動きを狭めてしまうことは避けなければならない。
「別に俺たちはお前にそれほど興味はないんだ。ただ、な」
醜い顔面が、拘束された瑞希の正面に移動する。明らかにこの状況を楽しんでいることがわかる口ぶりだった。
「ある人物からの頼みでな。レッドたちを始末することに協力する代わりに、お前を辱めてほしいと、そう言われている。残念ながらそいつにはペニスがついてないからな」
男の言葉に瑞希は何も反応することができなかった。
（は、辱める……って……）
チームに入隊してから、様々な危機の中、こういう状況に陥るのは初めてだった。まるで男性たちが好んで見るフィクションのような展開。しかし、今実際に宣告されると、理解不能すぎて、まるで異国語のように感じられる。
混乱する瑞希に構わず、男たちが近寄ってくる。蒸し暑い室内は男たちが少し身じろぎするだけでその雄の体臭をむやみに辺りへとまき散らした。生々しいその匂いに瑞希の嫌悪感が一気に上昇し、「やめて」と声を強くする。
「変なことしたら、ただじゃおかないから。あんたたちのその似たような顔、一人残らず覚えて鉄槌を下してやる」
身動きが取れず、明らかに状況が不利だということを忘れるほどに、瑞希の目は強い光を携えていた。
キッと悪漢を睨みつけるその眼光に男たちは一瞬たじろいだが、すぐにへらへらと余裕の笑みを浮かべると、秘密兵器とばかりに手から何かを取り出した。それは瑞希にとってよく見慣れた物。正義のヒーローに変身するため、肌身離さず身につけて……。
「なんで、あんたたちが、それを」
瑞希の声は震えていた。気を失っている間に指から抜き取られていたらしいそれが、今はひどく恐ろしいものに思える。男の手の中で指輪は腕輪へと変化した。その様子から扱い方も知っているようだった。
「これはお前を正直にするためのものらしい。これでお前の本性がわかると」
上部へと吊られた瑞希の両手に男の手が伸びる。
「……ま、待ってっ！　いやっ、やめて！　やめてえ！」
それまでの気丈な態度が嘘であったかのように、瑞希が取り乱す。鎖をカシャカシャと鳴らす手を、男が握った。その手に腕輪を通していく。
透明だった腕輪が、淡く輝きだした。そしてそれはピンク色の光を放つ。
「うっ、い、いや、いやぁああ……」
瑞希がぽろっと涙を零す。はめられた手首から、徐々にピンク色が瑞希を浸食していく。
（ああ、いや。この衣装はいやっ。思い出しちゃう、ダメっ、思い出しちゃうからぁっ！）
呆然としている間に、瑞希は悪と戦う戦隊チームのピンクへと変身していた。もう変身することはないと思っていたのに。
そして、変身すれば強さを増すはずの衣装は、今では瑞希の弱さを誇張するものになっていた。
ぴったりと肌に吸い付くスーツ、胸の形はボディペインティングのように乳輪の盛り上がりまで忠実に再現し、ピンク色のスカートの中では、陰唇の複雑な形をなぞり、そのまま放射状の皺へも密着するようにぴっちりと食い込んでいた。
（変身……してしまった……）
初めのうちは自分に力を与えてくれていた衣装も、あのときの感覚を知ってしまってからは、もはや卑猥な衣装でしかない。セクシーランジェリーを身につけた女のように、自分がひどく淫らな雌に思えてしまうのだ。
「……どうやら、本当らしいな」
自分たちを打ち負かす衣装へ着替えたヒロインが、変身した途端にその弱

さを露呈し始めたことに男たちは少々驚いたようだった。話には聞いていても、半信半疑だったのだろう。驚きが冷めると、今度は意地の悪い笑みを浮かべて瑞希の肩に手を伸ばしてきた。

「っ！　さ、触ら……ないでっ！」

ピンクのスーツ越しに男の体温を感じて、瑞希はびくりと震える。

「このスーツには痛覚を鈍らせる特殊な機能が備わっている。だろう？　皮膚感覚、対象と接触した際の触覚を中和させることで、着用した者の身体を守っている。逆に……」

男の手はそのまま、まるで慈しむかのように瑞希の胸へと下りてくる。裸と同じ形の柔らかなその丸みを一撫でした次の瞬間、乳首を括りだすかのように、ぐにぃっと形が歪むほどに強く揉まれる。

「んあッ！　あぁンッ！」

瑞希が女の声を迸らせた。薄く見えても分厚い層になったスーツのその部分が、膜が剥がれるように一枚、薄くなったように感じられる。

瑞希は潤んだ目を隠すように瞼を閉じるも、違う男の手が今度は反対側の胸の先端を探り当てたことで、白い瞼をぴくぴく震わせた。そのことで、むしろ敵の愛撫にうっとりとしているいけないヒロインのように見えてしまう。

「触覚を鈍らせたくないと思った場所……皮膚感覚を敏感にしたい場所は、変身がとける」

勝ち誇ったように告げる男の言葉に、男たちの一人が首を傾げる。「つまり、どういうことだ？」呑気な声で質問すると、男は軽く溜め息をついてから、瑞希にもちゃんと聞こえるよう、わざと大きな声で言った。

「変身がとけた場所がつまり、こいつの性感帯というわけさ」

（なんで……知られてるの……）

無言の瑞希の様子から、推理に間違いはないと男たちはいやらしい笑いを浮かべる。するとそのまま、自分も正義のヒロインの性感帯探しに参加しようと、スカートを捲りあげ、乱雑にその裾を腰のベルトへと突っ込んだ。

「やめ……っ！　触らないでっ！」

スカートをめくったところで、戦隊ヒロインはパンティを身につけているわけではない。その下にはしっかりと脚線に沿ったスーツを身に着けているのだ。なので、めくられたところでどうということはない、はずだった。

「おお……こりゃすげぇな、丸見えだ」

「俺たちを散々いじめてくれた正義の味方のあそこは、こんな風になっていたのか」

男たちがほう、と興味深そうにめくられたスカートの中を覗き込んでくる。瑞希は顔をかっと赤くした。羞恥に唇を噛むことしかできない。ふっくらとしたその唇。同じように、男たちの眼前に晒されてしまったそこも、その唇の形をくっきりと際だたせてしまっていた。ぴっちりと食い込んだスーツが、割れ目の膨らみも、その中の具も、鮮明なピンク一色の立体にしてしまっているのだ。

「なるほど。こいつぁ立派なピンクのオマンコちゃんだ」

「ぷっくり膨らんで、見ただけで柔らかいのがわかるな」

しっかりと触感も確かめようと、男が指を伸ばす。ふっくらとした割れ目をつんつんとつつかれ、窪みに沿って指を上下になぞられる。

（あぁっ、それっ、いやぁああ……）

それだけで瑞希はおとがいを反らせる。ふにふにとそこが可憐な弾み方で男の指を楽しませているのがわかる。悔しさにきゅっと目をつむった。

「まあまあ、上から順番にいこうぜ」

そんな戦隊ピンクの表情を観察しながら、別の男が少女の胸に再び愛撫を始める。片方の胸は優しく撫で回し、もう片方の胸はやや強めにもみ込む。そうするうちに身体を守ってくれるはずのスーツは一枚、また一枚と層が剥がされていくように薄くなり、ぷっくりと勃った乳首そのものが透けて見えるまでになった。

（あ、ああ、ち、乳首が、乳首が硬くなってる……やだ、ばれたくない、ばれたくない、乳首、硬くなってるの、気づかないで、気づかないでっ）

瑞希は内心で必死に懇願するが、そのような祈りは男の誰にも届かなかった。誰しもがスーツ越しにはっきりと姿を表したぷりぷりとした乳首を見つめ、卑猥な笑みを浮かべている。

「胸と乳首の大きさが合ってないんじゃないか、オマンコピンクちゃんよ」

「胸に比べて乳首が大きすぎだ。小指の先っちょくらいあるんじゃないか？」

「……っ、言わないでっ……んっ！」

黙れとばかりに、浮き出た乳首を摘まれる。指で押しつぶされたと思うと、早く出てこいとでも言うように、にゅいんと伸ばされる。

「おいおい、人に頼むときは敬語だろ？　習わなかったのか？」

「あァァ……い、いやァぁん……ち、乳首、の、伸ばさないで、伸ばさないで、くださいっ」

調子に乗った男たちに促されるまま、瑞希は涙混じりの艶っぽい声で訴える。その間に乳首はますます尖りを増していった。

「どうせいつもオナニーするとき、弄りまくってるんだろ。だからこんなに大きなすけべ乳首になっちまうんだよ。スケベ乳首の癖に恥ずかしがってんじゃねえ！」

「くぅっ……い、痛ぁいいっ！」

悪戯小僧を懲らしめようと引きずり出しでもするかのように、男の指がそれまでより強く乳首を引っ張った。にゅっとさらに乳首が伸びる。

（いやっ、痛いのに、なんで、変な感じ……っ！）

瑞希の目尻に涙が溜まり、苦痛と快楽の狭間で身悶える。

そして勝ったのは後者だった。

ぱちん、と風船でも弾けるかのよう

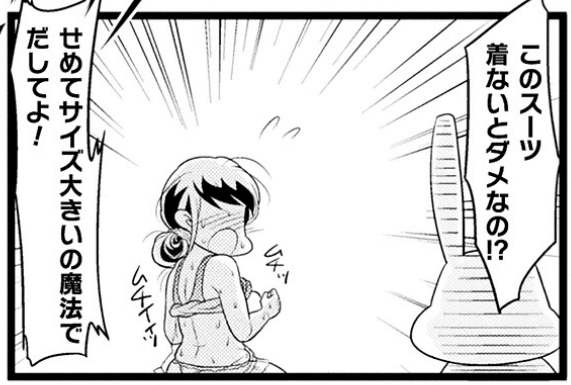
行ってもいないヒロインが帰ってきた!?
（ドラ〇もん6巻を読まずに7巻を読み始めた気持ちで）

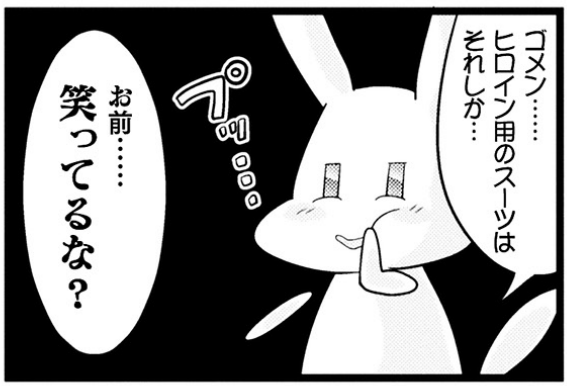
帰って来た!! スーパーヒロイン きらりん☆

漫画COMIC／嘉納（かのう）あいら

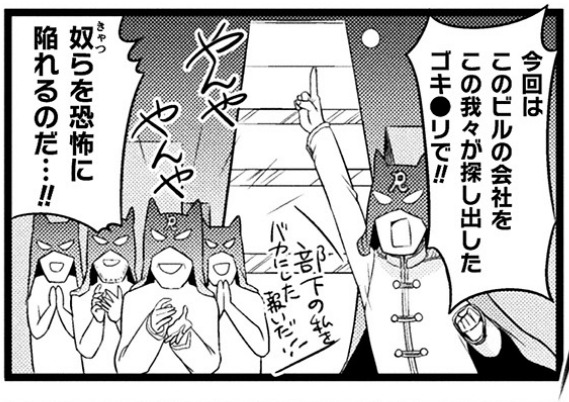
……え 今?（困惑）

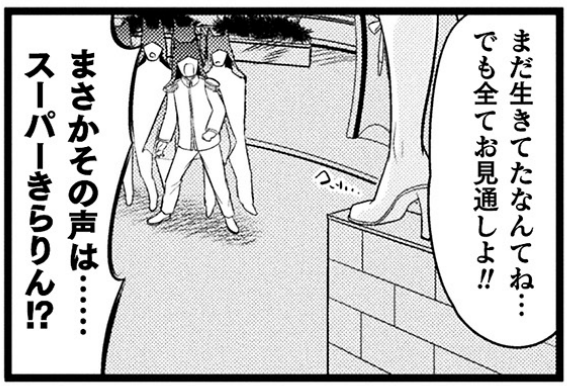
予算の都合で……





その名も「リストラーズ!!」





やめて！泣けてくる

そうよ！泣く子も痺れるスーパーヒロイン!!

スーパーきらりん見参よ!!

○年ブリ☆ダキッ

ぽよん♡

レーン…

な……何よ！

……

……いや

時の流れって残酷だなと…

いやっ…そんな切々と……言わないでっ……!!

語るリストラーズ

だいたい何で今更でてきたのよ!!

解散したはずじゃ!?

アイツ達でてきたから

私まで…こんな姿に……!!

よくぞ聞いてくれた!!

我々は一度は解散した。各々守るべき家族がいるため。

しかし！社会は変わらない。ますます悪くなるこの世の中。そして財政！

世の中には沢山のリストラされ家族にすら見捨てられた戦士達がゴロゴロいる。

我々は立ち上がった…このまま潜んでいていいのかと？

世の社会が良くなるのなら我々はもう表に出て行く必要がない…はずだったのだ…

しかし……!!

それでも社会の闇は消えることなどない……!!

ゴッ

ゴッ

ガリ

こんな奴ら相手してないで早く寝たい

我々はまた復活したのだよ！社会の闇を消し去るのはやはり我々しかいないのだ!!

母親になった身体をヴィランが狙う!!

キッ
ん…っ！
まったくもう…！
なんだっての！
電光人妻ライトリング！
漫画 COMIC 歌麿（うたまろ）

ドォン
きゃああー！
MOMOIRO KINDERGARTEN
ドン
まだ来ないのかライトリング！
早くしねーとガキどもの乗ったバスが…
瓦礫に埋まっちまうぜェ――ッ！
たすけてママー！
ドォン
ふ～～～…みんなお待たせ！
パチパチッ
ドスン
ママ！
パーッ

わーっ
すげー ライトリングだ！
がんばって あいつを たおして！
ありがとう！ みんな安全な ところに隠れててね

待ってたぞ ライトリング
投獄されて十年 ようやく 脱獄してきたぞ
ドカッ

お前に復讐 するためにな！
ヤバイッ

ギュッ
ビリッ
ひゃっ!?
ビリッ

オラァ！
ゴガ
ブッ

ハアーッハッハ！ 現役時代と体型 変わりすぎだろ！
ビーッ
グッグッ
乳も尻もデカく なっちまって 服に入ってねー じゃねーかよ！
スピードもパワーも 全然出てねえうえに 服を庇いながら戦って 俺に勝てるわけねえだろ！

あぐッ!?

ゴ

ドッ

な なんのつもり!? 下ろして!

言っただろ? 復讐だって

あっ!?

グ

い痛っ…! そんなとこ触るな!

今からお前のみじめな姿を…

ビク

ビク

グー

グーッ

世界中に晒してやるよ!!
ぎゅうっ
ぎゅだっ
いやあっ!?
びくんっ
バラ バラ バラ
視聴者の皆さんお分かりいただけますか!?
脱走したヴィランと戦っているのはレジェンドヒーローのライトリングです!
ババ バババ
彼女は今ヴィランに捕まって…なんてこと!服を脱がされています!
やめっ…!見ないで!
放しなさいオーバードーズ!こんなことして…恥ずかしくないの!?
プル
グッチュ
ギュッ
グチュ
おいおい恥ずかしいのはお前だろハハハ!暴れて勝手に服が破れてやがるぜ

宿敵を倒し平穏な日々を送っていたヒロインに
悪夢の性調教が再び襲い掛かる！
カースドレッサー麗火（れいか）
恥辱のバトルコスチューム
小説／NOVEL 黒名（くろな）ユウ
挿絵／ILLUSTRATION ボリス

有希は回転ドアにぶつかりそうな勢いで建物の外へ飛び出した。街のイルミネーションがぼやけて滲む。
「待ってくれ！　キミのためにせっかくスイートルームをとったのに……」
スーツ姿の男が追いすがる。
「そんなつもりじゃありませんでした。埋め合わせに食事をと課長が仰るから」
振り返りも歩みも止めずに、ただ言い捨てる。泣き顔を見られたくない。
長い髪が夜風になびくままに、まだ十代の名残りのある純真そうな顔立ちを強張らせ、バッグとスプリングコートをぎゅっと握り締めて歩き続ける。
親切な上司だと思っていた。紳士なのだと。でも、それは社会に出たばかりの世間知らずな自分の勘違いだった。優しくしてくれたのは下心だったんだ。
「誤解だよ、待ってくれ、な？」
「ついて来ないでください！」
叫ぶ。と、いきなり肩を掴まれる。
「きゃあっ……」
突き飛ばされた先は裏路地の暗闇。表通りの喧騒をその背で遮り、若作りの気障顔が薄ら笑いを浮かべていた。
「な……何をするんですか！」
「何するつもりかって、そりゃあ……」
ニヤケ顔がお湯をかけたケーキのように歪み、グロテスクに変容する。頬まで裂けた牙だらけの口。いやらしく垂れた動物のような舌。おぞましい化物だ。口調までもが変わっていた。
「疼くぅ……疼くんだよぉ！　大人しく犯らせろよ、ガキがぁ……」
「ひっ……」
あまりのことに声を失い、逃げようとすら思いつかない。悲鳴を上げたのはブラウスの胸元を引き裂かれたときだった。服の生地が破れ、千切れたブラの下から青白い乳房が月光に躍る。
「嫌ああああぁっ！」
曝け出された薄いピンクの乳首に涎まみれの野獣の舌が巻きついた。
「じゅるるうっ！　美味ぇ！　いい味のおっぱいだぜ！　クヒクヒッ！」
「や……やめて……うくぅっ！」
身を離そうとするが男の力には敵わない。いや、これは男以上の力だ。
化物となった上司が乳首に吸いつき、歯を立てる。それは荒々しさに反して意外にも巧みな加減。ザラつく舌腹でのくすぐりまで織り交ぜた愛撫だった。
「ああっ……んっ……嫌、ぁ……」
「げひひ、最後にゃもっともっとってオネダリするようにしてやんぜ？」
甘噛みに濡れた有希のピンクの尖塔から、痺れる疼きが胸の柔肉に走った。おぞましいのに、恐怖しかないのに、背筋が震える理由はそれではなく……。
「は……放して！　放してください！」
「ククッ、そんなこと言って、自分からこすりつけにきてんじゃねーか」
力ずくで抱き寄せておきながら勝手なことを口走り、化物は頬に胸の谷間の豊潤を楽しみ、そしてスカートに爪をかけると布地を一気に裂き下ろした。
「きゃあああああああああっ！」
露わとなる美しい脚。淫らな視線がベージュのストッキングの下の飾り気のないショーツに注がれる。隠そうとするも手首を掴まれ許されない。
「あーたまんねぇ！　想像通りだ。地味な下着ってそそるぜ！　マン汁でぐちゃぐちゃにしてやりたくなる。入社してきたときから思ってたんだよぉ」
化物の節くれだった指がショーツにねじ込まれ恥毛をかきわけていく。
「ケケッ、ヌルつかせてんじゃねえか」
「嘘……そっ、そんなはず……！」
屈辱と羞恥。頭に血が昇る。だが、そのわずかな間に探り当てられた敏感な肉芽が、にちゅりと圧し潰され、その瞬間、恥悦の稲妻が下腹を撃ち抜く。
「くはあぅっ……そこ駄目ぇ……」
「コリコリしてビチョビチョだ。お前、もう剥けてるじゃねーか。見かけによらず、とんだ淫乱だったみてえだな！」
有希の太ももを伝う粘り気のある熱液。化物が緩急をつけて裂け目をなぞると、どっと水量を増して奥から滴り出る。
「ヒキキッ、凄ぇオツユだぜ。ビラビラを拡げるともっと出てくるぞお～」
「ちがっ……違いますっ！　そんなのじゃ！　私、違っ……ひあぅ！」
違うのに。拒みたいのに、それなのに。どうしてもっとそうして欲しいという気持ちが込み上げてくるのか。
「ああぅっ、うう、あああああっ！」
その口からついに甘い喘ぎが漏れたそのとき――
「ここをどこだと思っているの？」
路地の入口で低い呟き声がした。
「……全滅させたと思っていたのに、お前たち淫魔はゴキブリと同じね」
そこに立っていたのは背の高い女だった。黒のトップスに紫のインナーを合わせたコーディネイト。タイトミニから伸びるスラリとした脚。緩いウェーブのかかった長い髪をふわりとかき上げる仕草。漂う大人の成熟。
（この人、どこかで見たことが……）
そのエレガントな佇まい、気品とカリスマ性を有希は知っている気がした。
「なんだ、テメエ!?」
振り返った化物が牙を剥く。
「麗火よ」
「はあ？　レイカだぁ……」
と化物。しかし、有希は思い出した。
（Rei-ka……そうだ、あのモデルの）
世界的なスーパーモデル。自立した理想の女性像として自分も憧れていた。確か、何年か前に突如として失踪して……それがどうしてこんな場所に？
体形も違う。スタイルが良いことに変わりはないが、はち切れんばかりの胸、ぐっと張りだしたヒップ。Rei-kaはこんなにグラマラスではなかった。
と、それ以上の変化が起こった。
「お……おおおおおおおおっ！」
怒号とともに麗火の衣服が裂けるように消失。代わりに、肌をわずかに覆う新たな装いが体内から現れる。
豊かな乳房を鷲掴みにする悪魔の爪の如き、美尻を舐める巨大な舌の如き、

奇怪で妖艶な漆黒のコスチューム。地獄の炎か亡者の血流を思わせる深紅の亀裂が全身に走り――そう、それは明らかに化物となった上司と同じ、この世とは起源を違える禍々しい姿だった。

そして振りかざされたのは肉食竜のものかと見紛う凶悪で巨大な爪。それは何本もの鋭利なブレードだった。

「もう一度言うわ。ここをどこだと思っている？　私の目の前よ……お前たちが生きていていい場所じゃない！」

思いもしない異形への変身と、凄みある冷酷な表情に一瞬怯みかけた化物だが、それはすぐに敵意へと変わった。

「ナメんな、テメエから犯してや……」

斬！

言い終えもさせずに一閃。化物の首が軽々と飛び、噴血が雨と降った。

傷ひとつ負うことなく化物を瞬殺した麗火だったが、不意によろめくと、切なく顔を歪めてうずくまった。

「くっ……疼く……」

その様子に有希はようやくショックから覚め、おずおずと声を掛けた。

「あ……あの、大丈夫……ですか？」

しかし、応じた眼光は冷たかった。

「……次は貴女の番よ」

化物に対するのと同じ口調。立ち上がる地獄の使者のような姿。ブレードを伸ばす影法師が地に落ちる。

（嘘。助けてくれたんじゃないの？）

乳房を貫く刃の感触とともに、有希は意識を失った。

※　※　※

淫魔――淫らなる魔物。そう呼ぶ他にない超常の存在。麗火が奴らと遭遇したのはモデルとして絶頂にあった頃のこと。以来、彼女の人生は一変した。

淫魔に襲われた者にはふたつの末路がある。ひとつは自らも淫魔となる道。吸血鬼に噛まれた者が吸血鬼になるように、血の渇きの如き淫らな欲望のまに生きるのだ。もうひとつはそうなるまいと抗う道だが――淫魔が最も愛するのはそういう者を堕落させることだった。かつての麗火のように――愛玩性奴としてあらゆる恥辱を受け、それを自ら望むようになるまで。

間接照明が照らす広々とした寝室。黒い下着姿で立つ麗火の見下ろす大きなベッドの上で、先ほど助けた若い女――有希が全身を緊縛されていた。

両腕は背面にひとつにまとめられ、大きく反りかえった仰向けの上半身。乳房には革ベルトのような拘束がとぐろを巻いている。下半身は開脚状態に固定。股に食い込んだ鎖縛りが充血した小ぶりな陰唇をはみ出させている。

麗火がやったことではない。

「……奴隷装。これは淫魔の調教具」

淫魔の体液を浴びることで発現し、犠牲者が快楽の虜となるまで責めるのを止めない。有希の胸元に妖しく光を放つ淫痕が彼女の奴隷装の根源だった。あのとき試みた切除は間に合わず、連れ帰り、意識を取り戻した彼女に事態を説明する短い間でここまでの変態を遂げたのだ。全て麗火のときと同じだった。そして、奴隷装は行動の自由を奪うだけではない。身体の内も外も淫乱化させる。皮膚に浸透して流し込まれる快楽のエキスは宿主の性感を高め、性欲が異常増進した常時発情状態にし、体形すら肉感的に造り替えてゆく。

「すでに乳房の肥大化も始まっているわ。母乳まで滲み出している」

「い、いや……恥ずかしい……」

だが、その恥ずかしいという感情すら快感となり、やがては屈服を至上の幸福と受け入れるまでになる。それが奴隷装の強力な調教プロセス。ストイックを信条とし、それを誇りとしていた麗火ですら一度は堕ちたほどの。

まだ大人に成りたてのようなこの少女が身も心も快楽の奴隷へと変貌させられてしまうのは時間の問題だろう。

「はあんっ、私、どうなってしまうんですかっ……気持ちいいんですっ……んはあっ、嫌なのに……あ、あはうっ」

有希の悶え方が激しくなっていく。湧き上がる淫欲から逃れようと右に左に転がり、あるいはビクビクと痙攣し。隠しようのない肉体の恥部を晒すことで感じる羞恥。それに紛れる快感。際限なく溢れる愛液はシーツに大きな染みを作り、火照った肌に浮かぶ珠の汗から立ち昇る牝芳香が室内を満たす。

「あの男同様、欲望のままに人を襲う化物になるか、奴隷装に屈服して白痴のように快楽を貪り続けるか……」

「い、嫌っ、そんなの……ああぁっ」

冷酷な宣告に有希が悲鳴を上げる。

「嫌ならばこの快楽と戦いなさい。強い意志を保って抗うの。そうすれば私のように奴隷装を支配できる！」

手に入るのは魔物の超常的戦闘力。そうして麗火は彼女の主人であった淫魔侯爵と、その配下たちを倒したのだ。

復讐と淫惨な戦いの日々からの引退。そして、平穏が訪れたと思っていた。

有希を襲った淫魔がどこから現れたのかは定かではない。しかし、新たな戦いが始まったのは確かだった。

奴隷装を支配しても変身すれば性感は倍になり、しかもそれは蓄積される。数年ぶりの今日の戦いでも、たった数秒で肉欲に呑まれそうになった。麗火にはもう長時間の変身に耐えるだけの余裕は残されていなかった。

だから――

（この娘には次の戦士になって貰わなければならない。私の後を継ぎ、再び現れた淫魔たちを滅ぼす戦士に！）

「ううっ……はぁぅ……は、はいっ」

繰り返し全身に広がるエクスタシーを必死に無視しようとする有希。しかし、それを察知した奴隷装によって乳房は飛び出すほどに強く絞り上げられ、クリトリスは激しく苛め立てられる。

「ああぁっ！　でも駄目っ……駄目なんです！　だってこんなに……ひぐ！　お股ゴリゴリ当たって！　おっぱい絞られて痛いのまで気持ち良くぅっ！」

淫水はもう、溢れるを通り越し、びちゃびちゃとまき散らされるほどだ。

見守る前で奴隷装は更に成長し、眼

著者近刊　『貞操観念が逆転して童貞女子がエッチに飢えた学園』『俺とエッチをする権利書が出回ってラッキースケベが無双すぎる』　好評発売中！

蒼炎のくノ一 柚緋（ゆずひ）
忍を引退した少女の肉体を
謎の忍者集団が淫欲で穢しまくる!!
小説／NOVEL 天戸祐輝（あまとゆうき）
挿絵／ILLUSTRATION 秋月からす（あきつき）

［この小説には分岐が設けられています。ルートごとにA～Gの番号がふられていますので、末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。］

【ルートA】

平和な世界の中に隠され、戦国の世から紡がれていた影の集団。

――忍び――。

その者たちは各国の情報収集、そして国内で行われる様々な調査・殲滅を任務として今も存在し続けていた。

まだ九時前にもかかわらず真夏の太陽が人々を照らしてくる。

近年の気温上昇、温暖化のお陰で夏に涼しい時間などない。

気温はまだ上がりきっていないのにみんな額に汗を掻き、それぞれの仕事場に向かって歩いている。

「も～うっ、夏休みだっていうのに大学に行かなきゃいけないなんてホンットに不幸」

「ふふ、仕方ないわ、テニス部の応援を頼まれてしまったのだから」

少しきつそうな目つき、大人びた輪郭に高い鼻、そして花弁のように美しい唇をした鳥草柚緋は、夏の風に黒いミディアムヘアを揺らしながら親友の彩に笑いかけた。

二十歳の二人は運動部のヘルプを頼まれることが多く、見るからに運動神経がいいのが分かるスタイルだ。

特に柚緋は白い夏用のミニスカートワンピース越しでもそのスタイルが分かる。

清楚なワンピの胸元は丸い柔房を強調し、周りにいるどの女子と比べても大きくて形が良い。

細い腰から女性らしく膨らんだ逆ハート型のお尻も美しいラインを描き、長い脚も細くて魅力的だ。

どこかの雑誌のモデルといっておかしくはなく、すでに何社からスカウトが来ている。

「うんうん、今日も見てる見てる」

彩が柚緋に目を奪われている男を見ては当然と頷いた。

「わたしは注目されたくないのだけどね、目立つの嫌いだし」

「な～に言ってるの、柚緋の人気は私が保証してあげる」

彩が保証するとばかりに胸を張る。

「でもおかしいのよね、柚緋が綺麗なのはみんな認めるのに、告白しようとした男子はみんななにも言わずに玉砕してるのよね……」

「そう……ね……」

彩が不思議がった言葉に、柚緋は当然とばかりに呟いた。

柚緋が容姿端麗なのは同性だって認めるほどだ。

しかし、彼女に告白しようとした男子はいつも「ごめんなさい」を言う前に立ち去ってしまう。

（やっぱり、わたしは普通の子にはなれないのかもしれないわ、姉様）

心の中で尊敬する女性を思い浮かべて、彼女の願いに応えられなかったことを謝る。

柚緋の家は何十代も前から続く忍びの家系、しかも彼女は素質と実力を認められ、十代半ばで潜入と殲滅を行う精鋭部隊に選ばれるほどだった。

しかし、所属して最初の任務で部隊は全滅。

柚緋は姉と慕っていた上忍のお陰で唯一逃げ出すことに成功した。

精鋭部隊の全滅は里の者全員に衝撃を与え、任務失敗の要因は柚緋の未熟さとされてしまったのだ。

責任を感じた柚緋は忍びを引退し、上忍である姉様の最後の言葉に従って普通の生活をしている。

（わたしが幸せになる資格なんてないわ）

過去を思い出し、数人の忍びに押し倒された姉様の姿に唇を噛み締める。

顔はいつの間にかに表情を失くし、すっと目尻がツリ上がってくノ一の表情になっていく。

「ね、ねえ柚緋、柚緋ってば」

（わたしはもう戦えない、くノ一の資格もないわ）

隣で話しかける彩の言葉も聞こえず、自責に思いを巡らせる。

くノ一装束や武器は今も持っているが、柚緋は前線からも離れ、今では敵の情報すらも教えてもらってない。

身体だけは運動部のヘルプなどで維持はしているが、現役の時と比べれば格段に弱くなっている。

（姉様、まだ生きているのならわたしの命に代えてでも助けだすのに！）

「ちょっとゆ～ず～ひ～っ！」

「えっ？」

思いに没頭していた柚緋を、彩が怒った顔で睨んできた。

すでに大学の学門は過ぎている。

よほど長く過去のことを考え、彩を放っておいてしまったらしい。

「あ、ご、ごめんなさ、ちょっと昔のことを考えてしまって……」

「な～に？　昔の男でも思い出してたのかな？」

「そんな良い物ではないわ」

優しげに笑った瞬間、大学の雰囲気が違っていることに気付いた。

ここは表向き普通の大学だが、本来の顔は忍びの研究と育成の施設だ。

キャンパスの至る所には監視用のカメラが取り付けられ、警備員や講師の一部は忍びが担当している。

しかし、今日はその姿がない。

（おかしいわ、まるで淀んだ水に浸っているみたい）

くノ一の直感が危険を伝えた瞬間。

「くノ一を探している！　来てもらうぞ」

忍び装束の男が目の前に現れた。

今は戦えない、素直に連行される。
↓ルートB P174へ

戦って彩とともに逃げ出す。
↓ルートC P178へ

【ルートB】

目の前に現れた忍びは二人、しかし他にもいるのは簡単に予想できる。
（多分、警備と講師をしていた忍びは倒されているわね）
ここまで大胆に動いているということは、抵抗戦力はすでに黙らせているということだ。
現にこの忍びが現れてから周りに男子学生の姿はなく、意図的に人払いがされているのが分かる。
「来てもらうぞ」
忍びの言葉には拒むことは許さないという意思が感じられる。
ここで抵抗しても捕まり、酷い目に遭わされるのが一目瞭然だ。
彩の身を守るためにも、ここは彼らの言うとおりにするしかない。
「分かったわ……」
「柚緋……」
不安がった彩が腕を絡ませてきた。
彼女の胸があたった腕から鼓動が伝わり、不安がっているのが分かる。
「ここは言うとおりにしましょう、そうでないと……」
視線を向けた先に、拒んだ女子が気絶させられたのが見えた。
「う、うん……」
拒んだ後のことが分かった彩も黙って頷き、忍びの後に付いて行く。
（表だって動いているということは、ほぼ制圧されたみたいね）
忍びに連れられ、運動部の部室に向いながら考える。
忍びがここまで表だって動くことは本来あり得ない。
あるとすれば、完全に制圧した場所のみだ。
（今は迂闊に動けないわ、彼らもくノ一を探しているようだし、ここは普通の子を装ってチャンスを待つしか）
引退してからかなり経つ。
下忍に負ける気はしないが、今の状態でどこまで戦えるか分からない。
柚緋は正体を隠しながら忍びに従い、テニス部の部室前まできた。
（なにもここを選ばなくても）
自分が向かう先だった場所に呆れる。
おそらくここには自分と同じように連れられた女学生が集められ、なにかしらの手段で調べられているのだろう。
（とりあえず、なんでくノ一を探しているのかだけでも調べな……っ!?）
「ゆ、柚緋っ!?」
ドアを開けて中に入れられた瞬間、柚緋と彩は目を見開いた。
ロッカーと長椅子が置かれた十畳ほどの部室、その中には何人もの女子学生が集められ、下着や裸姿で忍び装束の男に奉仕をさせられている。
「これはなんなのっ！」
「性処理の相手をさせている」
「性処理って……っ」
考えが甘かった。
女子学生を集めてくノ一か否かを調べているだけかと思ったが、探す手段として性交を利用しているとは思わなかった。
（くノ一なら自らを守る術も、相手から情報を訊きだすための色も覚えているものね）
おそらく彼らの目的はこの大学で研究していた新しい忍具か技術。
なのにくノ一まで探している意味が分からない。
強い肉体を持つ子が欲しいのか、それとも精神を書き換えて利用したいのかは分からないが、正体が知られてしまったら終わりだ。
集めた女子とともに一生彼らの性処理女、または子を産む道具として利用されるだけだ。
（これくらい倒せるはずだけど……）
倒したところで、この人数を連れて逃げるのは不可能だ。
柚緋は機会が訪れるのを願いながら、感情のない声で命令する忍びに従って一人の男の前に立たった。
「なかなか良い女だな」
「……」
なにも答えず、ただ目の前の男を見つめる。
顔を隠す頭巾に忍び装束の男。
頭巾から見える目からその感情を読み取ることは難しいが、彼がくノ一であるのかどうかを見定めているのは確かだ。
「まずはその大きな胸で挟み、しゃぶってもらおうか」
「いやよ」
「ん？　拒めると思ってるのか？」
迷うことなく拒否した柚緋に男は怒ることもなく、隣に目配せをした。
「きゃあああああっ！」
「彩っ!?」
拒否した罰とばかりに彩の服が引き裂かれ、瞬く間に二人の忍びに胸と陰部を嬲られだした。
「ゆ、柚緋助け……あああっ」
今すぐにも犯すように一人の忍びが胸を揉みながら乳首にしゃぶり付き、もう一人が太腿の間に顔を挟んで陰部を舐めだした。
周りではすでに犯されている女子たちがさらに責められ、この中の誰か一人でも反抗したら激しく陵辱すると脅迫してくる。
「んぁああっ、柚緋……」
彩が涙を流しながら助けを求めてくる。
男たちも頭巾越しに笑い、取り出したチンポを膣口に向けた。
「卑怯者……っ」
ここにいるのは思慮深くもなく、任務よりも感情が優先する下忍たちだ。
くノ一として前線にいた時と比べられない身体だが、この程度の下忍なら瞬殺することはできる。
（できるけれど……、仕方ないわね）
倒したところで自分がくノ一だとバレ、追手として彼らよりも手練れの上忍が差し向けられるだけだ。
柚緋は胸を求めた男の前に跪き、サマーワンピの肩紐をずらして上半身を

著者近況　今年の夏は暑いので水分補給は重要ですよ。そしてくノ一はいつ見てもいいのです、強くて露出の多いキャラは人気あるしね（笑）　また近々お会いできるかもなので、よろしくお願いします！

隠す布を引き下ろした。
「おおっ、なかなか良い形の胸だな」
「んっ」
白と青のストライプブラ越しに胸を触られ、Fカップの柔房を揉まれた。
（不快しか感じない）
性知識はそれなりにある。
胸を揉まれれば気持ちよく、処女を失った後なら膣挿入は快楽を生む。
だが今の胸には形を歪められる気持ち悪さと、まるで油を塗られるような嫌悪感しかない。
「んっ……うっ……いつまで……」
長い睫毛を震わせ、唇を噛み締めて胸を揉まれる嫌悪感に耐えた直後。
「直に見せてもらうぜ」
男が乱暴にブラをずり下げ、Fカップの白い柔房を剥き出された。
「み、見ないでっ!?」
「ピンク色で綺麗なおっぱいじゃないか、さっそくその胸でやってくれよ」
「……最低な」
覚悟はしていたが、まだ経験のない身体が自然と動いて胸を隠した。
顔は抑えられない羞恥で熱くなり、赤く染まっていくのが分かる。
「さあ、早くやってくれよ」
「分かった……わ……」
涙ながらにチンポを咥えている彩を横目に、柚緋は唇を震わせながら男が晒した肉幹に柔房を近づけた。
「ちゃんと尻も見せろよ」
「――っ」
悔しさに堪え、言われるままスカートを捲り上げて可愛らしいショーツに包まれたお尻を見せる。
「や、やるわ……んぅっ」
ストライプで膨らみと形が強調されているお尻を見せながら、柚緋は自ら胸を寄せてペニスを包み込んだ。
（熱っ!? それに硬くて、すごく臭い……）
初めて感じるゴム塊のような硬さと、真夏の太陽のような熱に胸を灼かれ一瞬おののいた。
なによりも、亀頭から漂ってくる匂いがキツイ。
「お、いいおっぱいだ、そのまま上下に動かしてチンポをしゃぶれ」
「こ、こう……んっ、んちゅ、んぅうう、くぅ、んぶぅううっ」
言われるまま乳房を上下させて亀頭を口に含んだ瞬間、口腔に満ちた雑巾臭に吐き気が込み上げる。
「んぅえっ、ごほっごほっ、なんなのこの匂い、臭くて吐きそうだわ」
「ん? そうか? 最近風呂入ってなかったからな」
「なかったってっ!? そんなペニスを咥えさせるなんてなにを考えて……」
「るっせぇ、黙ってしゃぶればいいんだよ、あとこれはいやらしくチンポと言え肉便器」
「んぶぅううっ! んぅ、んぇ、んぶっ、んんっ、んぶぅえぇっ」
頭を掴まれ、パイズリしているチンポを強引にしゃぶらされた。
唇は乳房に触れるほど動かされ、汚いチンポを口で奉仕洗いさせられる。
（気持ち悪い、口の中が腐っていきそうだわ……、で、でもわたしが耐えないと彩たちが……っ）
同じように犠牲になっている女の子を守るために、柚緋は必死に胸を寄せて強く扱いた。
Fカップの胸は男のペニスの大半を包み、熱さで滲み出た汗でにちゃにちゃといやらしい音を鳴らす。
「んぅ、んぶっ、んぇ、んふ、んん」
「胸はいいが舌使いが下手だな、おまえもしかしたら初めてか?」
「んぶっ、んぅ、ふぉ、ふぉれがろうしたっれ言ふの」
「あははっ、そいつはツイてるぜ、俺が丁寧に教えてやるよ」
「ふぉんなろ誰ふぉ頼んれらい……」
「まずは舌をチンポに絡めろ、あとはおっぱいの動きに合わせて吸うんだ」
「そんらふぉろできら……っ!? んぢゅっ、んぶっ、んぅっ、んふっ」
拒むことは許さないとばかりに頭を押さえ、胸を膣に見立てたように腰を突き上げてきた。
色が使えないことでくノ一ではないと判断した忍びは亀頭を舌に当て、強制的に口奉仕の仕方を教えてくる。
（汚い、変な味もするのに……でも、でも無理やりされるよりは）
「んぅ、んちゅっ、んえぇ、んぶっ、んぢゅっ、ぢゅぱっ、んちゅっ」
強制的にこんなことをさせられるよりは、自分からした方が何倍も楽だ。
柚緋は瞳に涙を溜めながら顔を前後させ、唇で何度も亀頭を擦り包むようにしてパイズリ奉仕をする。
「少し教えただけで覚えやがって、そうだ、そうやってもっとしゃぶれ」
「んちゅっ、んぅっ、んっんっんっ、んちゅっ、んんっ、んぢゅぱっ」
「うぁあああっ」
亀頭に吸い付き、チンポの輪郭に沿うように舌を這わせた瞬間、男が腰をピクピクと跳ね上げた。
（なに? 今のが気持ちいいの? ならこうすればもっと）
「んちゅっ、んっ、んろ、んちゅ……んっ、んちゅぅうっ」
早く終わらせるために胸で扱き、舌を先割れに沿って鈴口を舐めた直後。
ぴゅしゅ……。
「んぅうううっ!?」
少ししょっぱい体液が舌を直撃した。
（こ、これ精液……っ!?）
口の中で射精されたと思い男を見上げてみれば、気持ちよさそうに柚緋の姿を見ている。
（違う……の? でも、多分もう）
今のがカウパー線液だと分かった柚緋は今までよりも強く肉幹を胸で扱き、音を立てて亀頭にしゃぶり付いた。
チンポは線液を切っ掛けにしたように肉幹を震わせ、唾液が蒸発しそうな熱さを口腔に満たしてくる。
「んぅっ、んちゅっ、んふぁ、んっ、んぅっ、んっんっんっ、んちゅぱっ」
（早く射精して、こんなのもう……）

著者近刊 『くノ一紗綾 穢されし聖姫』『退魔教師希彩 羞虐の学園』『これでも僕はご主人様? ダブルメイドに板挟み』、二次元ぷち文庫でも『武具乙女のうつわ EPO長刀クイーン誕従』など公開中！ 好評発売中！

処女のフェラに興奮した他の男たちまで眺めてきた。
胸やお尻には幾つもの視線が突き刺さり、唇を汚される瞬間を待っている。
（早く、早く終わりなさいよっ）
「んちゅぱっ、んっ、んぅっ、んちゅぱぢゅる、んぢゅるるっ」
「くお、すごいぞ、出る、出るぞ」
「んぢゅぱっ、んっんっん、んんっ」
我慢できなくなった男が腰を激しく動かしてきた。
柚緋の唇は捲れ返り、亀頭が出入りする度に飛び散った唾液が大きな胸を汚していく。
「んぅっ、もふ、イッて、もう出しれ……んちゅっ、んぶっ、んっんっんっ、んぢゅぱ、んぅううっ」
「くっ、いいぜ射精してやる。ちゃんと全部飲めよ」
「――っ!? なにふぉ言っれ……んぢゅぱっ、んぶっ、んぢゅっ、んぶぁ、んぢゅっ、ぢゅっぱじゅぶじゅぱっ」
肉幹をビクビクと震わせた男が射精に向けて腰を突き上げてきた。
胸の谷間には肉幹の脈動と、内部に塊のような物が登っていく感触まで伝わってくる。
（やめて、口の中になんて射精しないで！ せめて胸に、胸に射精していいから口には……）
「んぢゅぱっ、んぅっ、んっんっんっ、んうっ、んんんん――――っ!?」
びゅりゅびゅぷびゅるっ！
胸を左右別々に動かして口から抜こうとした瞬間、ビクビクと震えたチンポから煮えたヨーグルトのような白濁液が飛び出した。
味覚が麻痺するほど苦い体液は舌を直撃し、ヌルヌルと亀頭を咥えさせられた口の中に広がってくる。
「んぅううっ、ううっ、んむぅうっ、んむぅうううっ！」
飲み込むこともできず涙を浮かべ、吐き気を覚える精子を我慢しながら男を見上げる。
しかし、射精を終えた男は抜こうとはせず、柚緋が自分の体液を飲む瞬間を期待した目で待っていた。
（飲めというの？ こんな気持ちの悪い体液を……）
「んぅうう……うう……ゴクッ、んぐんぐ、んぅ……ゴクゴク、んぐっ！」
覚悟を決めて瞳を閉じ、長い睫毛を震わせながら飲み込んだ。
想像以上に粘度の強い体液は喉に引っかかり、なかなか奥に流れていこうとしない。
それでも柚緋は必死に喉を動かして飲み、チンポから精液の味がなくなるまで吸い取った。
「んちゅるる……んくっ、んふぁ、ゴホッゴホッゴホッ！ んうぇ……」
全部飲み終えた柚緋はやっと解放され、床に両手をつき咳き込んだ。
胃を重くした粘液の吐き気に舌先からは唾液が滴り、全身が汗ばんでショーツが陰部やお尻に張りついてくる。
「どうだ初めての男の味は？ 美味かったろ」
「美味しくなんてないわ、はぁはぁ、気持ち悪くて吐きそうよ」
「そうか、でもそのうち病みつきになるぜ、マンコでチンポの味を覚えちまえばな！」
「きゃっ!?」
男が柚緋を床に押し倒した。
「な、なにをするのっ！」
「これから本番だ、男を教えてやる」
「や、やめ……あああっ！」
柚緋を押し倒した男がスカートを捲り、両脚をM字に折り曲げて陰部に顔を近づけた。
汗で肌に張りついたストライプのショーツには閉じ合わさった淫唇が陰影し、自分でも知らないうちにわずかな染みを作っている。
「俺のをしゃぶって濡れたか？」
「違――――っ」
否定しようとしたが、他に濡れる理由なんて思いつかない。
横を見てみれば彩が対面座位で突かれ、柔房を吸われながら喘いでいた。
（彩……）
守れなかった悲しみが心に広がる。
他の女性を見てみれば皆男に組み敷かれ、泣きながら犯されていた。
（わたしもみんなと同じように）
犯される覚悟はできていたが、それが目の前に来ると覚悟が揺らぐ。
ショーツ越しの陰部に触れてきた男が初めての相手になる、そう思うだけで涙が零れそうだ。
「まずはこのマンコを舐めてやるぜ」
「くっ――」
「じゃまするぞ」
顔を背けて覚悟をした瞬間、突然ドアを開けて大柄な男が入ってきた。
その男は歴戦の風格を持ち、忍びらしい精悍な顔をしている。
「おうやってるな、俺が命じておいたくノ一は捕獲したか？」
「んっ、んぅううっ」
指が陰部の割れ目をなぞってきたが、柚緋の目は大男から離れない。
この男の顔には見覚えがある。
「爆燕！」
初任務の時の部隊長の名前を思わず叫んだ。
「おっ、そんなとこでマンコいじられてたのか柚緋。くノ一であることを隠してまで、あの女と同じように俺のものになる支度をしたかったのか？」
「あの女って、姉様!?」
爆燕の口から出た言葉に、柚緋は目を見開いた。

もう正体を隠す必要はない、ここで裏切り者の爆燕を倒す。
↓ルートD P182へ

爆燕に従う振りをして姉様の情報を訊きだす。
↓ルートE P185へ

最愛の母との記憶
私はママが大好きだった
ママーっ!!
優しいママが好き
ん?
料理の手伝いを褒めてくれるママが好き
ママっ!!
お風呂で一緒に歌ってくれるママが好き
あらあら悠美ったら
優しく抱きしめてくれる大好きなママが居るだけで
幸せだった
漫画 COMIC 白う～凪い
原作 ORIGINAL 黒井弘騎

でもあの日

私達の住む教会が
エクリプス達に襲撃
されたあの日…

私は
好きで好きで

愛して止まない
ママを…

聖天使エミエル
カオティックロンド
第2話 悲劇への追憶
殺した

オラ!! しっかり奉仕しろヨ それじゃ全然イけネェゾ!!
オッ! そうだ手前(テメェ) そのまま小便しロヨ! 雌犬みたイニナァ!!
ひゃはは そりゃイイや 早くやれよぉ!!
そっ… そんなコト
クク… 従わなければ 貴様の大切な娘が どうなるかな?
やっ…

やめてっ!!
ちゃんと…
んっ!
ちゃんと…んっ
するから…っ
だから悠美
には…っ!
んくっ!!
じょわっ
んっ…
こっ…
こんなの!!
んっ…
クハハ!! 良いゾォ!!
その犬みてぇなしょんべん
もっとよく見せろヨ!!

オオ!! いい!! イくゾぉっ!!!
ビグ
ビグ
ぴゅる
ひっ…
デる!!
ズププ
プシュ
あぐっ!!
ドクッ
ドクッ
ゴポ
ゴポ
そんなっ いきなり!?
ぶぷゅ
ぶぷゅ
しゅる
ゴポ
ゴポ
お腹の中に精液が流れ込んでる!
次は俺様が種付けしてやるよ!!
あっ…ぎ

美貌の怪盗、人妻となって再見参!!
夫に愛された身体は尻オブジェとして敵の玩具となり果てる――
人妻怪盗
ヴェルヴェットマリー
Velvet Marie
the Married phantom thief
～屈辱の壁埋め拷問～
小説／NOVEL 黒井鵜（くろいつぐみ）
挿絵／ILLUSTRATION 凪丘（なぎおか）

宝石商ムッシュ・ダニエルの邸宅は、彼がそれを「小箱（コフレ）」と呼ぶのが謙遜と思ってしまうほどに、「豪華絢爛」という単語をそのまま形にしたような、まごうことなき大屋敷である。

豪奢な調度品に、多くの使用人。そして彼の富の総決算にして商売道具である、目にも鮮やかな宝石や装飾品。

それらが中年の男一人が住むにはあまりに広い邸宅の中に、これでもか、と押し込んだのがこの邸宅（コフレ）であった。

――しかしこのムッシュ・ダニエルという男、宝石のように輝かしい栄光と同じだけ、否、それ以上に黒い噂も絶えぬ、裏社会に顔が広い男であった。

不正買収、不正取引は当たり前、果てには暗殺、盗品売買まで――この世の悪事の限りを尽くして私腹を肥やし続けるムッシュ・ダニエル。

そんな彼の元へ一通の薔薇模様の便箋が枕元に届いたのは、つい先週――

『予告状
　ムッシュ・ダニエル様
　今日から一週間後の夜
　フランク王の遺産の一つ
　『人魚の涙』を頂戴いたします
　怪盗ヴェルヴェットローズ』

※　※　※

ピピーッ！　ピピピピピピ……
闇夜にけたたましく警笛が鳴り響く。
「奴だ！　ヴェルヴェットローズだ！」
「クソっ、あのアマ『人魚の涙』を！」
「ええい、一体どこにいる！　探せ！」

警備を行っていたムッシュ・ダニエルの部下たちは、持っている懐中電灯を右往左往させ、巷を騒がす不遜なコソ泥を血眼になって探していた。

「ふふふ……」

――そんな慌てふためく男たちを尻目に、屋敷の屋根を疾駆する影が一つ。背中のマントをはためかせるその影の端を、護衛の一人が見つけて指さした。

「あ！　あそこだ！　屋根の上だ！」

その指の先――屋根の上、月の薄明かりだけが頼りの暗やみの中で、ぼんやりとシルエットが浮かんでいる。

「照らせ！　照らせーっ！」

バァン、バァン、という豪快なスイッチの音が立て続けに鳴り、一つ、また一つとサーチライトが眩いばかりの輝きをこれでもかと放ち始めた。

そして闇夜に浮かぶ影目掛けて、屋敷に備え付けられているサーチライトの光が、群がるように投射される――

「いたぞ！」

輪郭だけだったその姿が、闇を暴く鋭い光に照らされ、その真の姿を悪党たちにも明らかにした。

「あ、あれが――」

――そこにいたのは、怪盗と呼ぶにはあまりにも人目を惹く美女であった。

顔には当然目元を覆い隠すマスクが着けられていて、顔を見ただけではどこの誰かまではよく分からない。

だがそんな簡易マスクの上からでも、彼女が類（たぐい）まれなる美貌を持っているのがはっきりと分かるほどであった。

だがマスクに隠れた美貌よりもよほど目を惹くのはその怪盗装束であった。

一番最初に目につくのは、煽情的な紐縛りの赤白のレオタードだ。

通常のレオタードよりも布が少なく、青い紐を使って固定する特注品であるそれは、彼女の豊満な肉体をきつく締めあげしっかりと固定している。

太ももまであるヒールの高いロンググローブーツと、肘まで覆うロンググローブは、彼女のただでさえ長い手足をさらに長く、美しく見せている。

そしてその派手な格好を、裏地が紅い白のマントという、盗みを働くには目立ちすぎるマントで包んでいる。

そんな美しき女怪盗が、まるで勝ち誇るかのように光の中に立っていた。

「予告通り、『人魚の涙』はこのヴェルヴェットローズがいただいたわ！」

彼女の言葉通り、その手には彼女の手の平に余るほどの大きな蒼い宝石が、ライトの光に照らされて輝いている。

あの宝石こそが、盗むことを予告された、フランク王の遺産にして、ムッシュ・ダニエル所蔵の最も価値のある宝石、大海の蒼を閉じ込めたような深い蒼のサファイア、『人魚の涙』だ。

「奴が……ヴェルヴェットローズ！」

――悪人どもが持つ宝石、絵画、美術品の数々を、厳重な警備をかいくぐり、悪事の証拠と共に、まるで魔法をかけたように盗みだす、美しき女怪盗。

曰く彼女は革命によって処刑されたフランク王朝のプリンセスである――

曰く彼女はフランク王国を陰で牛耳った魔法使いの成れの果てである――

曰く彼女は悪事を働く不埒な輩に罰を与える天からの使者である――

様々な憶測が流れたがその正体は未だに不明。明らかなのは悪党どもから秘宝を盗みだし、その悪事を詳（つまび）らかにする、というたった一つの事実のみ。

――彼女が、今巷を賑わす怪盗、『ヴェルヴェットローズ』だ。

「それでは悪党の皆さん、ごきげんよう――アデュー♪」

彼女はそう言い残すと、ひらりとマントを翻（ひるがえ）す。するとまるで闇に溶けてしまったようにその姿は消えていた。

屋根の下は一瞬、呆けたような沈黙が何秒か続いた後、かんしゃく玉でも投げ入れたように一気に騒がしくなる。

「あ、あの女ッ、どこに行ったんだ！」
「逃がすな！　屋根の上にいるはず！」
「ええい、女一人捕まえられんのか！」

逃げる怪盗を追うようにサーチライトが右往左往に光線をまき散らす。

しかしその光線の包囲網を難なくかいくぐった彼女の姿を捕らえることはついにできず、怪盗ヴェルヴェットローズは闇の中へと消えていった――

――この三日後、不正の証拠を持った警官たちがやってきて、ムッシュ・ダニエルをはじめとする多くの人々が逮捕されたのは言うまでもない――

著者近況　個人的に麻婆豆腐には二種類あると思っている。赤い麻婆と黒い麻婆だ。赤い麻婆は唐辛子が強く純粋に辛い辣の辛味。ニンニクが利いていると旨い。黒い麻婆は山椒が強く、痺れる辛さの麻の辛味。醤が利いていると旨い。僕は黒い方が好き。

※　※　※

——多くの悪党たちが稀代の怪盗ヴェルヴェットローズの手によって地位を崩され、フランク共和国は一時の平和を取り戻した。

こうして平和になったフランクの朝は早い。特に国民の主食であるパン屋の朝は、それはもう格別に早い。

「バゲット三つ」「はーいっ！」

町で人気のパン屋とくれば、日が登る前から賑やかな様相を見せる。

「こっちは二つくれ」「三つくれ！」

「はーい！　かしこまりましたっ！」

長い紙袋にさらに長い焼きたてのパンを詰めて、硬貨と交換する。人の多さの違いはあれど、町のどこのパン屋でも見られる光景だ。

「やっぱり美人だよなぁ、マリーさん」

「ああ、ジャンにはもったいないくらいだ」

だがそのパンを売るのが、映画に出てくるヒロインのような美人なら、ここでの光景は稀有なものになる。

「マリーさんてば、今日も綺麗ねぇ。何か秘訣でもあるのかしら？」

「ふふふ……キレイの秘訣かどうかは分かりませんが、毎日の元気の源はウチのパンですよ！　よかったら！」

「ほほほ……うまいわねぇ。ならバゲットを五本もらえるかしら？」

「かしこまりました！　ジャン！　五本追加！」

パン屋の主人であるジャンと六年前に結婚したマリーは、町一番の美人とも名高い美貌を持った名物店員である。

大きく切れ長な青い瞳に高い鼻、小さくもつややかな唇。

しかも顔だけではなく乳房や臀部、腰回りまで素晴らしいとくれば、男だけでなく女性だって放ってはおかない。

「ったく、あんな美人をどうやって見つけてきたんだろうな、ジャンの奴」

「いやいや、マリーがここのパンのうまさを聞きつけてやってきたらしいぞ」

「オレの聞いた話だと、マリーさんを振り向かせるためにジャンが修行しまくった、とも聞いたんだが……」

「ほらほらお客さん、ご注文は？」

噂話に興じていた客人たちをたしなめるように、マリーは注文を促す。

「ああ、じゃあバゲット二つ」

「お、オレは三つもらおうか」

「俺は三つ……い、いや四つ！」

「ふふふ……かしこまりました！」

手際よく客人を捌いていく、パン屋の名物美人女将マリー。

——このマリーが、数年前巷を騒がせた怪盗、ヴェルヴェットローズであったことを知るのは本人ただ一人だ。

夜な夜な悪党どもから秘宝と悪事の証拠を盗みだし、秘宝は国営美術館に、証拠は警察へと密かに送る——といういわば義賊的生活をしていた怪盗ヴェルヴェットローズことマリー。

一時はマリー自身もこのまま怪盗としての波乱万丈な生活が続くと思っていた——一介のパン職人にすぎない青年、ジャンに出会うまでは。

ジャンと恋に堕ちたマリーは、秘宝を隠し持つ大悪党が少なくなったこともあって、この際すっぱりと怪盗を辞め、二人で慎ましやかに生きていくことを決意したのである。

——二人で小さな店を出して結婚した翌年には、二人の間に娘が産まれ、その娘ももう五歳になろうとしている。

（怪盗をしている頃は、私がこんな生活を送っているだなんて考えもしなかったのに……人生って不思議ね）

怪盗をしていた時は正体がバレるかも、盗みが失敗するかもという、スリルだらけの毎日を過ごしていた。

だがジャンとの日々は打って変わって、平凡で地道でそして平和で——実に穏やかな日々を過ごしている。

もちろんどちらの生活が上とは、実際に両方の暮らしを経験したマリーにも断言することはできない。どちらの暮らしにも良さがあり、難しさがある。

——若い頃は『退屈な生活なんてまっぴら、特にどこにでもあるようなパン屋なんて』と思ったものだが——

「うん——こんな暮らしも、悪くない」

「はい？　何か言いました？」

「あ、い、いえ！　何も？　あ、ご注文のブリオッシュですね——」

誰も知らない心内で、マリーはクスリ、と笑みを浮かべた。

※　※　※

「ねぇフラン？　お夕飯、何にする？」

五歳になる娘、フランの手を引きながら、マリーは買い物に出かけていた。

フランもマリーの血を引くだけあって、愛らしく美しい童女であり、町の人々からもマリーと同じように愛され、健やかな成長を願われている。

「うーんとねぇ……シチューがいい！」

「またシチュー？　フランってば本当にシチューが好きなのねぇ……ん？」

マリーはふと、町の広場にある女神像の周りに人だかりができていることに気が付いた。普段は像の傍らで、休む人や絵を描く人が数人いるだけで、あんなに人がいるのはまれなのに——

「——ちょっと寄っていっていい？」

無性に人だかりが気になったマリーは、フランを連れて人だかりの方へと寄っていって、その中の一人に尋ねた。

「あの、どうしたんです？　こんな所で集まったりして——」

そして、マリーの目にも『それ』が確認できた。平穏を願うように祈りを捧げる女神像が置いてあったはずの場所に傲慢にそびえ立つ、一人の男の像。

「こ、これは……!?」

「おや、マリーさん……」

驚くマリーに話しかけてきたのは、常連客の一人、イボンヌであった。

「い、イボンヌさん、この像は一体……ここにあった女神像は!?」

暗い顔のままイボンヌは語り始める。

「……帝国の人たちが女神像を撤去して、代わりにこれを置いていったのよ

著者近刊　『マジカルデュオ　ふたなり快楽に堕ちた魔法少女』（デジタルブレイク限定）　好評発売中！

……フランクを占領した証だって……」
鼻下にほんの少しの髭を生やした、いかにも威圧的な表情で像となっているこの男――彼こそ、欧州を実質的に支配する第四帝国の実権全てを握る、『大総統』その人である。
一市民の身から現在の地位までのし上がった彼は、四方八方に侵略戦争を仕掛け、優れた科学力と強大な軍事力によって他国を占領し続けているのだ。
そしてその波が、とうとうフランク共和国にやってきた――たった数日の電撃戦によりフランク共和国の主要都市は壊滅的な打撃を受け、首脳陣は降伏せざるを得なくなってしまったのだ。
「帝国の奴らめ……たった数日戦っただけでいい気になりやがって……」
「コンクリのデカい砦もおっ建てやがった……つい一週間前にはそこにオレの家が建ってたのによ！」
「これからは流通や商売にも口を出してくるらしいわ……なんてこと……」
人々は口々に帝国への不満を――しかし、声高にではなく、飲み屋で酔っぱらいが愚痴るように、囁くように言い合っている。
「シーッ！　兵士が来たぞ……！」
だが褐色の制服を着た帝国兵が通りかかると、住人たちは蜘蛛の子を散らすように広場を後にしてしまっていた。
――広場には、マリーとフラン、そして威厳ある大総統閣下の像だけが残されていた。二人の兵士が像の前で帝国式敬礼をして通り過ぎていく。
「――これが――」
……これが革命によって自由を勝ち取った、フランク共和国の住人たちの姿だというのか！
マリーの中でゆっくりと怒りが沸いてくる。この怒りはあの時と同じ――私に怪盗になることを決意させた、悪党共のことを知った時と同じ気持ちだ。
「お、お母さん？　どうしたの……？」
娘は静かな怒りを燃やす母の様子を感じ取り、マリーがいつの間にか強く握ってしまっていた左手を心配そうに優しく握り返していた。
「――なんでもないわ。さ、買い物行きましょ？　今日の夕飯はシチューよ」
「！　わーい！　シチューだー！」
フランはマリーの顔に笑みが戻ったことと、好物のシチューに不安を一気に吹き飛ばし、楽し気に歌いだした。
「しっちゅー、しっちゅー、おーいしーいしっちゅー♪」
「ふふふ……もう、フランってば」
はしゃぐフランにマリーは笑みを浮かべている。だがその瞳には炎が――怒りに燃える、確かな炎が燃えていた。

※　※　※

第四帝国に強制支配を強いられたフランク共和国に一つの噂が流れていた。
数年前より犯行声明のなかった、かの悪党狙いの怪盗、ヴェルヴェットローズが、なんと第四帝国宛に予告状を送った、との噂であった。
反撃のチャンスだと息巻く者や希望を持つ者、どうせ帝国には敵わないと諦観する者、不安がる者。
噂に様々な反応を見せるフランクの人々とは対照的に、帝国側は予告状の存在を完全に否定していた。
それでも流布する怪盗の噂に対して、帝国の国家警察（シークレットポリス）は怪盗のそれに関する話をする者を国家騒乱罪の名目で逮捕するほどだった。
――しかし実際のところは、帝国の元に一通の薔薇の便箋が、しっかりと届いていたのである――

『予告状
第四帝国フランク共和国駐留軍様
今日から一カ月後の夜
第四帝国フランク駐屯基地より
大帝国旗を頂戴いたします
怪盗ヴェルヴェットローズ』

※　※　※

フランク首都――その中央、以前は人々の憩いの場であった凱旋広場、その中央にふんぞり返るように建っているのが、第四帝国フランク駐屯基地だ。
今やフランク国民が立ち入れなくなってしまったそこには、褐色の軍服を着た兵士たちが、帝国に仇なす者を侵入させまいと銃を持って巡回している。
――だがその巡回の合間を縫って、紅いマントとヴェネチアンマスクを着けた女が、ぬるりと夜闇の中から現れたことにはまるで気づかなかった。
「よっ、と――」
マントを着けた怪盗が鉤爪の付いたロープを屋上の縁に引っ掛けて、素早く蜘蛛のようによじ登ると、そのまま屋上へとすっくと降り立つ。
「ふぅ……フランクでも帝国でも、規模が大きい場所の警備が油断するのは、どこも同じなのね」
予告状を送ってから丁度ひと月。五年以上のブランクをマリーが取り返すためには、丸々ひと月以上の期間の訓練が必要になってしまった。
しかしそこは怪盗ヴェルヴェットマリー、ブランクをすっかり取り戻し、フランク首都にある駐留基地への潜入にすんなり成功していた。
「でもちょっと……衣装がキツいかも」
しかし年月かけて衰えたものはそう簡単に元には戻らないのか、若い時に着ていた衣装が窮屈になっていた。
結婚してから怪盗時代のような激しい運動をしてこなかったせいか、腹回りや足回りの部分が若干――本当に若干だが――むちむちと見えてしまう。
子供を産んだせいか、胸元や臀部の布地もぴっちりとしてしまっている。
若い頃は溌溂（はつらつ）とした躍動感と健康的な色気を滲（にじ）ませていた怪盗の衣装。
しかしこの肉体のふくよかさでは、ただ単に淫蕩な衣装を身にまとっているようにしか見えないのでは？　と、マリーは心配になってしまう。
「……も、もう少しだけ痩せてからの

方がよかったかしら――？」
五歳になる娘がいる身で、こんな格好をしているのもどうなのか、と一瞬考えてしまうマリーだったが、すぐに怪盗ヴェルヴェットローズの顔に戻る。
「――そんなことも言ってられないか。もう予告状は送られたのだから――」
賽は既にひと月前に投げられている。ここですごすごと引き下がるなど、神や警官が許しても、怪盗ヴェルヴェットローズが許すわけがない！
「ようし……」
マリーは静かに気合を入れなおし辺りを見回す。屋上には内部から屋上に出るための出入り口が備え付けてある。
女怪盗はドアに近づくと、開錠ピックで手早くカギを開け、音を立てずにぬるりと内側に入り込む。
（とりあえず侵入は成功っと……）
もちろん侵入に成功して終わりではない。ここに来た理由は、帝国の支配の象徴を盗むため――鷲と黒十字の描かれた大帝国旗を盗むためだ。
（……おかしいわね）
――だがしかし、敵地に乗り込んだマリーはその違和感に気づいていた。
（予告状を出したのに見張り一人いないだなんて……）
基地の内部はまるで寝静まっているかのように静かだ。兵士が厳重に警備している様子も、警戒している様子も感じることができなかった。
（見くびられてるのかしら……？）
小さな声で呟いたマリーの胸に怒りの炎が灯る。帝国は怪盗ヴェルヴェットマリーのことを恐るるに足らぬ矮小な盗人と思っているというのか！
（その思い上がりを改めさせてやる）
胸に決意を抱きながら、マリーは大帝国旗がある部屋へと、無音のまま迅速に移動していく。
――だが稀代の怪盗ヴェルヴェットマリーは、一つ大きな勘違いをした。
――帝国は怪盗を過小評価したわけでも、見くびったわけでもない。まして見張りの兵士がいない訳でもない。
視覚以外にも音や気配に気を配りながら進む怪盗ヴェルヴェットローズだが、彼女の一挙手一投足を監視する冷たい目があったことには、まるで気が付かなかったのである――

※　※　※

「これが帝国旗ね……」
とうとう駐屯基地の帝国旗安置場所である中央指令室へと、マリーは足を踏み入れた。正面の壁に貼られたこの旗こそ目的の大帝国旗であった。
マリーは警報機の類がないことを細心の注意を払って確認する。いかに侮られているとはいえ、盗まれぬように防犯装置ぐらいは――
（……ない、のかしら……？）
流石にここまで何もないと、マリーの脳裏にも嫌なものがよぎる。
だがここで恐れをなして引き下がるわけになどいかない。賽は既に投げられているのだ。ヴェルヴェットローズは注意深く帝国旗を壁から剥がす――
（――よし）
帝国旗は何事もなく怪盗の手の内に納まった。こうして手に納まってみると呆気ないものである。
（さあて、こんな薄気味悪い場所からはさっさとおさらばしなくちゃね）
素早く帝国旗を小脇に抱えて、こんなコンクリートの檻からずらかるために、マントを翻して踵を返す。
――ふと部屋の壁を見ると、広がっていく染みのように赤く塗られているフランクの地図が目に入った。
これは帝国がこの国を占領する経過図なのだろうか？　帝国の言葉を知らないマリーには文字を読むことができない。が、感じることはできた。
「――この国を貴方たちの勝手にできるなんて思わないことね」
自由を愛するこの国を、好きになどさせない。ささやかではあるが、この怪盗行為は反撃の狼煙だ――
「この国は自由を――愛する――」
しかし、ヴェルヴェットローズの言葉は突然遮られた。外から誰かがやってきたわけでも、外で何かが起きたわけでもない――突然の身体の不調だ。
「あ、あれ――？　わたしの、からだ――どうな、て――」
この状況はまずい、とかつてない危機を察知できているにもかかわらず、身体に力を込められない。
（これは……もしかして催眠ガス!?）
最早マリーは驚きを声に変えることもできない。もう既に身体は完全に脱力し、急いで逃げなければならないというのに床に寝そべってしまっている。
（な、なんで……!?　ガスが出る匂いも音も、何にもなかったのに……！）
『――ククク……！』
無音だったはずなのに、どこからかくぐもった笑い声が聞こえてくる。
『帝国の科学の粋を集めて作られた麻酔ガスだ……匂いもなく色もない完全な無色無臭――空気とまるで変わらないが、効果は……覿面のようだな』
重厚な足音が近づくと、低く分厚い高圧的な男の声が上から降ってくる。
（一体……何者……？）
最後の力を振り絞って、上にいる男の顔をなんとか拝んでやろうと、首をひねって辛うじて上を向いた。
（が、ガスマスク……！）
マリーの目に、真っ黒なラバーでできた丸いガラスが二つ嵌った、ガスマスクの不躾な顔が映った。どうやら麻酔ガスは本当であるらしい。
胸元に嫌味たらしくぶら下がっている勲章の数からみても、このガスマスクの男がこの基地の最高責任者だろう。
蹲ったマリーの顔を見ていたこの上官は自慢げに語りだした。
『――お前の行動は帝国最新技術の粋を集めた「監視カメラ」で筒抜けだったのだ！　このケチな盗人め！』
罵倒の最中も、マリーの耳にはドタドタと部屋に入ってくるいくつもの足

音が微かに聞こえてきていた。
（こ――の――）
囚われの身になるのは火を見るより明らかだったが、マリーには意識を保つことすら許されない。
「ぐ――」
（ジャン……フラン……私、は――）
最後に愛する家族のことを思いながら、そのまま力尽きたように怪盗ヴェルヴェットローズは意識を失った――

※　※　※

「う……」
マリーが目を覚ますと、そこはコンクリートで構成された、殺風景な小さな部屋の中であった。
気を失っていたことに気が付いたマリーは、慌てて頭を覚醒させる。
「こ、ここは……」
壁際に拘束されたマリーには、反対の壁に出入り口や数個の座椅子、机の上に乗ったガラスの面があるいくつもの箱が目に入ってくる。
「つく……！」
試しにもがいてみるが、どうやら壁際の位置で妙な体勢を取らされながら厳重に拘束されているらしく、身体はびくとも動かせそうにない。
「ククク……やっと目を覚ましたか」
起きたタイミングを見計らったかのように、威圧的な声の大男が、ゆっくりと部屋に入ってきて目の前に立つ。
――声からして、あのガスマスクの男であることは疑いようがない。
「私は第四帝国秘密警察フランク領駐屯支部長官、イレルマンである！」
隣にいる護衛の兵士より頭一つ抜けた、軍服の上からでも分かる筋肉質の大男――ごつごつとした禿頭の顔には、痛々しい傷跡が生々しく残っている。
「生意気な窃盗犯め、女の身で帝国に歯向かおうなどと――」
「貴方」
腕組をしてふんぞり返って語りだした将校に対し、怪盗ヴェルヴェットローズはそれを鼻で笑いながら、話の腰を折るように強引に口を挟んでいく。
「――普段からガスマスクを着けた方がいいんじゃないかしら？　その方がイイ男に見えるはずよ？」
「――――」
沈黙が部屋に広がるとともに、兵士の動揺と上官の怒りが、目に見えるほど高まるのがマリーにも分かった。
――パシィッ！
「ぐうっ……！」
突然踏み込んできたイレルマンの大きな手の平が、マスクを着けたままの怪盗の顔に強引な平手打ちを放った。
「――貴様！　今自分の置かれている状況が理解できていないようだ……！」
怒りの視線をそのまま睨み返す女怪盗の様子が気に食わなかったのか、イレルマンは部下へ命令を飛ばした。
「おい！　この身の程知らずのアバズレに自分の状況を思い知らせてやれ！」
命令を受けて慌てて一人の護衛が部屋から出ていったかと思えば、すぐに姿見を持って部屋に戻ってきた。
突然の姿見に、マリーは困惑する。
（こいつ、一体なんのつもりかしら？　拘束されている様子を見せて、怯えさせようとでも――って――）
――だが姿見の中に映った自分の姿には、イレルマンの思惑通りか、ヴェルヴェットローズは自分の置かれている状況に驚愕せざるを得なかった。
「な、何、これ……!?　壁に……!?」
――それはまるで壁から生えた胸像のようだった。怪盗ヴェルヴェットローズの腰から上、手の平を除いた上半身だけが鏡にはっきりと映っていた。
女怪盗を捕らえていたのは、拘束具などではなく、一枚のコンクリート製の壁だったのである。
「ククク……見えるか？　盗人の末路にふさわしい、ブザマな姿が……」
「あ、貴方……どうやってこんな！」
壁に埋まってしまっているなど、まるでわけが分からず、思わず敵であるはずの目の前の男に問いかけてしまう。
「ククク……これはネウベト……帝国の科学進歩によって発明された新たなコンクリートだ……」
イレルマンは反逆者を拘束する、新型のコンクリ壁を撫でながら解説する。
「ネウベトは従来の倍の速さで固まる上に、従来の五倍の強度を持つ！　さらに試薬を加えることで一時間もしないうちに固めることもできるのだ！」
「い、一時間……！」
帝国基地の尋常ではない建築の早さも、この新型コンクリートによるものということなのだろうか。
そんな風に考えたことを予測してか、イレルマンが自慢げに語りだす。
「そうとも！　貴様が間抜け顔で眠っている間に、この第十七尋問室を製造し、貴様を拘束したというわけだ――貴様専用の、この尋問室をな！」
「つぐ……！」
――人を壁に埋め込んでしまうなど正気の沙汰ではない。だが実際、ヴェルヴェットローズは壁の中で身動きの取れない状況だ。
「帝国に歯向かった罰を……たっぷりと受けてもらおうではないか」
「くっ……」
文字通り手も足も出ない状況では、流石のヴェルヴェットローズでもどうしようもない。これから行われる尋問を甘んじて受け入れるしか――
「ひぃっ!?」
だがマリーの予想とは裏腹に、触れた感触があったのはヒップ――臀部を撫でまわすように触られた感触だった。
「な、何!?　一体何がっ……!?」
思っていたよりも優しく、そして下劣な刺激に、思わず困惑の声を上げる。
「ククク……これを見ろ」
イレルマンが指さした箱に電源が入れられた。そこに見えたのは、壁から出た尻を撫でまわす兵士たちの姿だ。
「な、なんなのこれっ……んんっ！」
箱の中で尻を撫でられると、箱の中

衰えても勇者は後れを取らないわ！
その慢心が隙を生み、
乙女は慰みものへと堕ちてゆく!!
女勇者ナナエ
小説 NOVEL／松島大奥（まつしまおおおく）
挿絵 ILLUSTRATION／比呂之（ひろゆき）

妖気漂う薄闇に一筋の剣戟、瞬刻遅れて断末魔の叫びが響き渡る。
この世全てを怨嗟に呪うようなその声は、その場にいた全ての者の臓腑を震わせた。
年若き勇者ナナエは闇の主を切り裂き、この世の憂いを追い払う。翡翠色の瞳がまっすぐに前を見据える。
「世界の暗雲を晴らす時が来たのよ。永遠に闇の中で眠りなさい、魔王」
「……ワスレヌゾ、ニンゲンノ、勇者。コノ、ワレヲ滅スナド……アッテハナラナイ……ノロワレヨ、ナナエ……!!」
世界を闇の恐怖に陥れた魔王は初めて屈辱を覚えながら、自らが闇へと沈んでいく。魔城は崩れ全ては終わった。
ナナエは十六歳にして立ち上がり、仲間とともに世界を旅した。そうして苦難の末、その元凶である魔王をついに討ち果たした。
王者の風格さえ感じさせる大剣と、全身を包む青色の鎧。金色のショートヘアを涼やかになびかせながら凱旋した年若い英雄のその姿は誰もが知るものとなった。
――時が流れること三年余。
世は完全に平穏を取り戻していた。
街には活気が戻り、かつて毎日を怯え過ごしていたのがまるで嘘のよう。空は明るくなり、鳥は歌う。草木の匂いを楽しむ余裕ができたのは平和の証拠にほかならない。
魔物と戦うために武器を握った人々も皆、自らの暮らしに戻っていった。魔王を倒した勇者ナナエとてそれは変わらない。
伝説と謳われた武具をしまい、今は一人の少女として穏やかな日々を噛み締めていた。
――安寧が終わる、今日、この時まで。

「魔王が蘇った!? まさか! だって、あの時確かに――!」
今朝、ナナエの暮らす城下街に伝達が届いた。すぐさま王宮に呼ばれたナナエは王の間にてその緊迫の談を聞く。
「だが、これは紛れもない事実なのじゃ、ナナエよ」
魔王は各地の王に鏡魔法でメッセージを伝えてきた。王の目配せを受け、目の前にその件の姿見が運び込まれる。全世界、同時刻にその文字列は浮き上がったという。
ナナエは息を呑んでそれに目を走らせる。
『ワレハ、闇ヨリ、ヨミガエッタ。コレヨリ、ゼンセカイヘト侵攻ヲ、カイシスル。ソシテ、ノロウベキ、ユウシャノクビヲ、トル』
血が滴ったような生々しい文字でそれは記されていた。
「それに、世界の塔で見張りをしていた兵からも気になることを聞いているのだ」
世界の中心、天まで届こうかという展望塔から見えたというのは闇の光。
矛盾を多分に含む物言いだが、見張りの兵士はそうとしか言いようがなかったという。かつて魔城のあった方向から漆黒の光柱が立ち昇ったのだと。それとともに爆発的に空に広がるのは魔物の群れ。
かつての魔王が地上に現れた時と、その現象はまるで同じものだった。
「大丈夫よ! たとえ魔王が再び蘇ったとしたって、また倒しちゃえばいいだけなんだから!」
「だがナナエよ。次もうまくいくとは限らぬぞ」
「王様、心配しないで! 大船に乗ったつもりで玉座でゆったりとしててください。そのほうが士気も高まりますから!」
王が怖れれば、兵士も怯む。兵が怯めば民はなおのこと怖れよう。
ナナエはそう王に声をかけ、再び武具を取る決意を固めた。丁重に頭を下げてから、勇壮たる足取りで城を辞していく。
「さて……と。こうなると、まずは久しぶりに仲間たちと合流したほうがいいかしら」
ナナエは三年ぶりに伝説の武具をまとい、街を歩く。透き通るような青の鎧、それでいて女性らしい格好良さも示すスカート、勇者であることを知らしめる大剣。
皆の期待する眼差しが集まるが、それに臆することもなくナナエは堂々と歩を進める。
向かった先は、リュイーダの酒場。以前の戦いの時、ここで出会った者たちと苦楽を共にすることとなった。
仲間たちは皆地元の町や村に帰ったが、もしやの邂逅を期待し昼間ではあるが酒場へと足を向けた。魔王復活を聞き、駆けつけてはいないかと。
（ふふ、あの生臭僧侶、またリュイーダさんを口説いて迷惑かけたりしてないかしら。あの軽さを戦士に少し分けてあげればちょうどいいのに）
在りし日の仲間たちの様子を思い出す。寡黙な戦士、軽薄な僧侶。
だが、そこで見たものはナナエを愕然とさせるものだった。
倒れて転がる椅子やテーブル。乱雑に散らばる割れた酒瓶。木の床には酒の染みが広がり、アルコールの臭いがあたりに漂う。
（なによ……これ! 酒場がこんな滅茶苦茶に……一体何が……!?）
場を見る限りここで争いごとがあったのは明確だ。そしてなにより、いつもカウンターで妖艶な笑顔を見せる彼女が不自然な格好で横たわっているのがその証だった。
「リュイーダさん! 大丈夫!? どうしたの、これ……、ま、まさか……」
酒場の女性店主であるリュイーダは着衣が乱れた状態で床に伏していた。彼女に意識はなく、ナナエは慌てて駆け寄ってその脈や呼吸を確認する。
（息は、……ある! よかった、脈も）
不幸中の幸いか命には別状はなさそ

著者近況
今作でデビューとなりました松島大奥です。担当編集者様はじめ関係者各位にはただただ感謝しかありません。そしてこれを読んでくださった読者の皆様にはさらに多大なる感謝を！ 本当にありがとうございます！

うだった。だが破られた衣服と顔につけられたアザ、肌に残る乾いた白濁の跡がこの場で何があったのかを示している。

（女性の顔に傷まで……）

ナナエは目を背けたくなったが、かぶりを振ってすぐに彼女の介抱を始める。傷自体は浅く、初級の回復魔法でも治療するには充分だった。

温かな光がナナエの手から漏れ、リュイーダの顔のアザが消えてゆく。

だが問題はここから先だ。確かめるのは気が咎めたが、怪我などがあれば大事にもなりかねない。同性ということもありナナエはそのまま彼女の全身を目視していった。そして最後に、申し訳なさそうに恐る恐る局部へと視線を向けた。

（……ああ、そんな。やっぱり……）

そこにあったのは、下着が剥ぎ取られ白濁がこぼれ落ちる秘裂。何度も繰り返し挿入が行われたためか、膣の入口と肉ビラは赤く腫れ上がり痛々しいありさま。ピクピクと蠢くそれは、まるで助けを求めているかのよう。

「こんな……、なんて酷い……」

これが慰めになるかはわからないが、ナナエは腫れた女性器にも回復魔法を使う。彼女を穢した白液が排出され、痛々しかった赤ヒダも健康的なピンク色に戻る。

「……ん、あ、あれ。ナ、ナナエ、ちゃん……？　どうして、ここに……？」

「一体、なにがあったの？　リュイーダさん。誰がこんなことを……」

うっすらと目を開けたリュイーダにゆっくりと事情を聞く。少しの深呼吸のあと、彼女は淡々と言葉を紡いだ。

「……盗賊団が荒らしていったのよ。少し前からちょっかいは受けていたんだけれど。こうして動き出す機会を狙っていたのね……」

盗賊団はその情報網でもっていち早く魔王復活を察知していた。それゆえ、その機に乗じることができたのだと彼女は言う。

「なんですって！　魔王復活に乗じて街を荒らすだなんて、とんだ卑怯者だわ！　絶対に許せない！」

目を見開きナナエが激高する。日頃穏やかなナナエが見せる怒りの表情は、それゆえに強烈な印象を見る者にもたらす。

「あたしのことはいいのよ、ナナエちゃんが気にすることじゃないわ。それに身体も回復してもらったから、元通りだしね……」

「そういうことじゃないわ！　リュイーダさんのされたことはなくならないし、この場所を土足で汚されたこともなかったことにはならない！　リュイーダさん！　そんな奴ら、わたしが退治してあげるわ！」

そう声を上げナナエが剣を握る。決意とともにガチャリと重たい音が酒場に響いた。

「ナナエちゃん、あたしのことはいいのよ。犬に噛まれたと思って忘れればいいだけ。それよりもブランクのある今のあなたじゃ――」

「大丈夫よ、リュイーダさん！　盗賊なんかに負けたりしないんだから！　必ず仇を取ってあげるわ！」

そう力強く宣言するナナエの目には強い光が宿っていた。翡翠の瞳は勇者としての信念に満ち、敗北など考えもしない。ただ前を見据えるのみ。

魔王を倒した自分が盗賊風情に後れを取るはずがない。ナナエはそう楽観的に捉える。

彼女はリュイーダの制止を聞くことなく、駆け足で一人酒場をあとにした。

◇

ナナエはすぐさま情報を集め、盗賊団が拠点を構えている場所に目星をつける。

結局仲間は集まらず、ナナエは単身で出発。正義の心からくる怒りをもって、一人草原の街道を歩んでいた。

遠くには山の稜線。振り返れば自身の暮らしていた城下街。南には世界につながる大海原。

これだけを見れば、まだ世界が再び恐慌に陥るなどとは思えない。

けれど不穏な空気は確かに外界を侵食しつつあった。

そこかしこから邪な気配が漂い、無防備な人間を虎視眈々と狙う殺気にあたりは満ち満ちている。

（このピリピリした肌を刺す感覚……久しぶりだわ。けど、どんな魔物でもこの剣で葬ってやるわ！）

そんなことを考えながら剣を手慰みしていた時、唐突にその剣を確かめる機会は訪れる。

草木の間から飛び出す魔物の気配。瞬時にナナエはソレに取り囲まれた。

現れるは粘液生物体の怪物。水色の個体が多く、大きさは人の頭ほどだろうか。粘性質のそれは、明らかな敵意をナナエへと向けていた。顔のように見える模様を見る限り、攻撃的な感情が窺える。

「出たわね！　粘体生物！　肩慣らしにはちょうどいいわ！」

剣を抜いたナナエの宣言に、粘性体は声とも表現できぬ湿った唸り声で返す。魔王を一度討ち果たしたナナエを相手に逃げる素振りもない。

水色の粘性体、その数は八。身体を水風船のような弾力で揺らしながらジリジリとナナエを囲う輪を縮めてくる。

ナナエは間合いを計りながら魔物たちの出方を探る。背後も警戒しながら、距離の近い相手に意識を集中させた。

果たしてその時は来た。粘体生物、その一体が勢いよくナナエの足元へ。

動きを封じるつもりだろう。だが！

「そんなのお見通しよ！　相変わらずそのパターンね！」

それを読んでいたナナエは余裕の表情で剣を振り下ろした。轟と音を立てて大剣が魔物に迫る。

（――剣が、少し重い!?）

感覚にズレが生じたような、錯覚に似た小さな違和感がナナエによぎる。

わずかに反応が遅れその切っ先は地面だけを抉った。飛び散る雑草と土。
（こ、こいつ、こんなに素早かったかしら！）
粘性体がナナエの左足に絡みつく。
「くっ――！」
瞬時にナナエの足首は粘性体に取り込まれた。左足は地面に接着され、動きは大幅に制限される。しまった、と心の中で悔やむがもう遅い。飛びかかってくる数体の粘性生物。
「な、なら、これでどう!!」
空いている左手を振り、初級攻撃魔法である『ギュラ』を行使。
閃熱が直線的に照射され、ナナエの前面の敵はその熱で蒸発し消滅。
だが背面にいた残りの粘性体はその好機を逃すことなく攻撃を続行。残り三体の粘性生物が襲いかかる。
「ちぃッ……、やらせるものですか！」
左足を地面に固定されたまま、関節の可動範囲めいっぱいに振り返る。その勢いでもって横薙ぎに剣を払った。
今まさに飛びかからんとしていた粘性生物、その一体は刀身が命中し塵となる。だが残る二体はナナエの剣をくぐり抜け、その身体に張り付いた。
（なんてこと？　全部打ち落としたつもりなのに！　当たらない!?）
ナナエの肩から胸元にかけて柔らかな重量感がまとわりつく。
「こ、このッ！　ザコのくせにぃ！　は、離れなさいよッ！　――ひゃぁんッ！　んッ、ふぁぁんんッッ！」

水色の粘性体は鎧の隙間から内部へと侵入しようとしてくる。一体は胸の谷間から、もう一体は腋の隙間から滑り込むようにして。
「ちょッ！　そ、そんなとこヌメヌメしちゃだめぇ！　あ、あぁんッ！」
粘性体は全体を変形させながら鎧の内部で蠢き粘つく。粘体の弾力と乳房の柔らかさがぶつかり合い、双方ともにプルプルと身体を震わせる。ナナエが身悶えるたびに、谷間に潜り込んだ粘性体も同じようにプルンと揺れた。
「そ、そんなにゆっくり動いちゃだめぇ……！　は、はふうッッ！　んきゃぁぁッ！　そ、そこはぁッ……！　や、そこッ、だ、ダメよぉッ……！」
鎧とインナーの隙間で粘性生物はニュルニュルと滑りながらのたうち回る。まるでナナエの豊かな胸を愛撫するかのよう。
（な、なんか、女の子同士でおっぱいくっつけ合ってるみたいな……、変な感じぃ……）
潤滑液を塗られた乳房を押し付けられているような不思議な感覚がナナエを襲う。柔らかな感触に思わず目を恍惚に細めるが、ナナエ自身は気づいていない。粘性生物はナナエに甘美な刺激を与え、そうして徐々に彼女を取り込んでゆく。
快楽は油断を誘う毒。インナーが粘性体の分泌液によってわずかに溶け出し、傷んでゆく。
「くっ……、このままじゃ、身体を溶かされちゃう……！」
胸部を包む心地よい快感を堪え、反撃を試みる。ナナエは谷間にいる粘性体を力任せに掴んだ。
「こ、このエロスライムぅ！　い、いい加減にしなさぁいっ!!」
そのまま引きずり出そうとするも、粘性生物の身体は伸びて変形するだけ。ましてや鎧の内側に入ってしまったほうに関してはもはやどうしようもない。
「しかたない！　なら、死なばもろともぉッ！　くらいなさぁいッ！」
瞬間、晴天の空から迸る一筋の稲妻。ナナエは粘性生物がまとわりつく自身の身体に電撃魔法を打ち放った。
ゴゴゴゴ……ズドォォォォォンッ！
ナナエに取り付いていた粘性生物はその一撃であえなく霧散した。
「あいたたた……。油断したわ。ちょっと苦戦しちゃったかしら」
逆立って乱れた髪の毛を直しながらナナエがこぼす。
精霊の加護を受けたこの鎧はあらゆる魔法の威力を軽減させる。魔物を焼く雷も、ナナエにとっては火花散る静電気程度のもの。
そうして魔物は全て消滅し、あたりは再び静かな草原へと戻っていく。
「でも準備運動にはなったし、油断しなきゃなんとかなるでしょう」
剣を振り下ろした時に生じた違和感は、やはり気のせいだったのだと自身を納得させる。
ナナエは、気を取り直して目的の場所へと歩みを進めていった。

◇

歩き続けること半日。
空が茜色から薄暮へと変わる頃、ナナエはたどり着く。湿気った岩場の中に馴染むようにその鍾乳洞はあった。
「見張りがいるわね……なら」
ナナエは対象者を眠らせる魔法『ラリフォー』で見張りを眠らせ、アジトへとあっさり侵入する。
そのまま内部に足を踏み入れ、頭目のオビラを探していった。
洞窟内を進み、時折罠を回避しながらその最奥へ向かっていく。
ほどなく、洞窟の奥から複数の男の会話がかすかに耳に届いた。ナナエは身を隠してその会話に意識を向ける。
「……あの女、あんなに逆らうから痛い目にあうんだよ」
「……ま、最後まで反抗的なのも悪くなかったがな。俺は気の強い女は好きだぜぇ。おもちゃとしてはな！」
そのあとに聞こえるのは笑い声のようであったが、決して人を愉快にさせるものではなくむしろ不快にさせる下卑た声。
ナナエはもはや我慢ならず、怒声とともに男たちの前に躍り出た。
「あなたたち、誰の話をしているの！　これ以上は許さないわよ。覚悟しなさい！」
そこは洞窟一番の大空洞。そこでオビラを始め、十名ほどの手下たちが酒を酌み交わしながら談笑をしていると

ころだった。男たちは闖入者であるナナエに向き直る。
「おやおや、こんなとこまでわざわざご苦労さんだなぁ、女勇者さんよォ。こりゃまた勇ましいこって」
「ふざけないで！　今すぐ投降してリュイーダさんに謝りなさい。けど謝ってもわたしは許さないけどね」
ナナエは剣を抜き盗賊団の男たちにその先端を向ける。
「へへへ……大事な前提が一つ抜けてるぜ、勇者様よぉ。それはあんたが俺たちより強かったらの話だぜ」
「どうかしら、あんたたちを壊滅させるぐらいわけないわ！」
「ハンッ！　なにが伝説の勇者だぁ？　噂と違ってまるで新米勇者じゃねぇか！　あんなスライムごときに苦戦してよぉ！」
オビラは衛兵などがアジトに押し寄せたりしないか、監視を残していた。
結果、訪れたのはナナエ一人。
「あ、あれは久しぶりだったからよ！」
「あの程度の立ち回りで魔王を倒したなんて信じられねぇな。どうせ仲間のおかげでどうにかなったんじゃねぇのか？　飾り物の勇者様よぉ」
「ば、ばかなこと言わないで！　なら本当かどうかその身で思い知るがいいわ！　どうなっても知らないわよ！」
「まあいいさ。なら試してみようぜ。おい、お前らやっちまえ!!」
オビラの号令で部下たちが酒瓶を投げ捨て立ち上がる。割れるガラス。
男たちは各々の得物を手にナナエと相対した。ナナエは迎撃せんと剣を振るう。
（――やっぱり、重い！）
その剣戟は魔王を倒した時のものとは程遠い。
ナナエにはわかりえぬ理由ではあるが、魔王は最後の瞬間呪いをかけていた。魔王はナナエの力をゆっくりと吸い取ることで復活を果たしたのだ。今のナナエは戦う力を吸われ、それはわずかしか残っていなかった。
オビラの得物であるナイフが懐に迫る。ナナエは染み付いた習性で咄嗟に魔法を放つが、それは手のひらを出たところで燃えカスのように煙を上げて消失した。
「そんな、もう魔力が尽きるなんて？」
今までの自分ならば考えられないほどに力が落ち、その事実に愕然とする。
ナナエは男たちに拘束され、今度は彼女自身が新たな慰みものへと堕ちてゆく――。

◇

「さて、いい格好になったじゃねぇか。勇者様よぉ。どうしてやろうか」
天井から下がる手頃な鍾乳石にナナエを縛り付けたオビラが顔を歪めて嘲笑う。
ナナエは両手を頭上で固定され、立ち膝のような姿勢でオビラの前にその身をさらしていた。キツく縛られた手首に縄が食い込み痛みを覚える。
そんなナナエの頬にオビラはピタピタとナイフを押し当てていた。そのたびに伝わってくる鋭利な感触にナナエは怖気がつく。
「わたしを殺すつもり？　やるって言うんなら好きにしたらいいわ」
ナナエは毅然と言い放つ。
自分が死ぬのは構わない。だがそれによって世界が再び暗雲にさらされるのだけが心残りだった。
「まぁそう焦るなよ、勇者様。殺すのはいつだってできる。――それよりも、その前にちょっとばかし俺たちを楽しませてくれよ」
言ってオビラはナナエの鎧、その胸部に手をかけた。
「な……ッ！　なにを……！」
ナナエの大きな瞳がさらに見開かれる。厚みある愛らしい唇からは、悲鳴ともつかぬ息吸う音が漏れた。
「なに、って決まってるじゃねぇか。今からお前を犯すんだよ」
拘束されたナナエの鎧をオビラはナイフを使い器用に外していく。
精霊の加護をも受けた神秘の鎧。オビラが手を離すたびに、それはガチャリと無慈悲な音を立て床へと落ちる。
「やッ……、イヤッ！」
「くく、初めてかわいらしい声が聞けたじゃねぇか」
胸部のパーツを外され、鎧の下からは華奢な体格には不釣り合いな膨らみがあらわになる。インナーを持ち上げ、まるで自己主張するかのような豊かな果実。ピタリと身体に密着するインナーは、ナナエの形良い乳房のラインをはっきりと見せていた。
「さて、まずは勇者様の立派なおっぱいから確かめさせてもらおうか」
オビラは待ちきれないようにその豊かな胸に手を当てる。鷲掴みにし、五本の指をくねらせるようにして乳房を弄んだ。インナーのスベスベとした生地越しに内側の張りある感触が伝わってくる。そのたびに形を変える肉果実の弾力は彼の手のひらを充分に楽しませた。
「ツラはガキっぽいと思ったが、なかなかいい身体してるじゃねぇか」
「き、汚い手で触らないでッ！」
ナナエの言葉を無視してオビラはふくよかな肉球をこねまわす。押しては離し、掴んでは緩める。時に上下に揺らし、波打つ柔肉の動きを眺めた。
そうして次第に浮き上がってくるのは二つの突起。指先で弾くように刺激を与えてゆくとそれはさらに形をはっきりとさせ、小粒のブドウを思わせる姿となってインナーを持ち上げる。
「なんだぁ？　嫌そうなこと言っていた割にビンビンになってるぜぇ！」
オビラはそのまま親指と人差し指でナナエの先端を挟み、コリコリと強めに圧迫して刺激を与えてゆく。
「ふざけないで！　そんなはず……あ、やッ、やめッ。ん、んああぁッ！」
「はっ！　こんなエロい乳首、なかなかお目にかかれねえ。とんだ淫乱だぜ」
オビラはナナエを侮辱し辱める。

心も、身体も。
それでも彼女の精神は折れることなく断固として抗う。
「こ、こんなことで、わたしが屈するとでもッ！　あんたたちみたいな下衆の考える通りになんてならないわ！」
口元を悔しさに歪めながらも、気丈に目を細めてオビラを見据える。
「元気だなぁ、ならまずはその口から黙らせてやらァ。おい、お前らァ！」
オビラの命令を受け、男の一人が立ち上がる。旅の商人から奪い取った『魔法封じの杖』を取り出しその玉石をナナエに向けた。光を放つ杖。
それは魔法師が使う武器であるが、それ以外の者でも決められた言葉を発することで特別な効果を発揮する。
『封じろ』と告げることで対象者の口を動かなくさせ、それにより詠唱を阻害し魔法を封じることができる。
これによりナナエは口を動かすこと能わず、口淫に抗うことはできない。
「へへ、どうだい！　これで噛み付いたり、生意気な口を利いたりできねぇだろ？　まずはそのかわいいお口で抜いてもらおうじゃねぇか」
オビラはズボンを下ろし、ナナエの眼前に男性器を露出させる。
両手を頭上の鍾乳石に固定され、ぶら下がるようにして立ち膝になっているナナエ。その頭はちょうどオビラの股間の高さ。その姿はまるで自らペニスに顔を寄せているようにさえ見えた。
ナナエの視界に現れた男根は天を仰ぐように反り返り、血管を浮かび上がらせて脈を打つ。むわりと生温かい臭気が鼻を突いた。
（お、男のチンコってこんな形してるの！　それに、こんな大きいのを口にしろなんて……！　しかもこの酸っぱい臭い……）
「んゃ……ぃゃぁ……」
自由に動かぬ口で、辛うじて声を出す。ナナエは喉の奥から必死に拒否の感情を絞りだした。その目は怒りを滲ませオビラを睨み返す。
「いいねぇ、そういう反抗的な顔。普通の町娘だとすぐに諦めちまって面白くねぇからな。――おら、口開けて咥えろ！」
「ん、んんッ！」
ナナエが必死に口を閉じたまま堪えようとするが、浅黒い亀頭が無慈悲にそれをこじ開ける。
彼女のぽってりとした唇は防壁としては無力、もはや肉棒を喜ばせる口腔の一部にすぎなかった。
ペニスの侵入を拒む最後の砦、頼みの前歯も唇の動きとともに開かれあっさりと陥落。ナナエは初めて口内に肉茎が入ってくる感触を味わわされた。
（なにこれ……熱くて、硬い……！　まるで焼けた鉄みたいに……。それに、こんなに口を大きく開けないとならないなんて……！）
それが口の処女を奪われた彼女の第一の感想だった。
そして次は舌の上に乗せられた剛直の感触が伝う。
「んッ！　んぶっ！　おぶっ！」
裏スジの存在や血管の膨らみまで詳細に感じられ、これが生身の男なのだとまざまざと知らしめられる。
（ビクンビクンって動いてるぅ……。それに、所々でこぼこしてて気持ち悪いぃぃ。こんなのいやぁ……）
オビラはそのまま斟酌することなく、ペニスを喉奥まで突っ込み乱暴に腰を押し付けていった。
「んぅ、んむぅッ！　ふぐぅッ！」
「お前の口ん中、いい使い心地だぜぇ。舌のザラザラと喉奥の締め付けがたまんねぇや！」
（ふ、ふざけないでよ！　人の身体を道具みたいに扱って！　なんであんたに喜ばれなきゃならないのよ！）
咽頭までペニスを突き入れられ、肉体的反射により喉が狭められる。それは異物を拒む自然の反応だが、今だけはそれが仇となって相手を喜ばす。
ナナエが吐き気を堪えれば堪えるほど喉奥はさらに締まり、オビラの亀頭をキュウキュウと窄めあげていく。肉器官の先端からは既に透明な液が漏れ出していた。
「くぅう、思ってたよりもいいじゃねぇか。こいつはすぐ出ちまいそうだぜぇ！」
（だ、出すって……えっ？　そ、それって、どういう……ま、まさか……!?）
目を見開きナナエが拒絶の色を見せる。だがそんな表情をオビラは愉悦でもって見下ろし、さらにペニスを押し付けていく。
「そうか、そんなに俺のを飲みたいのか。いいぜぇ、たっぷりくれてやるよ」
オビラは決して逃すまいとナナエの後頭部を両手で掴み、ガッチリと下腹部へ固定した。
「おらぁ！　いくぜッ！　全部飲めよぉッ!!」
どびゅッ！　どびゅッ!!
どびゅびゅびゅびゅッ!!!
ナナエの咽頭に白液を打ち付ける。ナナエは精液の味を感じる間もなく、直接体内に熱き液体を注ぎ込まれた。同時に喉を通じて青臭い匂いが鼻腔に伝わる。
（いやああぁぁッ……！　熱いぃ！　臭いぃぃ……！）
それでもまだ勢いは止まらず、あまりの息苦しさにナナエは身を捩る。一度に飲みきれないほどの白濁液を放たれ、必死に空気を求めて口を開こうとする。
「んげほぉッ！　ごほ、ごほぉッ！　んんんッ、んぶうぅぅぅ！」
「逃げんじゃねぇ！　飲み終わるまで離さねえからな!!」
最後の一滴まで搾り出すようにナナエの口内に放出し、オビラは彼女の鼻を摘む。それは白液を飲み込むまで呼吸を許さないという意思表示。
（いやぁぁ……やめてぇ……。こんな物を……飲まされるなんて……。でも、

居たぞ!!
捜索願の出ていたBクラス冒険者だ
ザッ
ザッ
ザッ
ザッ
まだ生きているぞ!!
ぐちゃぁぁぁ
若かりし頃の過ちは少女を大きくする
ぴくッ
モンスターの苗床にされたのか
後遺症が酷そうだ…
この身体じゃもう冒険者稼業は続けられないだろう…
可哀想に…
ゴボォォ
冒険の書は消えました。
漫画 COMIC 冥土黄泉(めいどよみ)

あれから
5年後…

中級冒険者(Bクラス)だった
女の子スフレは
ダンジョン攻略を辞め

小さな商店を開き
魔法のポーションを作って
暮らしていました

しかし…

このポーションの
材料…

確か…

身体に施した
魔法力増幅の
入れ墨

これがあれば
初級ダンジョン
くらいは…

ダンジョンに
潜らないと
手に入らない
アイテム…

なんて考えたのが間違いだったか

ここで待ってればいつか来ると思っていたよ

スフレちゃ～ん

お前は…

あの時の…!!

覚えていて
もらえて光栄だよ

俺のペットの
苗床になった気分も
まだ覚えてるのかな？

アンアン ひぃひぃ
喘いじゃってさぁ

貴様…ッ!!

ドガッ

あ～
ダメダメ

魔法ってのは
ただ撃てばいいって
もんじゃない

バチッ

相手の弱点（トラウマ）に
合わせて

バチッ

急所を的確に

撃っ

ああああッ!?

雷魔法苦手だったよね

パシッ

パシッ

そりゃそうさぁ俺が散々撃って調教してやったんだから

ピクッ

ピク…

ん?

ぶるんっ

あらまぁ5年で大分成長しちゃって

また苗床にくれてやろうと思ったが

家畜サマごときには勿体ない乳だねェ

グニィッ

もう反抗する気が起きないようにこっちにもお仕置きしておこうか
コリ
コリッ
ああッ
ビクッ
あっ♡
あッ
あがっ♡
う…ぅ
あ…
甘い声出ちゃってる？
ビクッ
ビクッ
ビクッ
これじゃご褒美になっちゃったねェ
まぁそういうことなら
遠慮なく頂いちゃいますか
ペロッ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/